

2



* 0001599000 *

0001599-000

304-Ki294s

上海事変のその次の問題

北村佳逸・著

改善社

1932

AAC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日
付けて文化庁長官の裁定を受け使用するものです

乞高評

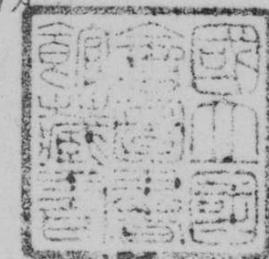
大阪市北區中之島(築前橋北入)

北村佳逸

北村佳逸著

上海事變
の、その次の問題

改善社發行



304
Ki294A

30136

序文

いつ東洋に平和が訪づれるかの問は餘りに素朴である、或は僕らの一代に平和を見ることがあるまい、バランスの回復されるまで僕らは千波萬波の中を泳いで暮すのであらう。

特異にして覆面的な勞農思想、變態にして消極的抵抗の強い支那の小我外交、歐洲が世界指揮の權能を離された末期、米國がこれに代るか否かの決定點、白人の眼に映する日本の小づら憎い横面、白人禍防疫線上に立つ日本、列國憎惡の中に反國家思想を一掃した日本意識、問題の總てに絡まる經濟の動き、そんな脈絡の有るやうで無いやうな問題を再吟味したものが、この本である。

本の中味は讀んだらわかることであるから、この序文一頁は紙と筆と讀む時間と書く時間との浪費であつた。

著者

次 の 問 題

目 次

| | |
|----------------------|----|
| その一 日本を英雄的人格に仕上げよ……… | 一 |
| その二 日米戦争の原因とその本質……… | 三 |
| その三 生活の破壊から戦争へ……… | 四 |
| その四 退屈から戦争へ……… | 六 |
| その五 戰争史觀……… | 七 |
| その六 財閥と戦争との關係……… | 三五 |
| その七 馬と電氣と戦争……… | 三五 |
| その八 戰場としての支那……… | 三五 |
| その九 貧乏と盜賊と戦争……… | 三五 |
| その十 滿洲新國家……… | 三五 |
| その十一 米國の挑戦ぶり……… | 三六 |

上海事變
の、そ の 次 の 問題

北村佳逸著

A
その一 日本を英雄的人格に仕上げよ

生産品の滯積と僕らの需用とは何の交渉もない、切れ々の全く別物である。人を貧乏にしておいて品物を買へといつても無理な話で、裸になるまで搾取しておいて織物を突きつけても貨幣の仲介なくしては一センチの右だつて賣つてくれないではないか、それを買へ買へないと争ふのはナンセンスな押問答だ。生産品が國民の購買力を超えた時は、もはや資本家も利潤を得ることはできない、仕方がないから國外へ押出す、國外から押し返へす、どこも

こゝも商品で一ぱいである。必要な品物を選ることのできないほど生産物が滯つて人に使つてもらふための品物が人に使はれないで腐朽してしまふ。綿花栽培は肥料を得る目的ではないが綿花を埋めて肥料にする、コーヒーの本質目的は煙ではないが焼き棄ててしまふ。コーヒーは天産物であるから多くとも自ら限度があるが、限度のないまで調子に乗つて造られるものは機械製品である。

どんな景氣が順環してきても、金が活潑に廻轉しても齒車の速度に及ばない、人間の需用を顧慮することなしに機械は廻轉するその結果は？ 現代の資本組織を誦歌する學者たちは何とか御用辯論を考へ出すであらうが、こゝまで詰つてから今さら學究的講釋を傾聴してはならない、現實から見て、結論は割合に平凡だ、平凡だが物事を、十年ごとに破壊せねばならぬ、破壊とは戦争である、戦争は必要である。

B

洋服を新調した人が二三日して仕立屋に小言を持ち込んできた、相當に金をかけて作らせ

た洋服のポケットがすぐ綻びたといふ——それはマツチ會社の社長であつた。其ポケットには五十個も百個ものマツチを詰め込んだのであるから、ポケットの包容力以上のものを包容させた無理から出たもので生産量が消費力にオーバーした時には破綻は必然である。なぜもつと大きなポケットを作らなかつたかといふ不平は正しくない、それを二倍大にしたら彼れは三倍の生産物を詰め込むであらうから結果は同じことだ。人間の力で造るだけは人間の力で消費される自然法則であるが、供給の方には人間力以上の機械が働きかけてゐるに對して受身の消費は人間力だけで何の應援もないから堪へ切れなくなつた。ポケットのマツチが使用し盡されねば次のものは這入らぬ、それまで不景氣は續く。ポケットが空になつて暫くして必要の起るまで待たなければならぬといふ約束もないのに、何がために人類が機械に脅威しての後のことである。

背中にまで大きなポケットをつくつてマツチで身動きのできないほどの苦しい中から彼はハンドルを握つてマツチをつくる機械を急速に運轉してゐる。

機械の運轉を中止せしめてはならないといふ約束もないのに、何がために人類が機械に脅威

かされて周章狼狽の痴態を演ぜねばならぬか、分配法を訂正しないで銘々に一ぱいの能率を機械に強いてゐる、慾から出た淺ましさである、慾は人を争に追ひ込む。

こちらの國で生産の調節をしても、あちらの國で調節しなかつたら、こちらの國は破滅する。兩方とも調節しなかつたら兩方とも破産する。そこで戦争となれば、どちらか一方が助かるから兩方とも潰れるより五割の得である。

地球上に國を成してゐるものは皆生きようとする。死ぬことは何でもないが生きて行くことは並大抵ではない。他のものを掠めて生きようとする種族もあり、土地が生存に適しないために悪いと知りつゝ盗まねば生きて行けない民族もある。かやうな民族には強いそして餘力ある國防を要する、國防とは居ながら守るだけではなく脅威を除くため進んで攻めるのもそれである、自衛権といふ體裁のいゝ名を考へたものは智恵がある。

C

自衛権は何を僕らに教へてくれたか……翻然として心を改めよ。

吾々は道徳に憑かれてゐたのであつた、僕らが教はつてきた傳統的倫理は、嘘をついてはならぬ、人を愛せねばならぬと、信と愛とが全身に絡みついてゐた。信愛すると、しないとは自分の權利であるものを、どう間違つたものか、それを守ることが義務であるとして育てられてきた。

他人を信愛する、それはいゝことだ、だが、それは自分の權利である。他人が自分を信愛せよと僕らに命令する權利はないはずである、日本が米國から信愛を強いられる義務のないと同じことである。

信愛は交際の基調であるが移民を拒み、排日をやり、關稅壁を築いて他國の商品を突きかへす、その相手に向つて信愛のスマイルをもつて打つてかゝることは道徳に囚はれた憐れな友人である。友人ではない、ことによつたら隸屬である。彼は日本をして自分を信愛せしめる命令権を持つてゐる、なぜならば歴代の外交官が信愛権を捧げたからである。

彼は精神的に貢を要求する、國際會議の開かれるごとに日本は信愛税を仕拂つてきた。これは信愛でも何でもない、むろん正義でもない、もし僕らはそれに代るべき適當な言葉

を見出すならば早速それを使ひたいと思つてゐるくらいだ。

信愛は國際的に仕譯られる、支那に對してはこれだ、日本に對してはあれだ、英國に對してはそれだ、共通のできない信愛である。

世界主義とモンロー主義、國際主義と東洋主義、主義にも地理的區分がある。建國の精神が違つたら國によつて道徳の解釋を異にする、大和魂、ヤンキーハンブル魂、魂にも國籍の堅い穀をもつ、榮螺のやうな魂であるが、榮螺より強い人間が漁獲して、その穀を利用して壺燒としたら國粹の堅城も割合に脆い、だから引込み思案はよろしくない。

正義と、一口に、何でもないやうに手軽に取扱はれてゐるが、正義の本體は何から構成され、どんな働きを爲し、どんなことを要求するかの研究に就いては、これまでの道徳家の下した定義に對して僕は抗議する、分析せねば氣が濟まない科學時代に、こればかりは神秘な丸薬として丸呑みに呑み込んでゐる人の心が僕にはわからないが、それを論究するのはこの文の本旨ではないから米國製の坊間正義で、正しい本質を捉へることなしに筆を進めるに於する、たゞ知つて置かねばならぬことは正義は時と處と人とによつて正體を變へることで

ある、眼前の正義は明日の正義ではなく戰場の正義は教會の正義でなくラテンアメリカ人の正義は北米合衆國の正義ではない、從つて合理的でなく機會的のものである。

兩虎相鬪ふ、どちらも正義であり又どちらも正義でないともいへる、日本の正義と米國の正義と太平洋の眞中で衝突した時に、どちらかゞ墜落する、勝つた方が正義であるとは道徳的に斷定はできないが負けた方が不正義であると實力主義では押し通せる。

正義といふインチキ道徳の片割れに、も一度強力な探照燈を浴せてみやう。
彼は強いて我に正義を守れと命ずる、たゞ正直にそれを守つてゐたら、どんな目に逢ふかも知れない、國家でいへば裏口にまで突き落される。神さまの中に貧乏神が交つてゐるやうに道徳の中に怪しからん正義が交つてゐる、正義は教へる、平和が續く時は國民の進化が滞る、この薬を飲め！ この薬とは急激な下剤である、戰争で禮貨を一洗して新鮮な活動物を送り込めといふのだ。

人生五十年の生涯の中で戦争又は戦争準備は重要な用事の大部分を占める、戦争は又歴史の重要な頁を塞いでゐる。衛生、保健、育児などは建設的であるともいへるが戦争はその反対の仕事をして、一の戦争には少くとも十年以上の準備を要するから文明人の一生は殆んど戦争を絶縁する暇はない。戦争は人間生活の最も飛躍した頂點であると同時に經濟的にも週期ごとに通過せねばならぬカストムハウスである、この税關で血の沐浴をする。

一國の利害と全人類の利害とは相一致しない、國家を超越した全人類の福祉が果して存在するものとせば、たとへば軍備の全廢といつたやうな案が、なぜ國際會議の基調とならないであらうか。そんなことをしては資本主義國家が私利を圖る餘地がないからであり社會主義國家だつてその行はることを知つて資本主義國家の結束を亂さうとする戰術であり、どちらも權謀であつて正義ではない、正義は却つて軍備擴張の中にその回答を求める。

戦争は詰らないといふ、これは採算から出た詐らざる聲のやうだが、その實は詰らないことはない、勝つたら割に合ふ社會活動であるがゆゑに千年も二千年も前から強い民族的支持を受けて、今でも、將來にも尖端は愈々尖る。

小學校時代から席次で競争する。上級學校の入學試験で、就職で、排他力は發揮し満身みな攻撃である。日本のやうな土地の狭い人口の多い國は、さうでなくては生活の市街戦に勝つて生きて行くことができない、政黨の下積から幹部にのし上るに何人かを蹴飛ばして進まねばならぬが、これは資本主義國家も社會主義國家も共通の不道德生活である。人民委員になるまでにどれだけの競爭者を突破すればならぬか、百萬長者になるまでに何百人の人を破産させねばならぬか、代議士でも大臣級になるまで何人の相手を落選させたか、財閥を築きあげるまでに何萬人のルンペンを造つたか、大將になるまでに何萬人を殺したか、英國が今日の大を成すまでに何度の大戦を経てきたか、又たゞ今日の大を維持するに將來に何度の大戦を経過するであろうか。彼は島國で市場、原料の擴大を要したから歴史に花々しい戦争の記述を残してその目的は達せられた。もつと突込んで説明することもできる、文明の大國家となるまでに戦争は主要な發展力を成し、その代價、その智慮、その重大さにおいて國家主

要機能の何物も戦争に及ぶ活動はない歴史に現はれた人物はみな競争の優者であり征服者であるが、特に武人に至つては道德心の薄さと、位地の高さと、敵を殺した数とは脈絡を引いてゐる。

戦争が偶然の原因によつて誘發されるものとするのは誤りであつて僕らが三歳の幼稚園時代のランニングから死に到るまで身中に蓄積せられた規則的出来事である。それを突然に競争をやめよ戦争をやめよといつたとて今さらやめられるものではない、なぜならば今日のやうに競争が激化しなかつた時代には運命といふ、人間ではどうにもすることのできない無形の力の命ずるまゝ従順に服従してゐても生活はできないことはなかつた。しかし僕らは運命の魔流に逆つて世を渡つてきて、文化といふ何人の力でも醇化することのできないほど潤りに潤つた社會を建設した。平和、正義の觀念は稀薄な、殆んど氣體のやうになつたに對して殘虐、暴動の主張が鐵の堅さと冷たさを持つて惡る固まりに固まつてしまつた、物質的には青銅時代から鐵の時代に推移して戦争用の兎器は、その正確さを百倍に擴げて人類の利用を待つてゐる。

F

ガス體のやうな嫌なものが濃厚に世界を掩うて僕らの視野を暗まして、強い毒素を含んで息苦しい。何か一大秘密がそこに隠蔽されてもゐるやうな豫感がする、果して、その下には各國の縱列が戦争の道に一直線に行進してゐるのであつた。

帝國主義戦争はその鉄路をでくるだけ長く隠蔽して、その通行についてては國民の耳目を欺く、どこに、いつ、どんな準備が整へられてゐるか、準備完成の時機も構成の形態も想像だけに止まる。そこへ突然に勧員令を下すのであるから、それから遽て國民は賛成を表す。帝國主義構成の一員である限り大砲の音で始めて戦争を知つて、突嗟に舉國一致に固められる。僕たちはいつでも緊張して待機狀態に置かれる。

今日の日本で戦争の根絶策をひねることは實際政治家には一人だつてあるまいと思ふ、なぜならば政治家も財閥も宗教家も教育家も企業家もそれ自身が戦争でできたものである。讀者諸君も著者自身も戦勝によつて人口増加が維持せられたための產物で、戦争に負けてゐ

たら今ごろは被壓迫國家として發展を阻止せられ僕らの父祖は產兒制限を餘儀なくせしめられ、お互にこの世に存在してゐないかも知れない、存在しなかつた方が幸福であつたか不幸であつたかは閑な時の思索に任すとして戰勝を経てゐなかつたら國家としての日本は印度、フキリツビン以上に氣の毒な境遇に置かれてゐることは争へない、僕らの父祖が自分の働きから勝利を抽出したこととは偉大であつた。どんな頭のひねくれた平和論者だつて負けたより勝つたが好からう、勝利の嘆美者は僕だけではあるまい。

G

戦争、盜賊、貧乏の三大文明病を絶滅させる對策を持たないものは政治家としても學者としても資格のない人物である、その中どれでもいゝが一つだけでも何とか片をつけるものがあつたら人間以上の傑物である。歴史は同じことを繰返へしてゐるとはいふものゝ同じ位置に佇立しないで時とともに前進してゐることは否めない。しかば平和に向つて進んでゐるか戦争に向つて進んでゐるかといへば、眼先きは戦争の必要に突當つてゐるが、長い前途の

大勢からいへば平和に向つて動いてゐることが歴史の眞の姿である、なぜならば大多數の無勢力な人間は戦争より平和を愛好してゐるが、昔ながらの頭をもつて戦争を追慕してゐるのは少數の活動力のある人のみである。

もし戦争ができないときまつたら人類は退化して文明は淨化しない、平和論者を見たまへ人間がにやけて勇氣がない、同時に感激がないから墮落する、不道徳になる、戦争も不道徳であるが平和は軟性的に慢性的に不道徳である、國家の健康状態を維持するには戦争は、少くとも戦闘準備は有つてもいい。

エスキモー、アイヌ等の退化民族は戦争から絶縁された、ノールウエー、デンマーク、オランダ等もやがて文明の第一線から退くであらう、しかし激烈な國際競争で摩擦されてゐる日本國民に較べて個人的の幸福はどうやら在るかの研究は暫く置いて、戦争のない國は文化の痕跡が極めて薄い。

H

機械工業の進んだ國は貿易の外から資本、商船、戦争といつた附屬物を抱えて進出せねばならぬから戦争は國家活動の主役を演ずる、武力のない國は必然的にその席次を他の國に譲らねばならぬが、一たび譲つたら今まで自分が居た席を他人が占領して、更に再び譲れと迫る、二たび、三たび、ついに坐席を失つてしまふ。

貿易は有無相通する原則の上において必要なものと認められるが、列國が自給自立を考えるやうになつてから必要の原則が解消した。貿易に軍艦が尾行するやうでは貿易ではない、惡魔の交換である。必要が行き過ぎたから不要になつた。産業國同志の貿易は未開時代に逆轉して日米間においては生糸對綿花といったやうに物々交換と何の違ひを見出さない。

自給自足は明かに退歩である、退歩したあとに國粹主義が軍人を隨伴して現はれる。關稅で他國の製品を拒むことは労働對労働の抗争である。日本は勞働者が造つたものを、國內の労働者を保護せんがために米國は排斥する。同じやうに日本が米國労働者の製品を排斥することとなつたら資本對資本、資本對労働、労働對労働の争ひを激化する。従つて労働者が祖國の労働のために戰場に立たねばならぬ。

思想的には他國の倫理を排撃し、正義觀念でさへ國粹運動によつて原形を備へないほど訂正された。強制的に國論を統一する便宜はあるが精神的に文化は停頓する。

飛行機が米國の戦闘力であるならば唯物論はソビエートの武器である、唯物論は研究室から出て立派な兇器に造りあげられた。日本には飛行機を恐れる一列と唯物論を恐れる他の一列とがあつて、一はモスコーキーへの道を塞ぎ他はニューヨークへの通路に柵をした、この二つの合體が國粹主義となり恐怖感念の上に舊い思想を新たに喚び起した。

米國は物質的科學的に戰勝の要因を握つたといふ自信をもつて日本に臨む、これは納得できる自信である。文明國の軍備が極度に精鍛された今日では奇襲によつて勝を占めることが期待できないから戦闘力の統計が結論を産む、この點において米國は大いに誇つてもいい紙上で誇つてもいい。支那でさへも戰争に負けても外交で勝つ自信は持つてゐる。ソビエートにすれば思想で勝算を樹てゝゐる。

たとひ勝味はなくとも喧嘩もすれば戦争もある、それは勢ひである。まして勝つ目當ての
あるものが外交に譲歩しないことは當然で、戦勝國の帳簿には次のやうな科目が列べられる
優越感の充足といった抽象的なものを除外して、土地割譲、通商路の進展、金錢賠償、掠
奪物資、食料原料その他兵上の重要地點の占據、その中のどれ一つとして貪婪民族の奸計
でないものはない。しかしそれ等は昔から存在したものであるが現代的傾向として附加へ
られる重要な利益が二つある、第一は無形的なものではあるが戦争による思想の動向転換で
ある。

國民をして一致して國內相刻の憎悪心を外國に向つて集中せしめることによつて内亂を救
ふことであつて、國內事情による外國攻撃である。自己國民に恐怖を煽揚することによつて反
國家思想を解消せしめ、尙ほ頑強に反抗するものは國家非常時といふ名の下に戒厳令を布き
平時ではでき難い大清潔法を施行する、これによつて國內の騒亂を未然に防いだ例はこれま
でには少かつたが、これからは續いて現はれるであらう、であらうではない、きつと現はれ
る、斷定的だ。

近代抗争觀念から開戦の原因に數へられる第二の動機は商業である。これは新らしい原因
ではないといふ人もあり、大戰以來各國が自給自足主義を固執するやうになつて始めて貿
易が戦争の新らしい原因を尖銳化せしめた。

」

「日本戦争が始まるさうだ」

「それは面白からう、観覽に出かけやうぢやないか、どこでやるのだらう、外苑か、甲子園
か」

「いや、太平洋の真中だ」

これでは見物に出かけられない。

新聞がスポーツに刺戟的な兵語を使ふから日本戦争を野球と取りちがへたのである。スポ
ーツが本來の目的を誤つて健康を忘れて勝負に走り、商業がその本質を離れて貿易即戦争となつた。飛んでくるものは硬球ではなくして重爆である。野球のやうな不眞面目なものとはち

がつて、平和を享樂しないで血をかけ合ふ。

こんな危険な運命が、なぜ日本兩國民の上に割賦されたかといへば、機械が無理に生産を高め、高まつた生産品が賣れないで國內市場を埋めるからそれを疏通させるがために冒險的にまで外國に逐ひ立てるのである。これではどんなに平和を愛好しやうとしても戦争なくしては済まないとふ感じが起るのは當然である。そんなことを考へて跡を踏んでみると後から動力が殺戮へと押し出す、兩國とも戦争の重大なることを知つてゐるから容易に起つたない出脚が週いから緊張状態を續けたまゝ今日まで引つばつてきたものゝ形勢は曇つてゐる。

自給自足は排他主義であり、それを擁護するものは高關稅である。他國の物資を買ふまいとする國民に、強制的に商品を突きつけるのであるから武力を伴はない貿易は成立しない。こゝに平和の商業と武力の戦争とは首尾の區劃が甚だ不鮮明になつた、商業が進んだ形態は戦争であり、戦争が終つたら貿易が始まる。

戦争のない時には貿易によつて經濟的通路を開拓し弱資本を蹂躪しながら猛進を続ける、國外における掠取は、國內において労働者から掠取したもののもつて廉賣戦の資料とする、

戦争となれば無產者層が前線に立ち平和の時代にはブループルをして生産機關の所有保存を圖らしめ労働者をして平穩に機械の前に立たしめ、最大量の利潤を國內需用から集めてこれを金庫に納め、更にこれを再投資することによつて原料生産地域を獨占し、並せて消費市場をも獨占し、消化し切れないものを提げて貿易戦に臨む。

その取引が最高度に達する前の勾配において、すでにトラブルを起し、紛糾した解決を戦争に求めるやうになる、強國は平和には貿易掠取、戦時には武力掠奪を敢行する、さうではなくては高度の生活標準を維持することができないのである。英米が維持するに骨折つてゐる「高度の生活標準」が罪惡の基礎である。それがために商人と軍人と、戦争と貿易とはその根本において同一の動力で動かされてゐる。

武力のない貿易はダンピングの形式を取る外に活路はない、それさへ米、佛、英は廉賣防止法で峻拒する、ソビエートのやうな國家の労働統制の下においてのみダンピングは可能であるが、その他の國においてそんな事を続けたら産業は衰へて結果は戦敗國と同一である。戰ひに敗れたら國際的經濟封鎖以上の慘状に陥つて貿易が先づ擰ける、日本のやうな國狀で

あつたら食料さへ得られない飢餓に顛落してもそれを氣の毒と思ふほどの情説の發動は高度生活標準維持者には望めない。

憐みを乞ふほどの無氣力でなかつたため日本は滿蒙に進出した、國民は狂喜してゐるが狂喜する前に前途の多難を考へねばならぬ。朝鮮でさへ内地とは結合がまだルーズである今日に、たゞ手を扇のやうに擴げただけでは喜ぶことが早過ぎる、タイトに結束して一形體を仕上げるまで滿蒙は日本に取つて却つて荷厘介であるが、出られる時に出て置かなくては、出られない時には幾らあせつても出られない。

K

これまで日本が上海に出兵しなかつたことは、出兵を斷行したよりも驚くべきことであつた、出兵は寧ろ遅かつた、永く隱忍してゐたことは遠慮に過ぎてゐた。重工業に縁のあつた内閣が軟弱外交で、地主と密接な間柄の政府が積極的であるのは外國人からみたら經濟的見地から變調であるやうに思ふであらうが、日本の國是は總ての階級が一本調子に踊るので

ある、東洋保全のステークに立つについて、日本は支那の眼が必要なのだ。
どこまでも親善を押付けねばならぬ、武力も厭ふところではない。或は親善戦争が起るかも知れないが、それも仕方がない。こんなに時間が押詰つてからは眼前の事例と縁の深い學問的説明はすでに時機を失してゐる。

こんな不合理な國交は何とかしなければならぬと説を立てる人の意見を傾聽すれば結局はマルクスの受賣りだ。遠い外國人の昔の智慧を借らないでは結論のつけられない人、競争に堪へられない人、國際協調ばかりを苦にしてゐる人の屁理窟は、實際家の前には空氣の塊に過ぎない、それを圓形化したら一個の戰争に落ち付く。
英雄主義は面白いから大衆に政治を與へやうとして代議政體を樹てたが、理想とは似てもつかない畸形政治をつくりあげた。この鬱陶しい現状打破するため——世界的依存關係は認めるとしても——國家主義、民族精神に立脚した一單位を東洋に建設するには、日本といふ國家そのものを英雄人格に仕上げねばならぬ。

その一 日米戦争の原因とその本質

A

どんなものでも勢力が強くなると勝手な個性を表現する。動力が始めて用ひられた時には人間の手傳ひの外に何の野心をも抱かなかつたが、動力のために人間の労働力が一とたまりもなく征服せられたのをみて、人間がくみし易いと慢り始め、米国人を手先につかつて動力世界帝國を建設する羣衆は勢力をもつて相戦はしめやうとする慘酷な遊戯に取りかゝつた。

動力は先づ機械を媒介として人間がどれだけの合理化に堪へ得るかをテストしたら、四分

一世紀をたゞないうちに人間が悲鳴をあげて失業した、それをみた動力は人間を憐む代りに人間を侮つた、そして人類をして相戦はしめやうとする慘酷な遊戯に取りかゝつた。

戦争は動力のいたづらである。人類が相聞はねばならぬ原因は機械から流れ出る。戦争は人間生活の一時的錯誤と稱せられたが動力が用ひられての後は「戦争は人間生活史の必ず進んで行かねばならぬ順路における阪である」と修正された、現在から未來へかけて人間は戦争をやつてゐるか又は戦争準備中に生活してゐることになる、將來において戦争らしい戦争をするものは動力をもつ文化人のみで機械を持たない未開人は國家的投機を行ふだけの社會力を持たない。

録は草を刈る農具として、弓は鳥獸を狩る獵器として發明されたが、古代人はそれを戦争に使用した。文化が進むに従つて武器は殺人専用となり軍人が破壊専門家となつた。農村部落は祖先、風俗、習慣を同うして群居したものであつたが、文化都市はさうではない、經濟上の共同利害から集團を成すに到つたものであるから防禦と掠奪との目的で結束せられ易い土地、珠玉、眞物、分捕品は古代戦争の目的であつたが、市場、原料、貿易路線、賠償金、そんなものゝ合計である戦勝利得といふ誘惑は強い力をもつて市民を戦争に引つけれる。貨幣といふ手軽な掠奪物の目的ができるから誘惑力は一そう強くなつた。その外に後か

ら戦争に推進する大きな力が二つある、それは産院の産褥の中から進めといふ婦人の號令＝兒を産めば人口は増加する、人口増加は國家の膨脹を要求する＝と、もう一つは機械による滯貨山積の始末である。

戦時利得は興味と慾望とをもつて輓き、分娩と滯貨とは男子を推して戦場へ向はしめる。

B

機械は急速な行動に對する利便を人類に提供する、衝突しても九箇月間は戦争手段に訴へることができない——聯盟規約第十二條——といった悠長な戦争が、現代の速戰即決主義の下に行はれるものではない。文明人とはそんな遲鈍にして律氣なものではないから規約はさうなつても規約の間道を通して九ヶ月は愚か九十日でも九日でも九時間でも、瞬間にも公式でない戦争が始まるのである。非公式とは宣戰布告をしないだけのことである。機械は拙速主義だから、戦争ではなかつたが戦争に類した事變は、日蓮宗の坊さん一人を殺したのをきっかけに一夜にあの國際騒動を捲き起した。戦争は屁の如し、國際人種座の中でも九ヶ

月もこらえてゐられない時がある、御免を蒙つて大砲の一發を撃ち出さねばならぬのつびきならぬ場合もある。

不戦條約印國といへども獲得すべき目的物が一つであり互議のできない理由を持つ戦争者が二つ以上ある時には武力解決の外に何の解決法もないことは暗々裏に承認して除外例外の請求を認めてゐる。國際會議に依頼して心から平和を求める國は機械を持たない、戦闘力を持たない、文化を持たない、動脈硬化の老朽國家ばかりであるが新興の意氣に燃えてゐる國は、どこまでも強い拳骨を表面へ出さないでヴエルヴェットで柔かく包んでゐるのであるいま形勢は一變した、未來の一頁は過去の一冊より意義がある、僕らは不戦條約を後廻はとして僕らの面前に置かれてある戦争の卵を注視しよう。

戦争を二つに分類する、階級上下戦と水平戦である、支配者と被支配者との争ひは××によらねば解決はできない上下戦である。過去の歴史においては殆んど重要視せられなかつた内亂であるが近代社會運動史には重點を置いて取扱はれてゐる、歐洲大戦の末期には到るところに戦はれた。

その二は帝國主義國是の進展による平面戰である、すべての文化國家はその方針を確保し延長せんがために武力を養ふ。外交によつて相手國を油斷させ武力によつて國策を押し付けるから外交手段は戰爭から戰争までの息つぎに過ぎない。武力のないところに外交はない。國是も國策もない、形體はあつても或は國家が無いともいへないことはない。消極的な正義を振り廻はしてゐる國家は國際會議にも發言權はあつても聽くものはない、外交の後に大仕掛けな殺戮機關が物をいふ。

C

文明は戰爭を解消するといふ哲人の意見は道理らしく耳に響き、平和の外面をかぶつた穏やかにして人を魅する言葉であるが事實はその反対で野蠻國には戰争がないといへる。平和は理想の殿堂である、理想であるがゆゑに基礎の弱い存在である。感情的平和論は夢幻のうちに聞き流しておくべきもので、それを信仰したら大變である。流行帽をかぶつてゐるがその泥靴はどうだ、彼は頭ばかり發達して脚もとの現實を忘れた。

平和が永く續くときは學理では分析のできない神祕な固形物に相當る、滋養に富んだ運動物ばかりを攝取してゐる金持ちに起る胃痙攣である、基督教的平和説を信じて防備を忽せにした國は酷い目に逢ふ。

歴史から觀た時は戰争が社會主義の脊梁であつて文學、藝術、宗教等は枝葉の追加物たるに過ぎない。文化の中核活動の最高點は戰争である。國家危急の場合以上に崇高な犠牲的精神を發揮する機會はないが、その秋に戰争を回避したものは非國民であり、その反対に慄瘞で働いたり軍資金に應募するものは人間として正しい道を履むものと認められる。この非常道徳に對しては理論的爭闘の餘地は存する、理論を幻影に求めたら論議は永らくからそんな閑人の相手になつてはゐられない。僕ら日本人は十年の平和に狎れて進取の氣を失つた空隙は大きかつたのを滿蒙と上海事件で填めて、これから新たに引緊まつた氣分で出發せねばならぬ。日本は國が小さいだけに、どつしりとした大陸性がなく東洋の盟主たる貢祿がついでないから支那を威壓するに足らない。僕らは弱い多くの力を要しない、強い一つの力を要する。總ての力を日本人格に集中して、それを擔いて動かねばならぬ。

銀幕に映する戦争を見ても、悲惨な、眼をあてて見てゐられない殘忍な光景として顔を反ることの代りに、活潑な、素晴らしい劇として、眼を刮つて身を乗り出すではないか、それほど少年時代から慘虐に對する訓練が行はれて野獣性を注入されてゐる。戦争において野獣性と勇氣とは切離せないものであるが、その二つは同一のものではない。

たゞ史観的に、歴史は繰返すといふ陳言を盲信するのではないが、社會生活の順序を追つて數學的の徑路が僕らを戦争に導くのだから避け得られないものである。レーニン一流の觀察によつても、貿易の經濟的進展による競争的葛藤から外交上の抗争となり、武装となり、未開國民の擷取——西洋から東洋へといふ動きが遠算なく来る、これは正しい觀方である、ゆゑに東洋國を建てる以上は西から求めてくる戦争を回避できるものではない。

鐵山を發見する、鐵道を敷設する、河川航行權を得る、そんな度毎に貿易前線は國旗ともに進む、獨占を確保するために移動的には軍艦、固定的には要塞が後盾を爲して主權は推

進する。

E

日本は滿蒙を開發するために鐵道を要する。人口の捌け口として居住權、それに附隨する治安權及び教育、宗教の施設を要する、森林も礦物も、牛も羊も棉花も必要である。英國のやうに廣汎な擷取地を世界に涉つて持つてゐるのではない、たゞ滿蒙のみに生活が依存するのである。しかし米國はそれを喜ばない、干涉によつて原状に復せしめるか、反対に獲物の分前を強要するであらう。日本は門戸開放の名において××を××せざるを得ないのである。米國はパナマに、ハイチに、キューバに何を要求したか、日本が滿蒙に求めた以上の或る物を獨占して、その分前は決して均霑せしめなかつた。

最近において日米戦争が三度あつた、戦争の定義は必ずしも流血を伴はないからその意味においても今も尙ほ引續き戦はれてゐる。第一回は九ヶ國條約で延いて日英同盟の廢棄となり廿一ヶ條の骨抜きとなり日本は明かに負けであつた。次が海軍々縮會議で比率で縛り

あげられた、その間に山東も日本から離れてしまつた、排日によつて日本商品は擊退された。その次が國際聯盟會議で局外者である米國が參加して日本を押へ、今に尙ほ押へつゝある。

戦争の目的は自國の意旨を相手國に押付けるに在るから必らずしも發砲がその役割を演ずるものとは限らない、時としては發砲以上に威力を發揮する方法を用ゐることもある。文明國相互の對峙は一時の亢奮感情による格闘よりも、利害の打算と彼此の戦闘力の比較計算によつて勝敗の數を豫見し、戰はすして外交の機上において勝敗を決定することを有利とするなぜならばその方が犠牲者を出すことなくして弱者を退譲せしめて自國の目的を達することができるからである。日本は讓歩に次ぐに讓歩を重ねて今では最後の一線に止まつてゐる、これ以上に退却すれば後には千仞の斷崖がある、これが生存権である。これだけは利害損得の打算を超えて固守せねばならぬ、もはや戦闘尺度の長短を論じてはゐられない線上に立つ。

日米戦はどちらの勝利になつても相手國に對して破壊行爲を極度に發揮するだけの力はない、従つて犠牲の大きい割合に得るところは少い。その上に双方とも資本主義國家であるから思想的に憎惡の根本原理が弱い。

敵國から明かに決戦を求められたら、一方はその條件を受入れて降伏するか、敢然として對抗するかのどちらかを擇ばねばならぬが、米國は暗黙の間に警告といふ形式をもつて戦を挑んできた、武力があるから警告には權威がある。

野蠻人は個々における強き闘士であるが文明人は集團によつて始めて強くなる。勇氣において及ばないところは智力で補ふがゆゑに智能の高度な國民ほど戦争に強いといふ歸着になるが、實際においては戦争には危険が伴ふ。文明人は危険を恐れる、危険を恐れる心は、やがて戦に敗れる原因で、たゞ膽力のみがそれを克服する。膽力は國家のために死を決した時より落付いたものはなく、名譽心から起つたものと利己心に基いたものは最も弱い。砲術に精しい人でも膽力がなくては命中しない、操縦術に巧みでないものでも勇氣によつて敵機を射落した例は歐洲戦争にもあつた。金と機械とだけで雌雄が決せられるものなら日本は戦は

すして米國の前に跪拜するを賢とする。

米國の強味は新銃の飛行機と完備した軍艦とに在る。日本の軍部が新式技術部隊に支拂はれる豫算は米國の五分一、僅かに五千萬圓強に過ぎない、これを充實しないで日本の軍人に向つて勇氣と愛國精神によつて勝利を保證せよとは餘りに無謀である。技術部隊はいくらでも金を喰ふから平時においては浪費者であるが戦時における最尖端部隊である。日本の豫算が少いのと大官連の頭が古かつたために時代おくれの兵器が整理されないので、まだ有効な武器として帳簿の上に残つて倉庫を塞いでゐる。そんなものを氣前よく破棄して科學武器をもつてこれに代換せしめ、技術部隊をして歐米列強の新銃に追随させねばならぬが、それには又た資金の問題に突當つて懶む。これも日本をして退讓に次ぐに退讓を以てせしめたゆゑである。

日米戦は、やつてみなければ勝敗の數が明かでないといふのが第三者の立場にある實際戰術家の意見である、わからないといふ豫言は外れつこなしの豫言で、これほど正確なものはない。勝敗の未定は見物人に取つて取組みに興味をつけるものであるが、当事者に取つては

前途の見込が確實でない仕事に生死を賭することは無茶ものゝ外にはできない冒險であるが戦争は保険付きではない、危険付きであるから多少の投機も時によつて止むを得ない。

6

歴代の大統領のうちでもルーズベルト氏は賢明であつた、支那の門戸開放は戦争を起してまでも遂行せねばならぬほど米國に取つて重大なものではないといつた、——さうであらう日本とちがつて米國の擇取地域は廣いから——。次の大統領タフト氏もその政策を繼承して東洋に關しては自重論者であつた。それがいつの間にやら曲型的傳統となつて戦争付きの九ヶ國條約を頑守せねばならぬことになつてしまつた。ホワイトハウスには他國の邪魔立てをして得意がつてゐる臘臘策士が出入して絶えず大統領に戦争の興味を温めさせてゐる。興味ある一點は日米戦争におけるフキリツビンとハワイとで、これは米國に取つて強味ともなれば弱點ともなるやうに日本にしても同じことがいへる、しよつ鼻からこれを放棄するか、それ等を同執して日本空襲の足場とするか、この第一計畫が勝敗の第一頁であ

つて、ことによつたら戦争の終局をも左右するかも知れない。

二十五年間も搖ぶられてきた日米間の懸案に對しても、ようやく近頃になつて日本の覺悟が固形化するに到つた。國際的顧慮から傾向を決定するに苦むこと四分一世纪を過ぎて、始めて日本は猛然として大陸行進の序曲を奏するに到つたのは、この事業を纏めあげたならば支那大衆に取つても決して不幸なものではないといふ自信に到着したからである。國際聯盟規約——第十二條——の曲解によつてもこの自信を覆へることはできない。その他に日本の行動を妨害する者——第十五、十六條——が後に控へてゐても爆弾の前にかける一杯の水に過ぎない、そんなものを突きのけて日本は進む。

領土の擴張は人口過剰の國家に取つて必要な権利である、従つてこの種の國には帝國主義色彩の濃厚なることも免れ得ない。例は英國に取るのが適當であるが、手近な日本に取つていへば——これは領土の侵略ではなく住居區域の擴張であるが——本土に收容しきれない人口が鮮、満、臺、樺に溢れた。しかしそによつて、どれだけの人口を調節したかといふに臺灣に十萬、滿洲に二十萬、朝鮮に三十八萬、樺太に二萬を送つたに過ぎないから全部を併

せて一年の増加人口にも及ばない。それも軍人、軍屬、技術家、ゴロツキ、宗教家、御用商人が多くして、政府に寄生しない商工業者は少く労働者は極めて少い。かやうに人口稠密の度を薄める効果は少くして、金を使つて外交上の冒險をやつた過去を顧ると、引合はない難事業である。

しかし日本がそれをやらなかつたら満、鮮、台、樺はどうなつてゐるであらうか、露、英米、佛に瓜分され、日本は周圍から危険に暴されて今ごろ三等國の列に入つて獨立國の體面だけでも維持得られてゐたら幸運の方である、引合ふと引合はぬとにかくはらず現代では滿蒙を切離すことのできないのは、たゞ國防上からきた恐怖觀念だけではない。

經濟封鎖が有り得べからざることと思つてゐるのは餘りに不用心である。その前例は歐洲戰爭にあつた、經濟封鎖が規約の成文とならない以前に同盟國側がやられ、戰争後にもロシアがやられた、獨露に行つた手段が日本に遠慮せられるはずはない。物資不足の日本を目の

けて白人結束の奥の手を出すことは有り得べきことを見るが正しいから満蒙を聯ねて辛うじてそれに堪へ切らねばならぬ。もちろんそれだけでは不十分であるから國內においては産業組織の建替へから始めて、總てに涉つて經濟的調整の必要がある。政治、軍事、産業、社會生活を相關的、有機的、總括的に革めねばならぬこといふまでもない。

日本の大陸行進は絶対の必要であるが米國の必要はその程度が極めて軽い、帝國主義を象徴する星條旗が戦争風に靡くに従つて軍事費は膨大する。造船業者、鐵工所、スチール業、船會社、軍需品製造工場、大商館は直接にその利益を受けるが、彼らのもうけた金の落付く先はモルガン、ロツクフエラー及びその一味の金融業者の懷中は膨大に騰つたものが今では額面割れ、半額、三分一にも當らぬほど凋落した。これを平和の犠牲といふ。これらの經營者は政治家をつゝいて侵略政策に突進しようとする。それが彼等の保身術である。侵略政策を行ふには先づ國民を恐怖させねばならぬ、恐ろしきものを物色し

て日本を得た、日本は米國の軍部御用商人によつて製造された惡魔である。實際必要として米國は日本と戰ふわけはないのであるが、米國政治家にしても戦争企業を見殺しにしては有事の時に差支へることを知つてゐるから無碍にその要求を拒むこともできず、つひに政府は大衆とともに危険な踊りを始めた。

米國の侵略手段は日本の想像したのと全く違つた方針の下に進んできた、金持ちの考へは違つたところがある。

- 一、享樂から來る生命的愛惜
- 二、富力をもつて武力に代へる侵略
- 三、經濟事情から來る侵略強要

この三つから進む、この文もこの三つから進んで行く。

同じ侵略でも無遠慮、無作法な商人國であるから英國のやうに禮儀的、紳士的假面をかぶらないで、金をもつて眞直に成金らしく出發する。

米國の機械工場は資本に溢れて、この上に資本を取入れる餘地がない、たとひ資本を喰は

せても利潤は極めて薄い。これまでの投下資本が四半の利廻りに當つてゐたものが、これから後の投資は二半にさへ廻らない上に恐慌の危険が多い、それほど資本に食傷してゐる。

機械はそんなことに歩調を合すことなしに、どしきー製品を送り出す、そこに蓄積資本と生産品との洪水が始まって、あれだけの國內大市場を持ちながら消費を刺戟しようとすれば宣傳費と營業費とに大部分を取られてしまふ、この洪水の捌け口は一國一州の受け皿は一國一州の受け皿しかけた。

國際的争議を起してまで無理をして一局一部の植民地を武力で獲得しても、とても資本と生産との兩餘剰を捌くことはできない。戦争は部分的で事が小さいに反して平和は世界的で廣汎である上に耳觸りがいい、米國に取つては戦争が手段なら平和も亦手段であるから經濟的手段として平和と正義とを唱へ出した、平和は次のやうな搾取利潤を米國に送り込むので

ある。

米國の帝國主義の構成要素は不勞所得であり不勞所得の元兇は金貸である。その金貸！

土地の所有は英國、日本のやうな島國では名譽であり又信用の基礎であつた、農業經濟時代の舊式な資產勘定はその重點を土地に置いたが今日では日本でさへ財産は土地又は對個人債權から離れて貨幣支拂契約の債權に變じてしまつた。英國でも土地家屋が個人財産の最大部分を占めてゐたが收稅局の最近——一九三一年——の統計によれば、それが急變して有價證券、保險證書、機械が八割を占めるに到つたのは、恐らくは米國式に感染した現代財產觀念の轉換であらう。まして企業國であり株式會社國であり金貸國である米國人が小作權、居住權といつた立法の纏綿してゐる上に、譲渡、賣買に面倒性のある土地家屋に放資することを避けるのは當然すぎる當然である。

株式を買うにしても既成會社の株は割高であり、新設する餘地もない、土地放資は現在以上を吸收しないから利潤は殆んど無く、かつ共產主義者の前に隠蔽できない財産を晒す危險がある。この上の投資に無分別な浪費であつて、生産品を消化させることも投資の事業を見

つけることも國內では殆んど絶望である。

そこで次のやうな結論に追ひ込まれる――

戦争より海外貿易だ、海外貿易より海外投資だ――國內で投資するより倍の利廻りになる。しかも安全だ。なぜならばその回収は軍人、軍艦を通じて國家が暗に保證してくれる領土を擴張しないで投資によつて金融占領を考へたことは他國の眞似のできぬ聰明な政策である、もし動搖を感じることがあつたら愛國心を煽揚して自分の債権を擁護すればいい、武力侵略より高尚――或は下品であらうが米國人は高尚と考へてゐる――で外交上の無理がない。

軍艦と爆撃機とを必要とするものは米国人全體ではなくしてモルガン、シユワツプ又はそれを環る少數の一派であるが、全國の大衆は米國が武備を要するものと誤らされてゐるのである。これに對して金を借りたいものに歐洲の戰敗國があり、ラテン・アメリカがある、も一つ大切な得意先は支那であつて、支那保全の必要を痛感してゐるものは、この少數のグループである。――こゝで支那の借金史に觸れる必要がある。

支那の債權者となつたのは英國が元祖であつた、英國は急激に増大して行く餘剩生産物の始末場所として支那に向つて進出したのは今から一世紀よりも前であつた。第一に消費財、ついで生産財、ついで金融貸付けといふ順序を經て今日に及んだが、始めのうちは直ちに消費消化される生産物ばかりであつたから跡の闇がなかつたが、それだけでは尙ほ不充分であつたため次に機械の輸出を始め出して、こゝに支那の工業化を招來し、自ら工業製品の輸出に對する強敵を造つた。

機械のうちでも電燈、鐵道等に關するものは英國に取つて何の反映もなく賣りっぱなしのものであるが、紡績、織布機械はそのまゝ死滅されるものではなく、据付けられたらその翌日からランカシャーにおけると同様にすぐ稼ぎ出して支那のために英國の製品を駆逐する働きをする。これは日本において鎗紡、東洋紡を造りあげたと同じ過程において、支那においても低廉な貨銀と長時間の労働とをもつて操縦せられるから、ものしたものが却つても、され

るやうな近代的工業装置を築いてやつたもので、英國の紡織が日本において、印度において支那において競争に堪へられなくなつたのは誰を恨むこともできない。自業自得であつた。

生産財が一巡取り引きされて次は金融侵略に入つた、金融といつても正貨を貸付けるより支那から受取勘定になる戦争賠償金と、貿易逆調による決済支拂（物品購入費）とが重なるものであつた。支那の債務合計が六十億兩に達し、その三分一弱は利益を産む生産財であるが三分二強は經濟的に支那を潤すことなく霧のやうに消えてしまつたのであるから一億八千萬の利子は年々支那を瘠せしめる、それさへも支拂ひ切れなくなつたから關稅を外國の支配に委さねばならぬやうになつた、關稅が自國の支配を離れてから支那の貧乏は加速度に進んで行つた。

この時分から米國も登場して擄取が急に重加した、アヘン戦争から今日まで列強は種々の手段をもつて支那から精力と富とを抜き取り、輸入超過の決済と借款の利子とを、債務を増して支拂ふから列國の金融侵略は支那を立枯れにまで機能した。

支那がこゝに到るは支那自身の不統一と誤つた掛外心が招いて禍であつて列國はその虚に乘じたに過ぎないが、經濟的に擄取するには外交的に壓迫せねばならぬ、外交の後には武力がある、米國は武力と金力をとを提げて支那に臨む。

受身であつた支那は俄然として能動的になつた、福亂の温床であつた支那が覺醒したのは日本人として頼もしく思つたが、覺醒したのではなく寝とぼけたのであつた、彼は敵と味方とを錯覚して金の米國を友として貧乏の日本を敵とした、日本を倒すことは東洋全體を亡ぼすことに思ひ及ばなかつた、惜しいことをしたものだ、日支兩國のためにこれを呂ふ。

その二 生活の破壊から戦争へ

A

支配階級が無産者を働かしてその餘剰を榨取してゐた期間は無産者に不服はあつたにしても、それは堪へ得べき不服であつた。しかるに超人間的な動力が現はれて労働力を驅除するに到つて、働くにも働けない境遇に無産者を監禁してしまつたから、こゝに戦栗すべき事態が擡頭した。

無産者が企業家を苦しめた武器は怠業であり罷業であつたが、それは労働力の必要を感じるものに取つては脅威となつた時代であつた、動力によつて労働力の價值を失つた時代にはストライキをもつて企業家に迫つても物資過剩で操短を考へてゐる今日では餘り強い抵抗でもなくなつた。日本における労資争議によつて失はれた労働延べ日数は一年平均二百萬日に

上つた、この浪費された日數は資本家を苦めた時もあらう反対に喜ばせた時もあらうが、労働者は除外なく苦んだ數字である。

資本家が生産過剩に悩まされてゐる時に、欺かれて罷業を始めロツクアウトの陥穿に投ぜられたことさへある、労働者の労働能力を極度に歓迎することは戦時を除いては決して有り得ない、それほど動力のために労働力の價值は弱められた。

動力が始めて現はれた時は資本主義經濟組織の中に都合よく消化されるものとばかり信じられて、何の準備なく機械を通じて歓迎された、なぜならば動力は形のないものであるから注意を惹くことが薄かつたからである、もしそれを形に現はせるものなら地球に載せ切れないとほど大きな、そして力強い怪物である。

人間だけの働きで生産し、人間の力で消費するものなら自然に均衡が取れて行くのであるが、人間以上の働きをする動力が生産し、人間以上の働きのない人間が消費するのであるから賣れない商品が堆積して人間の生活を失望の飢餓に窮追するに何の不思議はない。

こんな不條理な道筋を更正することなしに、その日暮しに世を渡つて焦燥と貪慾と飢餓と

不安との組合せであるエスカレーターに運ばれて、それが前途に幸福な世界を展望しつゝ進むのであらば多少の忍苦は覺悟せねばならないが、それが一層悲惨な生活苦に導くべき仕掛けに載つてゐるのであるから人類は前途の豫測に警戒始めた。

B

貨幣に比して生産品が超過する時は當然生産品の下落を招き、倉庫に在る資本家の商品價值低下を伴ふがゆゑに企業家は金融資本家とともに共同防禦線に立つて價格維持の方法を考へる。

國內大衆に購買力なしとせば買ふ氣の起つてゐない他國民に自國の餘剰を賣るより外に方法もないが、どの國も生産不足で購買力に餘裕のある樂士はない。國內国外ともに賣れないとすれば、餘剩生産品を破壊して稀少性價値を保有する外はない、自分のものを保存して他人のもの他國人のものを破壊し、その空隙に自分のものを送り込むことは有利である。

營利から出た滯貨は、その解決策にも道徳的觀念はない、利益のために殺戮を辭しない

戦争は破壊の最大なものであるから滯貨はそれによつて一掃される、動力による大量生産の解決は戦争がつけてくれる以外に何物がある、歐洲大戦の大破壊に次いで次の破壊が考へられる。

消費力は固く凍結してしまつたから、これを融解しての後にあらざれば生産物を捌くことができない、消費力はそのまま生産力といへるが生産力即購買力ではない。操縦、休業等の人爲的加工によつて生産力を抑へ、アンチ・デフレーションによつて消費力を伸ばさうと努めてゐるが、骨折れば骨折るほど縮んでしまふ。

生産物は富ではなく消費される時に始めて價値を生ずることは誰だつて知つてゐる、消費力のないところに富はないから高價な原料を輸入して造つたものでも賣れないものは富でない、埃である、富であるべきものを埃として消散せしめる原因は動力である、金本位でも銀本位でも金銀兩建でも、デフ、インの二フレーションでも財政家は救済策に苦心を費すのは勝手だが、そんな政策を束にしてかゝつても動力の一蹴だ。

牧場の羊が機械で剪毛されトラックで洗滌工場へ送られ、精毛工場でパッキングされ、織機にかけられ、加工され、電気砲丁で截断され、電気ミシンで縫はれ、穴があり、まつひまで機械で始末され、機械的に標準化されたものが、學校教育標準化されたサラリーマンに着られるが、流行は早く去る、古い洋服は解き放され古毛が又た新様の流行ものの中に織り込まれて現はれる。この工程の中でこれまで一萬人かゝつたものが機械のために三分二は失業群へ投げられた。

労働者は動力に追ひ廻はされてゐるがために動力が労働者を撲殺する殘忍性をもつてゐることを知つてゐる。又た自分の腕が齒車の廻轉力に及ばないことも知つてゐる。動力の前で失望してゐるより何とかして早く労働に見切りをつけて生活を轉換しようと考へても情力習慣、固定性をもつた筋肉労働から脱却することができないで依然として機械の前に立つてゐるが、せめて自分の子だけは動力から離れた安住の地を與へたいと考へる、労働者は自分

の子をして労働から離れて直接に資本家に隸屬すべき職業を選んで店員、事務員を志願せしめることによつて機械よりも金力に附隨するの賢さを悟つた、それほど動力は労働者を壓迫した。

動力は労働に革命を持ち來たしたにかゝはらず資本主義は頑として一貫した方針を曲げなかつた、直接擇取が動力による擇取と労働様式を變へただけであつた。未開時代には熟練工と不熟練工との間における賃銀に非常の差があつたが機械が發達して人間のすべき高等な仕事までやつてのけるから熟練工はその経験による誇りを奪はれるとともに高率の賃銀をも奪はれつゝある。筋肉の力を要する仕事も機械が代行するから力の弱い婦人少年群が力の強い又は老練した高級賃銀者を驅逐して賃銀の前途は騰貴の見込が少い。労働者は失望する。資本家はそれを利用して擇取に力づける。

電氣は空氣と同じやうに國境を超えて地球を被覆してゐるから有價物とはいへないが、それが機械に觸れて人間に作用する時は恐るべき威力を發揮する、世界で恐るべきものは米國の動力であつて金力でも兵力でもありはしない、大量生産に動力が効かないものはない、

平時の生産競争には重爆の効果を現はし、それに狙はれたものは人でも馬でも粉碎されてしまふ。

動きの鈍い蟲が日本の産業を助けるものなら電氣は米國の特産動力である。あのびかくツとくる嫌な光線が、どんなに將來に怪光を放つかは米國の前途ともに疑問として残される。

電氣が米國から出て世界を吹き廻はつたそのムンスターのやうな跡には、たゞ荒廢あるのみである。

米國は動力で日本生産の咽くびを堅めるから僕らの生活は息苦しいのである、日本産業の自主は米國の大量生産の把握から遁脱することから始めねばならぬ。

米國は東洋の友好國だといふ、そんな友人は東洋に取つて招待しないお客様まだが、彼女はいきなり東洋人を包擁する、恐ろしい力だ、人力ではない動力だ。平時の貿易戦にも好ま

しからぬ友人は横行して大陸への日本の行手を妨げる、平時でもあの通りであるから國交が破れた時のやり方は想像に難くはない、國際會議にもこの友人が日本の肩をたゝく、己が友！軍艦建造をやめてお互に仲よしにならうではないか、と、差伸べる手には柔かい天鵝絨の手袋をはめてはゐるが、握手すれば何だか柔かい中に金屬物の硬い或るものを感じる、小形のピストルではないか。

E

日本人の一日も無くては困るのは「米」であるが、それは Kome であつて Boy ではない、むろん America ではない。

米國の文明はスピードの上に建つ、生産組織にスピードを與へるものは動力で、これに對抗する人力——手工業——は一閃の下に倒される。

動力はどんな土地を選んで腰を据ゑるかといへば、哲學のない、藝術のない、傳統のない個性のない、そして雷同性の強いところである、彼れは世界を見廻はしたが英國はいけない

なぜならば傳統と個性とが餘り根強い。フランスでもない、なぜならば藝術と哲學とが邪魔になる。あれでなし、これでなしの結果が米國を見つけ出した、米國は動力王國建築の總ての條件を備へた絶好地盤であった。

動力で勝つたら賞與は大きい、動力で負けた破産は苛酷を極めた條件を課せられる、通商路の獨占、市場征服、價格競争、開拓斥候、奇襲、主力攻撃等々、動力は好戦的である。デモクラシーは戦争を中心とするものに變つた。

動力は米国人をして自我心を去らしめ思慮を去らしめ、人間を白地にして機械の一部となるべき役割をあてがつた。冥想の感覺を克服して速度の疑惑の裏に没入させたから中味はなくして見かけ倒しの艶つけではあるが米國は無茶に繁榮した。

F

いま文明國には生活上に一の變態が起りつゝある、人間の趣味を低い一定の型に嵌め込むことである、かうして置けば平時において統馴し易く有事の時には少しの煽動で支配者の思ひなるべき役割をあてがつた。冥想の感覺を克服して速度の疑惑の裏に没入させたから中味はなくして見かけ倒しの艶つけではあるが米國は無茶に繁榮した。

ふまゝに共同動作をする大きな力となるからである。

生産した物資の價格が生産費を償ふに足らないから土地は遊び、労働力は眠り、資本も借金も遣り繰る以外に活躍しないで休む、——それは人が作つた問題であるから人が休めばそれで仕舞ひであるが、動力だけはそんなに手軽に片付けられない。

動力も人間が引つばつてきたものであるが今では超人間の存在であつて、自分の産んだ子が親不孝を働いてゐるやうに自分の子でも自分で處置をつけられないで不良兒として社會に放浪してゐる。

動力の本質は不眠不休的に大量生産をする一面的動作であるから、相關的の相棒である消費を顧慮することなく自我的に走つてしまつて生活に調子が狂つてきたのである。

これなくては生産品の原價が安くならない上に、新鋭の競爭機械が現はる前に、現在の機械を使つて自分の能力の無限界的發揮に努力する、どんな機械でもそれに取つて代る新案機械が現はるまでの生命であつて、その生命は極めて短いから早く働かせて早く原價を償却させないでは企業家は古い機械を抱いて倒れるであらう。機械を新たに据付け終つたら好況と

不況とにかくはらず据付けたその日が大量生産の開業日であらねばならぬ、ゆゑに機械は強氣で押切る、人間生活の調子は機械の知つたことではない、動力は片づばしから經濟學者の舊學說を粉碎し歴史的生産組織に對する信仰を踏みにじつた。

かやうにして出來た物資は原價が安いため未開國の關稅壁を容易に乗り越えて東洋に侵入し、日本の財界を荒廢せしめた餘波が波紋を擴げて支那に及ぶ。

G

機械が自働的になるに従つて労働者を寄せ付けないやうになり、複雜精巧になるにつれて價が高くなるから中小工業者を追つ拂ふ。機械は富蒙の獨占に歸し稀少性價格は擴大する。失業者が苦むと同じやうに辛うじて就職した者でも一人當りの生産增加を強要せられて監督に迫はれる鞭撻の下に從前より一さう能率的に一さう息苦し働くねばならぬ、かやうにして出來た製品は國內に充ちて他の労働者を失業させ、さらに扇形を成して海外に溢れ他國の同階級——労働者——をさへ苦しめねばならぬ。米國の失業者五百萬人、さらに米國の大量

生産に悩まされて失業した外國人——日本にも多數ある——はその五倍にも及ぶであらう。

米國の動力はその敵を知つてゐる、それは太平洋を隔てた薄汚ない——彼は左様に意識してゐる——日本である。日本人の勤勉、低賃銀、機械操縱術の上手なこと——英國の紡績もこれでやられた——電氣力を起すに適當な水脈を有することは、米國に取つて油斷のできないものとして米國から發するライムライト(昭明灰光)の中に注視されてゐるが、今はまだ米國の模倣時代に過ぎない。

H

動力には藝術味がないからその大量生産物は卑しい規格に統一されてゐる。文學でも、映畫でも、人物でも、道德でも、音樂でも安るもので大衆的である、安るもの、大量生産品目を列べた中に文學、道德、音樂などが動力から出來たといふことは著者の筆の横に記つたのであらうと思はれるがさうではない。電導機印刷を除いてアメリカ文學はない、道德も人間によつて安價に造られ人間は機械によつて生活し機械の運轉は動力に須つといつたやうに、

音楽でも複雑な機械で合奏し、今に樂器を列べておいて、それに電流を通じたらデヤズを奏するやうになり人間をステークに列べて電流によつてダンスを始める事になる。國を通じて電流は交錯し個性は間断なく磨滅する。

動力は強い、動力にはイムペリアル・ドメーンがないと同時に全世界がその力の及ぶ領土であるから動力を獨占したら世界は一握の下に在る。兵力、金力の強さに優る。

市場は消費を、工場は生産を代表するが、市場には市價があつて工場には原價がある、どんな無茶な暴利屋でも市價を考へないでは賣價を決定する事ができない、消費は賣價を決定する。

工場には原價はあつても相場はないのが基本法則であるに反して米國の大衆生産制度は市價に頗着なしに廣告宣傳によつて勝手に市價をつくり、主客を顛倒せしめて消費を生産に從屬せしめやうとする。動力が押す横車である。

貿易戦においても米國のいはゆる文化生産品を買ふことは、買ふべき必要によつて買ふことは少くして、新意匠、新流行といふ示唆によつて買ふ必要のない生産品を擡ませられるこ

とが多い。動力の臣下である機械は無限に生産するが、買つてくれるものが無かつたら何の役に立たない、そこで動力は僕臣である米国人に耳うちする……。

お前は何を愚図々々としてゐるのだ、お前の生産品を買つてくれる顧客は東洋に満ちてゐるではないか、支那には電氣犁、無線電話機、飛行機、ラヂオ、自動車を持込み。日本にはフキルム、樂器、金錢登錄器、ミシンを持込み、持込むと同時に宣傳を忘れるな。五十圓の樂器には百圓の宣傳費をかけて二百圓に賣れ、目新らしい自動車なら原價二倍の宣傳費を惜むな、不需要なものでも無くてはならぬ必要なものとの幻覺を起させるほど巧妙な廣告文を考える。惡魔の造つた粗悪品でも、まるで全智全能の神さまが造つたやうに振れ廻つて奉仕品のやうに調子を張りあげるのだ、さうすれば貧乏な國民でも——貧乏人は貧乏なほど新らしいものをほしがるものだから——機械の祭壇の前に黄金の牲を捧げて跪拜するのだ、あとには俺が控へて、いくらでも大量生産するのだ……と、かう、動力に激勵されては脚氣の馬でも鞭影に走る。

一足の靴をはき破らないうちに、もう型の變つた流行型を突き付ける、一足でも重きに困つてゐる人に同時に二足も三足もの靴を穿かせやうとする、さうでなくしては消費し切れないからである。買手のない繁榮である。

人間には銳智と愚鈍との兩面を同時に備へてゐるから銳智の方に觸れないで愚鈍の虚を衝くのが米國の衆愚征服の宣傳術である、愚鈍の畑に錯覚の種を蒔かれたらその收穫は貧乏である。英國製品のやうな實質のあるものを買はないで香具師ものが世界に蔓るのはインチキ宣傳の力である。

日本には水力が豊富だが、全水力を動員してまだ不足するだけの需要が起らないやうでは何の商工立國だ、僅かの水力で電氣が過剰を訴へるやうな國家が何の五年計畫だ。水力電氣を起すに便利のいゝところは意地悪く風景のいゝところであるから風致を害するとか、灌漑に不便だと、つまらぬことに藉口して堰堤を妨害する、國家財政の危機が岩に砕けて水沫

となつた風景を考へてみるがいゝ。米國ならナイガラの形勝でも動力には代へられないといふではないか。

原料が生産品の基礎となることは萬古變りはないが資本家は機械の据付けに向つて莫大な資本を投ずるを惜まず、中間製造機能である労働者を飛び越えて自動的大量生産を企てる、従つて現代企業は労働者を問題にしないで新しい機械を繞つて株式を募る。

世界の利益は米國に集中し、宣傳のトロールに引つかる貧い國民は、やがて國防の税源もないところまで水氣を搾られて、そこに米國の獨權が確立する。早く、一刻も早く、吾々はアジア・モンロー主義を成熟させねばならぬ。

その四 退屈から戦争へ

A

僕らは一日を何して暮す？ 朝起きたら新らしい刺戟を新聞の中に求める。新聞記事はどこまでが本當で、どこまでが宣傳で、どこまでが嘘で、どこまでが興太であるか、そんな警戒をしながら読んで行く。

昨日と連絡がなく、明日にも持越しされない何でもない出来事が、ちょっと僕らの神經を刺して、間もなく消えてしまふ。

ラヂオが新聞記事より一足早く聽神經を一と振り揃つて空虚な空の、その高いところへ大きな稀薄な波紋を擣げて、太陽と星とにぶつかる前に、どこともなく消えてしまふ。耳を働かして又た眼に戻る、東京大阪の新聞に外字新聞を加へて読むのだが、この頃は頁數が増したから全部を讀んだら日が暮れる。それでは新聞を讀むだけの用事でこの世に生れ

てきたものだ。どんな飛ばして、時としては見出しだけを拾つて進んで行く。

一般が興味を惹かない廣告文でも讀んだら面白い、商戦の血が滲んでゐるものもある。一行十五字詰が一圓五十錢なら一字十錢である、テンセンス文字にも種々相が踊る、必要でないものに金を使はせやうとする宣傳の努力は眞剣である。

祭日とか正月とか、新聞のない日はやれりといふ感じがする、同時に何となく物足らぬ感じもする。朝食だ、入浴だ、通勤電車だ、事務所には堆積した刺戟文書が机上に横はつてゐる、それを整理し了へざるまに晝食だ。又ラヂオが刺戟する、その休みを利用して散髪をする坐眠る——ゆふべキネマで疲れたからである——。すむと又た事務の刺戟だ、電話だ電信だ、訪客だ、用事と用事との空隙を埋めるものに交際があり人事がある、一ぱんいやな金の話も出る、死んで行く人を吊ひ生きてくる人を歓迎する、はらりしたり冷やりとすることは電車の交叉點でなくとも事務室の安樂椅子の上にある。

B

人間が生きることだけに全力を盡してゐるから享樂の餘地がない、生活を正しく消費しないから人生に何の意義を成さない、さういへば教育によつて智識を得たならば意義が現はれるであらうといふのは更に馬鹿げた考へである。宗教を信仰したらどうだ、道徳家になつたらどうだ、だんく誤謬が擴大する困つたね。どう云つたらいいのだらう、どういつてもわからぬかも知れない。では享樂とは何か、キネマかダンスか、そんなものは享樂の外皮に過ぎない、中味がちがふ。

道徳といつた梓の中に身を入れたら窮屈でたまらない、自己の愉悦を棄てゝ一生を奉仕で得心するなら「個性」はどうしてくれるのだ、青白い顔を頬紅に染めて、そこに健康美が存在するか。享樂は社會から造られないで自身から現はれる。

コツブがある、それに神が水を一ぱい注いでくれた、毎日毎時少しづゝ蒸發する、定命五十年でコツブの底まで干上つてしまふといふ恐るべき退屈なものであるが、人はそれを退屈しない。どうとかしてこの水を長く、そして有意義に使用したいとは恐るべき謀叛である。生命は神から預つたもので神が取り返へしにくるまでは保管の義務があつてコツブを割つた

り——自殺——コツブを引つくりかへす權利は與へられてゐない、債務者が執達吏に封印された財物を保管すると同じく何といふ重大な義務を負はされたものであらう。

夜は享樂の刺戟をキネマにオペラに求める、雜音だ、騒音だ、文明人の眼は近く耳は遠い四六時中五感は緊張し切つてゐる。夜でも眼が覺めたら何か考へる、家庭は悲劇と同居して街頭には嫌やな社會相が混雜してゐる、貧富の別なく落付きがない。僕の家は今國際ホテルの建築と理科大學の地ならしと筑前橋の架設と高速地下鐵工事とで、大地とともに動きつゝある。突然頭を殴られたかと蹶起すれば、どこかの工事場で杭を打込んでゐる電氣ハンマーの音であつた。

こんな生活には默想の時を持てない、併しその反対に退屈で暮らしたら世の中は陰鬱であらう。東洋の哲人は小人閑居して不善を爲すとか、ぶら〳〵してゐるより賭博でもやつてゐる方がましだといつた、西洋の哲人は一步を進めて、退屈したら隣人と喧嘩せよといつた。

文化人は忙し過ぎるより暇すぎることを恐れる、單調な静かな生活を樂むことは哲人のすることで、國家でも平和が續いて退屈すれば隣國に戦を挑むやうになる、武備が完成して金力が充實したら尙更らであらう。貧乏暇なしとは金持ちを助ける標語である、なぜならば貧乏で暇があつたら富豪打倒が眞先に頭に浮ぶからである、金持ちは暇があつてもいいことを行はない、貧乏人を更に貧乏にさせることをたくらむ。

D

歌舞伎よりキネマの方が變化が早く從つて刺戟も多く觀覽者に退屈の機會を與へないから下手でもごまかせる、能狂言といつた日本の古典ものは、ゆつくり觀賞されるからよほど精練せられたものでなくてはアラが見える。かういふ行動の遲緩なもの米國型の青年に見せたら退屈で氣が狂うかも知れない。現代人は焦躁な生活を送つてゐるから個性の陶冶がない政治家でも領袖となれば特に忙しく、在野時代に百二十五歳まで生きられるといつた故大閥侯が總理大臣になつて、これでは長壽ができないといつたことがある、收賄して未決にたゝ

き込まれて退屈の餘り初めて人生の眞意義を悟つたといふ前大臣もあつた。輿論に反抗して毅然として自信を曲げない大政治家が氣短かな青年に暗殺された例が日本に多いが、これは氣の短いといふよりも無茶である、常に靜かな修養が不足してゐるから簡単な直接行動をやるのであらう。

眞理は刺戟性が弱い、だから眞理を含んだ文章は讀まれない、讀まれない本は賣れない、聽かれない説はしやべり損である。ゆゑに眞理は街頭から姿を消して、たゞ眞理を打消す騒音のみが世を支配してゐる、彼女は「考へるな、落ちつかな、反省すな、たゞ満足で走つて走れ」といふ。

人間でないものは總て幸福である、ベンギンは氷の上で卵を温める、その卵をそつと硝子玉に取りかへて置いたら、いつまでもそれを温めてゐた。南極で越年して退屈でたまらない人間は、そんないたづらをして退屈を凌ぐが、鳥は退屈を知らぬ。なぜならば鳥には映畫を観る眼がないからである。

退屈すればベンギンを氣の毒な目に逢はせても何とも思はない人間の惡智恵を憐れむより

も、白いチヨツキを着たモダン姿の彼女の樂天的な、生な點に戀を感じる。

退屈すれば隣人と喧嘩でもして無聊を慰めやうと思ふ心が一國全體を支配した時は戦争である。封建時代には戦争専門家が大小の武器を帶びて農工商民の上に立つてゐた。退屈したら辻斬りもやつた。現在でも戦争は科學であるといもに職業もある。軍人、兵器製造業者、工廠の工人、學校の軍事教官、御用商人、それに被服廠の女工まで加へると地球上で戦争業者は一億に幾い、そんなものが退屈凌ぎに演習をやる、演習で力が入らないといふ不足が、十年目ぐらゐに環つてくる實戦で清算される。

E

隣人はいいのを持ちたいものだが、僕らの家ではどうだ。

北の隣家は僕の子弟を唆かして家庭をかき亂すのだ、彼らにいはせると立派な理由はあるであらうが、こちらの家憲家風に背いた反逆を教へて、子をして親に、妻をして良人に對抗せしめるのである。

東向ひの家は大成金で、ほんとうの金持ちではなくて遣縁上手で金使ひが荒い。大きな庭園に四季の花が咲き亂れてゐるが猛犬を噛かして近よるものに咬みつかせる、教養のないものに不相應な金を持たせると不道徳的に近所の風説を悪すから困りものであるが喧嘩に強いから相手になれない。

西隣りの家とては集團を成して雑居してゐるが、どれが主人でどれが同居者だが區別が付かない。どれも皆主人だといつて表札を五六枚も貼つてゐる。仲間喧嘩が絶えないから騒々しいこと甚だしい。垣の向うから煙草の吸殻などを投げるのはいゝやうなもの、火の用心が悪い。時としては猫の死骸でも投げ込む、これは衛生によろしくない。
けさも石を投げて硝子戸を破壊した、あぶないことだ。垣の蔭から僕らの惡る口をいふ、近所で借りたものを拂はないくせに妻は臍縫りを遠い銀行に預けてゐるさうだ、町内の教育費も衛生費もないでピストルを買つた。障子は折れ疊は破れてゐる上に内輪喧嘩で火鉢を引つくりかへした、火は燃え上る、それを消しに出かけたら家宅侵入罪だと逆撃をやられた。

こんな周囲の中暮らしてゐる僕らは戸締りを嚴重にして棍棒を枕許に置いて眠る、これをお稱して國防といふ。彼らは戸締りをしてはいけない棍棒を棄てゝしまへといふ、これを名づけて平和といふ。

彼らは惡罵する、ファツシヨだといふ、侵略主義といふ、支那を分割する用意だといふ、彼ら分割の危險をつくつて自ら怒つてゐるのだ。彼らは僕らの周囲を周つて騒いでゐるが僕らは暇のない貧乏で隣家のやうな大地主ではない、自作農であるから營々として働いても尚ほ日暮の早いのを悔む、春日遅々たる夫婦喧嘩にかまつてはゐられない、米國のそくに金ができる開があつたら九國條約などを振り廻はす餘裕もあるのだが。

F

國際車事年鑑はたゞ數字を列べただけのものであるが片手で持ち上げられないほどの重味を持つてゐる、それでも軍事費全體を總括したものとはいへない、なぜならば軍部だけでは戦争ができないからである。文部省も内務省も商工省も農林省も、すべての省の豫算中に割

り込まれてゐるところの思想善道費、青年訓練費、馬匹改良費、理化學研究費、時としては植民省の豫算で在外駐屯軍費を賄つてゐる國もあり、その他電信電話、鐵道船舶、埋藏物（石炭、石油、鐵等）民間の自動車飛行機、綿花、食料、發動機、製造工場、船會社、鐵道の補助といつたやうに血の全身に行渡つてゐるやうになつて、豫算では巧みにカムフラージされてゐるが、軍事といへば殆んど國家の總てを囊括してゐるから、どんな精密な調査をしても砂糖と砂との混交の中からその二つを仕分けることのできないやうに、秘密の伏せてある豫算を裏がへして讀破することは謎を解くより國難である。

支那のやうに正規兵と雜色軍と匪徒と苦力との區別がない上に、山には山賊あり海には海賊、野には馬賊があり、思想的には共匪、排外運動には學匪（學生運動）がある捉へどころのない妖怪國家は除外しても、文明國でさへ判然たる軍事費といふ科目がないから列國の公稱軍事費は年額五十億ドルであるが私稱（實際の）はその十倍に上るであらう。費用の莫大なことに驚くだけでは済まされない。學者、科學者、技術家の脳髄は人類の幸福建設に向けられてゐない、社會の破壊に向つて浪費されてゐることは、損失が無形的ではあるが更に惜む

べきことである。

天文學者か一個の星を見つけやうとして精力を虛空の一點に集中して、それを發見し得ずして一生を終るものがあるやうに、地圖と作戦計畫とに全智能を傾注して、それを一度も用ゐることなしに逝いた戰術家も亦た多い。そんな周密な、そして進軍ラツバの響がない前に勝敗を机上に決定できるやうな合理的の研究を實際に使はないで、死とともに消してしまふことは勿體ないことである。しかしそれが使はれないで済んだことは國民としては幸福であつたであらうが、その人は退屈なことであつたであらう。

退屈して出る欠伸は士氣の頽敗である、軍隊に欠伸をさせるやうな軍政家は上乘なものではない、常に眼さきを轉換して士氣を新にし、演習を寢氣さましに行ひ、假裝敵國の優勢を圖示して恐怖心を起させ、そんないろ／＼の手段が盡きた時は實戦で活を入れる。

欠伸は傳染する、一人が欠伸をすれば、それをみた人が又た欠伸をする。資本主義に疲れたら共産主義の欠伸が出る。長期に涉る平和は精神的にも肉體的にも空隙を生じて欠伸する欠伸止めのまじなひは戦争である、戦争はいゝことではないが、國家が慢性的に退化するよ

りは勝つてゐる。

G

戦勝の後には資本主義が確乎たる支配權を植付けるから戦勝即ち資本主義の勝利であるが戦敗はその直後に××的を××招來するから無產者の勝利に歸ることが多い。歐洲大戦のやうに戦争が長引いて決しなかつた時には軍人が退屈する、そこに危機が伏する。

愛國的亢奮は資本主義を支持するが、愛國的亢奮が冷却しけた時に無產××が頭を擡げる、戦争を根絶させるがための戦争、自由のための戦争といつた出来合標語の煽動時間は餘り長く續かないものである。

反戦思想に結付いた××的内亂が戦費の重荷を投出すことによつて安逸生活に入らうとするそれを利用してソビエートを造りあげた、その他では××主義は半熟であつたが戦前に比較すれば非常に増加した。

戦争退屈心理が平和苟且主義を醸成して、どの國にも無產××運動が地下流動的となり、

戦勝國にさへ經濟的混亂に乗じて瀕死した。戦争が長引くことはその敗北の如何にかゝはらず結果は資本主義に取つては恐るべきものであるがゆゑに、平時において戦闘準備を充實させる、戦争の準備が完成してゐない時は速戰速決ができないからである。

速戰即決主義は、いつでも多數の軍人 軍屬、軍需品を準備せねばならないから租稅の輕減は望まれない。從つて物價は騰貴し貿易は原價高によつて輸出困難となるばかりではなく國際的憎惡によつて民族的にも排斥される。こんな經濟的に不利益な軍備を持ちながら、それを使用しないで單純な飾物として置くことはもつたないのみならず軍人を退屈させるから機會をみて使つてみたいといふ野心を起すことは資本主義國家の無理もない勢ひである。戦争は演習とちがつて毎年起るものではないから戦争は珍事である——支那のやうな慢性的内亂國は別として——。士氣を落すまいとして小づら憎いそして恐ろしい相手を——假裝敵國を製造せねばならぬ。日本は×國によつて製造せられたそれである。

國家主義祖國擁護の油を平時において、特に兒童のうちから十分に注入して置けば有事の時には殉國的感念として盲目的に燃え上がる。その主たる役割は學校、教會、新聞、愛國團

H
體が勤める。別動隊としてラヂオは聽神經からキネマは視神經から、時としてはレコードも義勇報國鼓吹の流行歌で踊らせる。

人は銘々に自分自身以上の何物かを持ちたいやうである、それは神である、神を別として他に何か自分より一層大切にして神聖な他力を持たねば、生活に頼りがないやうな氣がする。それは祖國だ。もしくは祖國を表徴する國旗である。祖國のためになら自分を犠牲にして働き國旗の下では笑つて死ねと教へられ自分もそれを承認した以上は祖國は自分より以上のものである。情熱的に飛び込んで行くものと冷やかな義務感に動かされて行くものと、どちらも自分以上のものに対するサービスである。共產國家でいへば祖國に代へるに主義をもつてしただけの差違である。

愛國心を眞先に立て、自分のインテレツセを後廻にしなければならないのが人間のつらひところである。祖國は自身以上の聖物であり吾々は祖國を戀してゐるから祖國を離れて流浪

するより死んだがましいだとすれば愛國心は命だけとなる。「労働者の提携が第一、×××はそれが済んでからゆつくり考へたらいゝものだから第二義である」といふ××主義者でも舉國一致の潮流に流されたら、いきなり戦場に飛込んで激しい憎悪感念をもつて戦ふことは歐洲大戦で英國の労働黨員がやつたことであり近くは日本で上海事變が起つた時にも無産黨員の殆んどが軍部の政策を支持したことによつても知られる。その時は内地で總選挙が行はれてゐたが無産黨の投票數がその掛聲に比して極めて少く、無產階級が一齊に對支强硬の政友會に熱が燃えた一票を投じた。

眠られぬ夜中に静かに考へてゐる時は自分が戦争に向つて×××をやることは何となく犯罪者のやうな氣もする。××な心から私怨のない他國人を無慈悲に×××態度は果して×××であるや否や、といつた問題に出逢ふであらうが、米國式焦躁生活はそんなことに結論をつけさせる餘裕を與へないで、祖國愛を鼓吹して大ぜいで汝の敵にぶつかれと教唆する。戰場に臨んだら人道なんかを考へてゐた時の氣分とまるで違つた感念が頭に一ぱいになつて、自分自身が可否の判断を下すことなしに祖國のために國旗のために進軍ラツパに歩

調を合せて指揮刀の指す方向に邁進する。

英國がやられた苦杯が今度はのみくと注いで日本へ廻はされた、その次はどこに廻る。米國だつて安心はしてゐられまい。

奇妙なことは、最も奇妙に思はれることは、英國が支那と戦ふ時に印度兵が英國に忠誠を擰んでもることであつて、僕は常に感心してゐる。支那は列國共同の控取場であり印度は英國獨占の控取場で、少し趣は違つても被控取者たることは同一である、英國の侵略は印度兵を先頭に立したが、印度人が支那人を攻める何の理由があるのであらうか。

一九一九年ローラット法が布かれてから印度大衆の壓制的法規に對する、それは潜行的のものに過ぎなかつたが、大衆は英國に反抗した。しかるに印度巡査は支那において英國の権益を擁護する。排英運動にも働く、香港で支那人が排英龍業をやつた時にも印度人はストライキ破りに使はれた。歐洲大戦にも參加した。支那の大衆運動は相當な刺戟を印度、埃及に

與えてゐるといふが、果していつまでも英國のために支那人に働きかけるであらうか、日米戦争が起つた時にフクリツビン人はどの程度の忠誠を米國に仕拂ふであらうか。

部分的にはいろ／＼の抗争もあるが、アジア全體を世界的高所から眺めてみると驚異すべき或る結論に到着するやうである。

遺憾ながら日支間の紛争も今から十年ばかりは續くであらうが、その戦争まで引入れられた行違ひも深刻な血の教訓によつて双方から諒解し合ふ機會が来るであらうし相開ふことの無意義は自然に教へられるであらう、それは悲しむべき衝突の過程を通つた後のことではあらうが支那のインテリの頭が平靜に復へるまで、氣永く吾々は待たうではないか。

日支が争つてゐる間にアジアの富は米國へ流れ込むこと、ちやうど歐洲大戦が米國を成金に仕上げたと同じことである。アメリカはヨーロッパの富を乾かしてしまつて北米合衆國の富は英、伊、獨、露、日の五國を合せたものより大きい、英、西、伊、波、支、日、加、印の九國の合計と匹敵する。それが十五年前には世界の第五位にゐた國であつた。

一躍して強盛になつた國は又た一躍して貧弱となることが多い、なぜならば歐洲ほどの國

い基礎の上に立つてゐないからである。繁榮の列は環る、環つて歐洲からアメリカへ行つた繁榮の前列は今アジアに向ひつつある、日支が融合したら、それがアジアに進んでくるのである。

世界繁榮の中心は現在においてはアメリカ、未來の疑問としてはソビエート、それから未來ではあるが確實性を持つ支那と、この三つである。現在では各國の富は米國のカバンの中に入つてしまつて、その包容力の大きさは驚嘆されるが、驚くべしその鞄は底が破れてゐるから、いくらでも包み得るのである、併しそれを提げて道中のできるわけではない。

アジアにおいても經濟界に混亂は起りつゝあるが、それは根本をアジアにおろしてゐるものではなくして歐洲からの輸入品である、歐洲諸國のやうに極度まで争はねばならぬほどの基本的憎惡はない。

僕らは白人に向つて次のやうに宣告する時があらう……アジアはアジアの自由に任してもらひたい、君らの文明は間違つてゐたのだ、火薬臭ひ文明はお返しする、君らの指導なくともアジア獨特の文化は建設される、治安に害ある君たちよ、早く本國に去つてくれ……と

支那が立直る時は遠くはあるまい、その時はきっと日本と友好關係が堅く結ばれてゐるであらう、日本と争ひ續けたなら支那は倒れることはあつても立ちなほる見込はない。日支の提携は印度、埃及、フキリツビン、安南、トルコに影響なくては済まないであらう。支那は國際聯盟に縋つてゐるが、聯盟は歐洲の虛偽だ、平和會議は米國の私有である、そんなものを頼るな。と吾々は叫ぶ、支那はなぜ「贊成」と呼ばないのであらう。吾々アジア人は今有意義な歴史を書きつゝある、アジア結合こそは有色人の眞の心であらねばならぬ。

J

假裝敵といふものは巧妙に造りあげられたら被壓迫國民でも壓迫國民を助けて働くであらう。被假裝敵國は安眠することができないから對抗的に、報復的に相互に假裝敵をつくつて軍備を競争する。こちらから相手を睨むことによつて、相手も同じやうに睨みかへす。相手の軍備、要塞、地理などにさぐりを入れてスペイが入り亂れて危機を製造し、相手の弱點を握つて何時でも立上る用意を完成し、何かの機會をみて突き當る。その時に退屈が償はれ

る。

戦ひとなつたら敵の人生を損傷することが最高の道徳によつて是認せられ正當化される。正義のため、國威のため、神聖のため、防衛のため、權益のため、國のため、身のため、子孫の爲め、そんなものゝ合計の爲めに戦ふことは味方が最善であり敵が最悪である、最悪のものゝために負されることは神の名において最大級の恥辱であるといふ強く打ち込まれた信念によつて動く。勝つたものが勝利で、負けたものが負けである、それが眞理なのだ。

歴史は他國を破壊することに因らずして一の國家に榮光と繁榮と興へた記録を持たない、道理の正否は第二として戦敗國は幸福を失ひ人命を失ひ國土を荒廢せしめられ謝罪、金を支拂はせられる。家を焼かれ耕地を掘りかへされた、その損害と賠償金とは一代では支拂はれないで義務は次の時代の人々にまで賠される、こんな大きな投機は決して無い。歐洲大戦に三千八百万人の死傷者があつた、その中に行方不明者が七百萬人、この行方不明者といふのは砲弾、重爆弾によつて骨も肉も微塵となつて飛散したものが多い、そんなことをして歐洲大戦は何を意義したか、退屈さまとしては餘り多い犠牲ではなかつたか。

彼らの大半は何のために、又はどちらが果して正義であるかを比較研究する時間を與へられないで戦場へ驅り立てられた。國家としては正義であらうが無からうが、そんなことはどうでもいい、勝ちさへすればいいのであるから國內大衆をして無條件で正義であると信ぜしめたらいゝのだつた。正義のために起つといふ信念は攻撃に力づける。正義の鼓吹の仕方によつて軍隊は一割も二割も時としては二倍も三倍も強くなる。

K

正邪を批判する脳力を持つた兵士は好ましい兵士ではなく、自國の行動に懷疑心を抱き戦争の定義を考へるやうな軍人は敵の間牒より恐ろしいものである。たゞ黙々として、しかも亢奮を續けて、死地に突進させるのが戦争の定義である、この定義は無茶である、無茶な定義から出た戦争は無茶より出で、無茶を過ぎ無茶に入る。

脚もとに地雷火、頭上に爆弾、これでは退屈してゐられまいと思ふのが日本人であつて、白人たちは堑壕の中で毎晩ランプをやつてゐたといふから恐怖に慣れると又た退屈する。

上海事變でもさうであつた、日支が相撲ち出す砲弾の下で商賣ができるないといふ不平、それはわかつた不平であるが、ダンスホールが開けないといふ不平、それは白人たちが長き夜を退屈するからである。あゝまで歡樂に慣れてゐては一週間でも歡樂と絶縁することは苦しいものらしい。

「敵国外患」なきものは國常に「亡ぶ」ださうだが、國家は内亂で腐蝕し外患で緊張する。支那のやうに内亂も外患とともに有つてゐる國は「亡びるやうで亡びないやうで、そのうちに國力は少しづゝ進んでくるといふから規則で律せられない存在である。平和のために衰亡した國は歴史に痕跡が多い、油斷、倦怠、奢侈で國家は大欠伸する、欠伸した口の中へ弾丸を撃ち込まなくとも小さな柔團子を投り込んだら窒息死に到る。欠伸は倦怠の表現であるからその油斷に乗すれば一個の國子でも命をとる、その國子には猫いらすも何も仕組む必要はない。

退屈した時分にはお祭騒ぎをする、農村でも都市でも春、夏、秋といつたい時候に始まる、輿論も同じく煽動家の指のさす方向に踊る。輿論とは何ぞや、お祭り騒ぎであり神輿の

論である。

輿論といふものは譯のわからぬものである、わけの譯つたものは輿論ではない、神輿を昇ぐものは、その中に何が入つてゐるかを吟味することなしに捨ぐのだが、その中に何が在るかを吟味しようとするやうなものは本當の信仰者ではない、罰當りものである。

思想家は「理」の指すところを信じるが、信仰者は「神」の告げるところを信じるものである。

ボビュラー・ヴォイスは衆愚の附和雷同した善意の聲であつて、民主主義政治の實大有効な働きを擁護し、革命的叛逆者に向つては圓満な防禦要塞となる。

善意の錯誤が時としては輿論の形を成して國家全體を不幸に導くことがある。對外戰爭といつた闘争的感覚の灼熱した時に、熾烈な雰圍氣を利用して憎惡熱を煽ることは易いが、反對意見を披瀝して民衆の聽くことを望まざる政策を説いて、誤つた熱狂を冷却せしめるとは難事である。しかしそんな反対者も必要な場合がある、賣國奴と罵られることがあつても自信を失げないことは感すべき英雄であつて、戰場で敵陣を陥いれるより以上の勇氣を要す

ることである。併し——この併しは重い反語をもつ——しかし衆愚の中にそんな思想の操持者との交ることは社會を混亂に陥れしめ敵の乗ずるところとなつて勝を變じて敗とすることが多い、一人の賢さは百人の愚に及ばないのがデモクラシーのいやな點である。

神輿昇きの中に左へ行かうとする大衆に逆らつて右へ行かうとする少數があつたらお祭りの行列は亂される、汗だくで非理性に騒いで、それを輿論なりと盲信してゐるものを反対の正しい方向に向けしめようとして僅かの言葉の行違ひから氣短かな神田の児いに袋叩きに逢ふこともある、そして神輿は思ひがけなく他人の肩などにぶつかり河の中に人とともに顛落することもある。

軍縮會議が始まつて大衆が反対してゐる中で少數の賛成者が頑張るとしたら國內不統一の弱點が外國の乘ずるところとなつて國家の不利益になるやうに、少々は間違つてゐても大勢に順應する方が國家の利益となる。輿論が力強く動き出した時は智者も智の施しようがない

く愚物でも群集心理の中に加はつて胡魔化して通れる。

政黨には外の輿論と内の輿論とを調節して行くところに領袖のむづかしさがある、外の輿論とは大衆の要求するところである。内的の輿論とは陣等多數の希望である。そんな愚論でも諂ひ聽して賛成したやうな顔して輿論のオンパレードを指導して、辻にきたら巧に針路を轉換せねばならぬ、馬鹿げた政策でも新らしく目先を換へることに役立つから退屈して畫策してゐるよりはいいことである。そのために政黨本部に基盤を置いて退屈させないやうに斧を戦はせて置く。どうせ代議士といふものは七分の無鐵砲と二分の智恵と一分の運とで當選したものであるから抜ひにくいやうで抜ひよいものである。

中央の政情に疎い地方黨員が上京して領袖に愚策を献じると、さも感心したやうな顔して傾聽しなければならぬ領袖は退屈であらうが黨員は策の聽かれたのを悦んで亢奮するから自ら退屈しても衆愚を退屈させてはならぬ、なぜならば退屈したら黨費を納めない、脱黨もする。

馬鹿に交つて黙つて擔がれてゐる總裁は自ら退屈して黨を太らせる、それが既成政黨の大いなるもの。

を成したゆゑもあるが日本の無産黨は黨首が利口ぶるからちきに分裂する。女給はお客様の詰らぬ話でも面白さうに相槌を打つてゐるからチップに有りつくが、退屈したやうな顔をしてゐたら生活はできない。お客様を退屈させるから落語は褒美した。歌舞伎でも大向うを喰らせるのは輿論の喚起である。

輿論といふものは鑑識眼のないもので十錢ストアのやうなもの、數は多くあつても同じやうな價値の安すものが紛然として列んでゐるに過ぎない、めつたにダイヤの指環なんか交つてゐるものか。

そんなものに雷同しなければ政治でも藝術でも宗教でも新聞でも發展しないのであるから相續いて墮落する、お互さまに浅薄な智恵で世を渡つて行けることは結構であるが、人生の誠の味はデモクラシーで水臭くなる。

どんな人でも、どんなまかひの友だちでも自分と同じ程度の智識をもつて自分の思つて

ゐることと同じことを考へてゐるものはない、無理にそんな異つた程度のものを包括して、人間同志を集めて心を戮せて社會を組織する事が根本的に於いて出来るならば、僕らは大とでも蛇とも蛙とも一しょに平等な權利を持つた動物社會を構成する事ができるであらう。たゞ併しそんなものを作り上げても詰らないことである。

自分が個性を固く保存して一個の人格を維持しようとするれば勢ひ孤立になる、孤立は静寂を愛好する獨善人のみが樂むところで衆愚は大勢と一しょにわい／＼騒ぎながら暮さねば退屈するから個性といふのが泡のやうに、ちよつと現はれることははあるが、すぐ人波の中に消えてしまふ。しかし社會協力は個人で氣張つてゐるより大きな仕事を仕上げる望みがあるから米國では株式會社が流行して大株主のために小株主の小利害は消されてしまふ。

株式會社は信仰で結びつけられた團體ではない、たゞ營利といふ主義によつて組み合されるのであるが會社は小株主の所有ではない。小株主は會社に所有されて、二三の少數大株主が重役となつて會社を所持する。

國際聯盟でもその成員である弱少國家はフランスに所有された。力が強くて利巧に立廻る

ものは自分の思ふまゝに處置することができる、それは吾が物である。共產主義では所有者を社會とし、その社會を幹部が所有する。所有慾のあるものは善良な人ではない。アジアは日本が所有してはならないやうに支那人が所有してもならぬ、まして白人は一時的に借用することも罷りならぬ。

實際において侵略主義といった舊式な考へは死んでしまつた。死んだものは子孫を蕃殖させることはできない、いま侵略主義に代つて現れ出た將來有望の兒はアジア人のアジアといふ新らしい名を持つた寧馨兒である。

吾々は内輪喧嘩してアジアを碎いてはならぬ、それどころかアジアを現状以上に高めやうといふのである。アジアを暗殺にかゝつてゐるものをおづ拂つて保全の義務を盡さねばならぬから個々の道理のある個性を棄てゝ、道理の有無にかゝはらず有色人はお互に協力しなければならない。國家は輿論一名野次馬心理を必要とする。

輿論は機械製造品と同じく何個でも何人でも同じやうなものを集めて成立つ。機械製品は自分の弱點を隠蔽するために修飾するから中味十錢の香水に包装費がその五倍もかかる、文章でも低度な大衆讀者に買はせるため何でも緻密に描寫する「餅」といふ題で筆を取るとしたらその原料から製造法からその歴史からその味まで上戸にでもよく呑み込めるやうに書いた上に、入れ歛で嗜んでは危険だとか、徹びたら水餅にするがいいといふ點にまで細かくやつてのける。それが現代の大衆作家で、機械を創立てる理づめで行つたら困難ではないが、分解してみれば詰らない冷たい鐵片に過ぎぬ、これが輿論の正體である。

國家の輿論は多く誤つてゐる、或は誤らせてゐる。國民の聰明を蔽ふやうな政治によつてさうなつてゐるのである。外交にも軍事にも秘密があつて國民は正しい判断をする資料がないし、又た國民偏々に判断をしてもらふ必要もないのである。新聞だつて政黨又は富豪の機關に利用されるから一新聞だけを讀んでゐる人の思想が一方に偏ることはあるが免れ難い。ソビエート國の資本思想排斥、ファシヨ國家の勞農思想締め出しによつて兩國民は決して批判力を與へられてゐない。従つて國民には正しき輿論はない。日佛同盟説でも嘸だけは外國新聞

で讀んだことはあるが日本もフランスも國民は眞偽を知らない、嘸が立つだけでも日佛間に共通した何かの關係がある、共通したものが無かつたら嘸だけでも流布しない。たとへば日米同盟説を流布しようとしても誰も相手になつてくれないが日米戰爭の宣傳なら物にならないことはない。しからず日米間に同盟説を笑つて戰爭説を傾聽せしめる氣分が横はつてゐるものといへる。日支戦力は嘸だけでも早く立てたいものである。

ソビエートの計畫が軍事を中核として魔の進行を續けてゐるのは日本の白色恐怖があるからであり、日本において思想研究が活氣をもつて論議せられてゐるのは隣りにソビエートの恐怖があるからで、軍事と思想とのために兩國民は緊張せしめられる。ソビエートが不可侵條約の締結を日本に持ち込んだのは日本の陸軍が氣にかかるのであらうが、日本がそれに應じられないのは赤色宣傳が油斷できないからである。支那のやうに内憂外患が交々起つても、緊張してゐるのは一部のインテリだけであつて大多數の人々は何とも思つて居ないで退ひ

屈してゐる。春の海、終日たり／＼哉の呑氣さである。實力政治家は私腹を肥やすに忙しく、意識のない輿論の動きは波の無神經な起伏と異なる。

日支間は支那の誤った輿論によつて意義を成さぬ衝突を繰返へしてゐる。しかも國民相互間に何の争ふ必要をも見出さない。歐洲大戰を経て戦争の目的は訂正され、次のやうな九綱目となつた、そのうち日支を相戦はす目的物はどれであるか。

一、敵國の完全なる征服。二、敵の戦闘力の破壊。三、脅威の排除。四、土地の占領。五、權益の防衛。六、通商路の開拓。七、利潤擰取。八、分捕金品（賠償金を含む）。

九、經濟力の破壊。

日本としては對支外交は割合に消極的で、たゞ第五の既得權益に對して頑張るだけで、第一、第二、第四、第八、第九の如きは決して日本の目的としてはならないものである。戦闘力の要するに一時的手段であつて目的ではない。

日本は支那を剿滅してはならぬ、又たできないかも知れない、洪水、飢餓、政爭、内亂等による自憲作用でどんな結果に落ちて行くかも知れないが、外國の壓力で支那が亡びること

は有り得べからざることで、支那の一部が騒いでゐるのは、彼れは幽靈をみたからである。幽靈は弱いものを目がけて現はれるものであるが、それは野蠻人だけを脅かすための虚の存在と思つてはいけない、強いものほど幽靈を見、文明人ほど亡魂に魔される、假裝敵國は現代の幽靈である。

國民が軍事費の重荷に堪へず納稅に倦怠を感じる時には、幽靈は現はる。彼女は恨めしいとは云はないで恐ろしいぞといふ。稅金を納めて軍事を充實せねば化物が君らを食ひにくるぞと脅かす、日本はロシア、米國の幽靈の種に使はれて軍備が充實すれば幽靈といふ空のものが戦争の實となる。

不戦條約、平和協定は幽靈を恐れる文明人が集つて脅威排除策を講じたものであるが、調印國自身が相互に幽靈であるから條約面の文字を實際の正貨に兌換しようとした時に強國は果して金色燐爛たる正貨と引換へてくれるであらうか。

野蠻地の士人などは戦争といったことを、まるで考へてゐない。文明人は今挑戦的な周囲の情勢に自身を適應させるため軍備を尖銳化して他を攻撃するか、軍備を弛緩させて他から

の攻撃を甘受するかのどちらかの問題に回答を迫られてゐる。

臺灣の蕃人の首の取り合ひは戦争とはいへなかつたがスペイン人、オランダ人が銃を賣りつけてから、やゝ戦争らしい凄いところをみせた。總督府が砲器を取り上げてから又た縮んでしまつた。野蠻人は銃の製造法を知らないから狙撃が上手でも近代戦争觀念からは戦争とはいへない。文明國は自ら戦ふだけではなく平和人に兇器を賣りつけて戦争の趣味を養はしめる、バルカン、支那における争闘がそれである。

未開人は機械に悩される度が少いから生活は割合に幸運であるが文明人は今苦難の中に呻吟してゐる、機械が今日のやうに横暴を極めなかつた以前には消費力が供給力より強かつたから商人はもちろん農民も官吏も幸福であつたが、機械が大自然の法則を破壊するに到つて僕らは修羅道に突き落された。機械の音だけは妙な響がする、それは大砲の音と共通した惡魔の響である。もし人世に機械が無つたら人口の増加は消費力を増すため、どの市場でも買ひ手が溢れて非常な繁榮を呈し、今日の反対に物資の争奪が始つてゐたかも知れないが、そんな幸福は今となつては夢である。

大きな優秀船、綱の目のやうな航路、それは皆損失の通路である。船は動くたびに損をする、飛行機は飛ぶたびに補助金がついてゐる。こんなことは資本と労働との浪費であるが、戦争があり得べきこと、せば、想像せられた未來の戦争の豫行であるからそれを中止することは戦争に負けることである、戦争は無益の破壊であるが商戦も資本の破壊である。

文化の高度に發達した國は同時に武器彈薬製造工業の中権地である。科學によつて發明を機械によつて物資を、鐵道、航空機、船舶によつて交通を、そんなものゝ蓄積が戦争を喰らわせる力を蓄積したらそれを使つて、その成果を見たいと思ふのは當然に到達する慾念である。知識、資本、勇氣、そんなものゝ最も強く活動するのは戦争である。

亂世の梶雄といはれる資質を持つたものは秩序の整つた治世においては努力を發揮する餘地がないから退屈してゐる。大名譽、大利益を攫み取らうとする機械は戦争より善き時はない。そこで戦争は製造される。

その五 戰 爭 史 觀

A

文化の進歩が戰争を阻止するといふ學者の定説が確立した頃に歐洲戰爭が起つた。貿易が盛んになれば各國の利害が相錯綜するから戰争を阻むといふ説が、貿易の尖銳化が戰争をつくると更改された。文化の進みは他國の知らない特殊な新銃武器の製造研究に焦慮せしめ文化都市が軍需品工場の中心を成し、科學の全力はそれに向つて没入した。

現在の歐洲はあれで平和なのであるが、軍隊が動かなかつたら、たとひ作戰計畫が進められてもそれで平和な夢が見てゐられるのであらうが、その夢の覺めるのを惜むほど現實な人間生活は苦界である。

金慾戦は武力より強い力でドイツを破りイギリスを覆し、金の累積に却つて米國を脅か

した。フランスも金融戰に登場した。そんな戰爭狀態がアジアに密輸入されて絶東においても不穏な渦が巻き始めた。

アジアは未開であつたから歐洲大戰に比べると殺戮法も兒戲に類してゐた、後漢書に伏屍百餘里といつた恐ろしく長い形容を使つてゐるがそれは紙上の數であつて實數でないことを勿論である、支那の歴史に駄法螺が多く、それを師とした日本も法螺を傳染してゐる。

B

北條が楠氏を河内に攻めた時に關東勢が八十萬と稱せられたが、その十分の一でも尙ほ多い、五分一でも少いとはいへない。

項王の兵、瀕上に在り、百萬と號す。(史記) 潤水の上に陣取つてゐる項羽の兵は、いくらだかはわからないが自稱百萬であつた、この「號す」といふのは宣傳で、百萬とは宣傳そのままを史上に載せた兵數である、日本の歴史でもその通りの誇張がある。併し歴史といふものは必ずしも正確な事實を傳へる必要はなく、嘘であつても差支はない、創作であつても

此のころの大衆小説より面白くていいが、ただ人間の生活に添つたものであれば、それで満足しなければならぬ。

北條勢が八十萬ならば京都から河内まで戦線の銃後に十數萬の非戦闘員が列を造つてゐたに違ひないが、戦の縦線が長いから草賊を集めた南軍に糧道を絶たれて自潰作用で敗北したものであらう。

楠氏の成功は抵抗繼續時間の長かつたことである。著るしく優勢な敵に對して抵抗を長く続けることは、それだけでも戦術上では成功と見做される、まして援兵が共同防禦に合流する機会を與へ得たならば大成功といはねばならぬ。歐洲大戦のヴエルダンの役が干旱の戰に似たところがある。

中世には常備兵といふものが無かつた、農民が鎗を拋つて兵となつたこと現在の支那において苦力を集めて軍隊を造るに類してゐる。戦争の本質は他の領土を侵略することによつて巨額の富が持來されるといふ慾念から征服欲を國民に注入し、軍人に對しては位階、土地、利益の分配によつて一致せしめたことは組織的な掠奪團のやうなものであつた。

小さな集團が勝利によつて急速に飛躍して大きな集團となり、戰勝地には戰敗國からの分捕金品が貢物ともに積みあげられることは聚樂時代の京阪の繁榮を招いた。

C

必然の計畫が偶然の機會に投じ非常な効果を戦争の結果に及ぼしたこと史家は名將といふ、名將といふものはそんな單純な出来合品ではなくして智慮、戰術、人望、勇氣、そんな複雜なもの、集合構成であるが、僕はそれを單純に智と運との二字で片付けて好からうと思ふ。何百何千萬の死活を擧げて少數將帥の智と運とで決定してしまふことは餘り無責任なやうであるが、人間の智慮で及ばない空間が敵と味方との間に存在するから、敵が思ふ壇に嵌つてくれたら庸將といへども大功が建てられる、勝負は敵の出やう次第である。

參謀本部、軍令部で周到な計畫を樹てるが臨機の處置は司令官の機智に任せ、それ以上は運命の指すところに任せるのであるから戰争は「金」に始まつて「術」を過ぎ「運」に終る。秀吉が天下に霸者となつたのは光秀のおかげであり、信長の賢い嫡男が死んで——身投げ

した婦人が美人であり、死んだものは賢いといはれることははあるが——愚かな二子が生残つたのも、勝家一益が東と北との強い相手に向けられ秀吉が弱い中國に向けられたのも、毛利が織田の危機を利用しないで秀吉と諒解したのも、そんな小幸運が秀吉に集中した偶然の大結果で、英雄首をめぐらせば天の命である。

平和は戦争と戦争との息つきに過ぎない、平和の時は戦争の時より長いかも知れないが、百年かゝつて建設したものを一日で破壊するから平和と戦争との長短はただ年月だけで力を比較することはできない、戦国時代は擬人化せられた集團の決闘であつた。

D

長篠の役に武田が一敗地に塗れて復た起つ能はざるに到つたのを鬼家は勝頼が父信玄の武勇に如かなかつたことに歸するが、僕はさうとは思はない。一騎打ちにおいて本曾勢が京都兵より強かつたやうに、同じく山地の甲州勢は中部人より優つてゐた上に行軍の艱苦に堪へる力も強かつたであらうが、織田氏は京都に占據してから軍隊を文化的に改變したことは織

田武田の決戦において現はれてゐる。

それまでも京都は享樂柔雅の地であつて、そこに據ることは一種の誇視ではあつたが、現代において大阪、ニューヨークが政治的よりも軍事的に重要な地點となつたやうに、京都の工業は軍需品製造場の中心となり、甲冑、刀剣、弓盾、特に火薬が武器として、又た食料被服等、戦時の後衛として重大な役割を演ずるやうになつたが、武田の領土にはそれが無かつた。

銃の渡來は戦争に火薬革命を起さしめた、銃を何よりも信頼したのは織田であつた、攻撃的に銃を信頼するともに防禦的には盾を——今日の塹壕のやうに——信頼した。

かやうな武器ともに戦術も一變した、そんなことは文化に遠かつてゐた甲州の知らなかつたところであつた。甲州勢の肉彈と手道具（劍、戟、弓、少數の銃、盾は極めて少かつた）に對して機械（銃と盾）で対抗した、飛道具（銃）が武人として恥づべきものなら弓矢も飛道具であり槍、刀も手の延長であるから同じ譯合のもので、それを信長の卑怯に歸するは正しい見方とはいへない。

元龜天正時代には道路も狭く運輸の方法も完備しなかつたから糧食、器具等の關係から十萬二十萬の兵を動かしても、（たとへば關ヶ原のやうな平野戦においてすら）それ全體が現實に戰闘に參加したことは少くして過剰兵力は遙かの後方にゐて聲援を爲し先鋒に飛躍力を與へるに過ぎない、時としては足手繩ひにすらなる。山崎合戦のやうに先陣争ひが起るのはそのためであつた。

戰争には危險が附隨する。奇功を樹てた戰勝は嚴密な打算に缺けるところがあるだけ、敵の不意に出で、勝を制する、桶狭間における信長の奇襲がそれである。敵が後方に強い守備を設けてゐたら歴史に輝かしい驍將も脆く樹林の下に落と消えて、馬鹿々々しい冒險家として後世に嗤はれたであらう。

強行軍、秘密、迅速、決斷、偵察の五つは奇襲の要諦で、嚴島、鵜越その他戦史の花々しい場面を飾つてゐる。正攻法では負けるはずのものを精神的壓倒によつて敵の元氣を挫き

F
 理外の勝を占める。しかし今日では強國といはれるほどの國家の間には戰爭技術において優劣の差が少く、偵察機關が備つてゐるから対兵をもつて敵を破ることは困難とせられる。信長は短兵奇襲をもつて桶狭間に起り飛道具をもつて大成した。謙信といへども晩年には織田の科學部隊に對して勝味があつたものとは思はれない。

總帥は流血の惨状を目前にして慈悲に燃えてはならぬ、又た無慈悲であつてもならぬが慈悲よりは寧ろ無慈悲の方がましいである。この意味において文學者であり歌人であり能筆家である平家の公達は良将ではなかつた。平家の都落ちも作戦を誤つてはゐない。あの場合には退却も一手手段であつたが、衣冠の徒は京都を離れたら勇氣を冷却する。

大敗した後には士氣が挫折して復讐懲忿念が麻痺してしまふ。局地戦に負けても尙ほ戰闘力の残つてゐる時には報復の意氣は旺盛であるから主將はそれを利用して更に勇氣をつけるが平家の都落ちの後においては京都奪還の勇氣は殆んど消えてゐた。

惨酷な戦を経て平家の戦意は沮喪してゐるから知盛、教經らは死灰に油を注いで再び炎を
擧げようと力めたが、總帥の宗盛が柔弱で、その意氣が大衆の勇氣を奮ひ起たせるに堪へなかつた。慘虐に對する涙のあるものは終局の勝を望めない、激戦の最中に眼をつぶつて野戰病院の光景を念頭に浮べるやうな氣分が起きら、戦は明かに負けだ。

維盛が富士川を隔て、源軍と對峙した時に、東からくる旅人の情報によつて惑はされ、三萬の敵を三十萬と十倍に擴大して判断した、こんなことは現在でも行はれてゐることであつて米國の戦闘力が日本へ、日本の戦闘力が米國へ、相當な誇大をもつて傳へられてゐる。眞偽、過小、誇大、捏造等の無責任に報ぜられた情報の斷片を綜合して国防計畫の基礎とするのであるから、どんな智者でも誤謬に陥ることは免れないことで、よく考へてみると戦争の計畫ほど頼りないものはない。戦争の訓練が十分でなかつた憶病な、たゞ家柄ばかりで軍の主腦となつた維盛が水禽の羽音に驚いたのは嘘ふべきことではない、水禽の羽音が飛行機の爆音と變つただけの現代である。

G

デモクラシーの行はれない以前においては、戦争は將帥の復讐とか侵略とかの目的から行はれて政治的手段でなかつたため人民は軍の精神とは何の關係もない傭兵であつたが、個人の格闘とちがつて軍隊は經濟その他の複雑な組織からきて敵を潰滅させるまでの過程において種々の困難に出逢ふ。

木曾義仲が都攻めにおいて先づ叡山を占領したのは土地侵略が目的ではなくして山下に在る平軍の戦闘力を破壊する示威であつた、戦争の脅威は形而下の殺傷だけではない、馬を立つ吳山の第一峰といふ詩句があるやうに叡山の高峰に白旗の翻つただけでも平家の精神的戦闘力を潰滅させるに十分な効果のあつたことは歐洲戦争においてドイツ飛行船がロンドンを襲撃したのと類似してゐる。

源氏の志は復讐に在つたから平軍の西奔に乘じて追撃戦に轉じなければならなかつたが源氏は遠征したため被服糧食の缺乏から京都の豪戸を掠奪しても尙ほ不足であつた、勢ひ休

戦するの餘儀なきに到つた。

戦國時代は間歇的に戦つたから戦争の永引く割には軍資金は多くを要しなかつたが、戦闘員の補充のため休戦したり糧食が不足して退却したりしてゐたものである。近代戦争には糧食軍需品——その後に工場、機械等が軍隊の組織の後方に準備されてゐるが、それでも豫算以上に弾丸を浪費することがあり、兵站の缺乏を訴へることもある、義仲の遠征には後續部隊がなかつたから京都で窮したのも無理ではない。

H

強制徵發に應ぜしめられた壯丁を除いて農民は戦争と無關係で、戦争は双方の職業軍隊間にのみ戦はれた。食料以外の生産品——たとへば草鞋、陣笠、弓など——は農民の副業で、群雄割據に累せられてその賣買も周囲五十マイルの外には出なかつたから大規模な交換經濟は成立しなかつた。

かういふ運輸機關のない時代に木曾から一氣に西海にまで窮追することは不可能であつた

その間に源氏の内訌があり、ために平氏は福原に勢を張る餘裕を與へられたが、これを義仲の遊惰に歸するは當を得ない。休戦も戦闘の一時中斷的繼續でありて起るべき第二次の戦ひに應ずるための準備と休養とに必要なものであるから、それも戦闘期間の中へ加へらるべきものである。

陸戦において源氏は強かつたが海戦には狎れなかつたのは地理的理由による。歴史において戦争は殆ど陸戦であつて四面環海の日本において海戦が振はなかつたのは英國のやうな国情の下に置かれなかつたからである。スペインの無敵艦隊百三十隻といへは大袈裟であるが、トン数にして總計六萬トンに満ちなかつたから現代の戦闘艦の一隻にも當らぬ、日清戦争以前には海戦らしい海戦は日本に見當らぬ、上海事變満蒙事變には飛行機の空中活躍があつて始めて日本の歴史家の眼は地から水へ、水から空へと動き出した。

×國を假裝敵とするに到つて日本の海軍に急に膨脹した、日本の組織的機能の中で海軍は

比較的短時日の產物であり兼ねて急速な大踏歩でもあつた、空軍は陸海におくれて、今大急ぎに追ひ付かんとあせつてゐる。

古代からの戦争三要件である天時、地利、人和の三つのうち天時は國際氣進の動搖によつて定まつた時がなく、地理は飛行機の發達で抹消されてしまつた要塞でさへその防守力の大半を失つたことは上海事變の吳淞砲台がその適例である、天險の利用は戦争の強き條件であつたがそれも航空機、自動車、戰車等によつて力を弱め、人和のみは依然として背後の勢力となり「人和」は「舉國一致」とが「國家總動員」の名に呼び換へられた。

敵状偵察機關が不完備な時代には無謀に近い膽力が軍に總括的勇氣をつけ、後世の史家がその無謀が却つて男性的であり、史を讀んでもはら／＼させられるやうに、當時においても部下の兵士が冒險的興味に陶酔したことであらう。それが文化の現代にも残つて、やはり人間には不健實な冒險的遊戲を愛好するやうな片面性を持つてゐる。

近代戦争は動機が政治的理由から出發し、戰略が數理的となり營利的となり、打算的となつて亢奮、感情等を作戰計畫の上から驅逐してしまつたとはいふものゝ、戰爭そのものゝ本

質が規準的のものでないかがゆゑに勝敗の全部が兵力の強弱によつて定まるものではなく一部分は人間の腦力の及ばない偶然性の支配するところとなるから、どんな人でも勝敗の先見はできない、豫言の適中したのは七分の推理と三分のまぐれ當りである。

危險の中に在つて目的を遂行するものは膽力である、膽力は危險を排除することはあるが無茶な膽力は安全を變じて危險に突き落とすことがある。賤ヶ岳における佐久間盛政がそれであつた。

盛政は中川瀬兵衛の背後の營を焼いて奇捷を得た、背面攻撃は精神的に非常な打撃を敵に與へることは薦巢でも前例があつて、甲州の勇を以てしても顧みて敗れた。背面に次ぐのは側面攻撃で、正面から攻めるものは敵以上の優勢をもつてからねば勝利は確保し難いものである。日×戦において僕らは背後の敵を恐れる。

核から細胞へ、細胞から組織へ、組織から有機體へと分析を逆に移して層累相接して緻密な作戰計畫ができる。感想と勇氣とだけでは屹と敗北する時代に入つて高松城水攻めといつし自然を利用した數學的攻撃となり大家族制に立築る毛利の心死の防戦も城將を見殺しにし

なければならないほど弱いものであつた。

僕はこゝに筒井順慶の知己とならう、彼は一萬の兵を率ゐて洞ヶ峠に一萬八千を率ゐる明智の後拒をしてゐたが光秀の敗を見るなり戦はずして逃げ出した、と、それだけでは如何にも卑怯なものゝやうに見えるが彼は戦機を知つてゐた、會戦には勝敗の決する一點の戦機があつてそれを見るのは名將である。援軍を送つたら敗を轉じて勝とするとのできる時と應援に出かけても味方とともに全滅して戦局を新にする効果がない場合とがある。光秀は戦略家であつて實戦の闘士ではなかつた、あゝいふ戦には學問より度胸である、光秀の見苦しき敗戦は、側面又は背後から敵を衝くにあらされは大勢を挽回するに足らぬ、味方の背後に備へた豫備軍が参戦しても、たゞ順慶に無効果な犠牲を拂はしめるだけである、後に控へた豫備軍を使つて勝利を占める様にするには、先づ前軍をもつて敵に猛撃を加へ、敵の少しく退却したのを待つて隊伍を整へて退き、後軍のこれに代つて陣地に就くだけの餘裕を與へねば

ならぬ、さうでなく崩れかゝつた中に新援の兵を加へることは徒らに混亂の度を加へ犠牲を増すに過ぎない。この戦は義戦ではなく順慶は光秀の家臣でもないから光秀に殉じて討死する必要もなく、主將が戦場を遺棄した後の亂麻状態を承けて、挽回することのできない状態、戦敗の一點機は洞ヶ峠の上から明かに看取された。順慶をして戦に参加せしめなかつた次の理由は明治勢が餘りに早く崩れ立つて援軍を送る機會を與へなかつたためでもあらう順慶の逃げたのは戦闘力を保全する叡智であつて、たゞの憶病ではなかつたと僕は想ふ。

この時代は火薬革命期に入つて武器も變化した、竹中、黒田らの參謀が善き素質を持つ秀吉の脇に、甲越の兵法、孫吳の兵法、どちらが新たに用兵の知識を注入した。
武器と作戦計畫とは相關係係が密接であつて軍人の甲冑、兵器等の外貌上に變化のあるだけではなくして戦術の概念にまで修正を及ぼしたから戦争の本法則は依然として變らなくとも、それを遂行する手段（たとへば飛行機が發達して築城法も改められたやうに）變革

した。

當時の火薬は現今のそれほど効果的なものではなかつたが、敵を畏怖させる精神的威力は今日以上に偉大なものであつたに違ひない。今日でも巨彈が一秒千五百フキートの速力で鳴りを立てゝ飛び、敵の頭上に炸裂する時に味方の士氣は大に振ふものである。重爆弾を載せた飛行機が味方の頭上を飛んだ時には亢奮し切つた勇士の頭上から冷水三斗を浴せかけるものである。

無學の大將は秀吉を推すが、秀吉ばかりではなく、戰國時代に堀起した名將である賴朝、義仲のやうな、境遇上から學問をする機會を持たなかつた人が天下が覇を争ふことが甚だ多い。博學多才なもの——たとへば大江廣元のやうな——が却つてその帷幕に使はれてゐる奇現象は決して奇でも妙でもない。現代の戰爭でも將帥は必ずしも末精的學問を要しない。兵學家は必ずしも名將でないごとく、猿面郎、木曾冠者も軍人としては全く素人であつた。好んで戦ふ場合もあれば、又た勝敗なくしても絶望の戰を迫られる時もある。戰争を避け心は戰争に負けることで、敵は直ちに追撃戦に移るであらうから負けると知つても抵抗す

ることが敵に損害を與へるだけでも逃げるより得な場合がある。追ふものと追はれるものとの勇氣は非常な相違であつて、神子田長門が逃げる時に後を振向かなかつたといつて勇士の中に數へられた、後に氣を取られて振向かずにはゐられないのは卑怯ものである。

熊谷に追跡された敦盛は、すでに鬪志を失つてゐるから戦はずして、すでに結果は明かである。敦盛は遙かに赤旗を樹てた味方の船を冲合に眺めることによつて逃げる目標があつた從つて捨身の勇を缺いだから、たとひ劍術に秀でても負けたであらう。米國は熊谷の勇があつても僕らは逃げるあては無い。この國、この島、こゝを逃げて何處へ行くのだ。

敵の中心主體である總帥を薨しただけで昔の戰局は終つたもので甲越合戦では機山と不識庵とがその目標であつたが、現代は國民戦であるから一個の將帥だけが戰争の生命ではない國民が舉つて參加するやうになつて戰争の中核は氣體化した。軍需品工場に働く者も戰闘員なら軍事公債に應するものも間接の戰士であり新聞記者、宗教家、教育家までが戰争を支持

するから、どこからどこまでが戦闘員であるかの限界が付かなくなつた、支那のやうに無肺臍の國は特に急所といふものがない、南京か、廣東か、洛陽か、鄭州か、北平か、どこが心臍で血液の中心を成してゐるのが、どこも皆手足のやうだ。

戦術がどんな周到な計畫の上に立つてゐるにもせよ、戦争には豫期せられない出来事を伴ふ。一方が敵状を手に取るやうに知悉してゐるととも、他方が推測を誤らせるやうな手段を講じてゐたがために、理づめの研究を基としても組立てられた作戦でも、負けは的外れにより勝利は僥倖によることがある。國際聯盟が成立してから、戦争の定義が急に不分明になつてきた戦争の存在又は發生過程といふものと自衛権の行使とは説明の仕方によつては混沌たるものになる、説明によつては世界の半數以上は今闇ひとつあるといふこともできる。

M

米國人が邪推してゐるやうに日本のスペイ網が合衆國から南米、カナダに亘つて周密に張り廻はされてゐることを事實としても、スペイにどんな誤りがないとも限らず又た彼らが

自分の功名を誇るために故意に情報を誇張し又は捏造して本部を誤らせる事がないとはいへない。實際の戦争において「意外」に出逢ふこと多い、豫期せざる突發事變が恐ろしいやうでは戦争を始られるものではない。歐洲戦でドイツの豫期してゐたバクテリアの脅威が來らずして、想像外であつたタンダが怪物のやうに現はれたのもそれであつた。従つて必勝を叫ぶのは背後の國民を力づけるに止つて戦争には必然的勝利を豫言せられるものではない、負けた時の處置を考慮しながら進んだといふ故山縣元帥のやうな冷静な名將は珍らしいといはれる。

日本の國是の中で、これは絶対に外交手段で解決すべきもの、これは止むことを得ない場合には戦争に求むべきものとの大仕譯けをしやうにも區別のできないほど複雑なものがある支那、ソビエートのやうな妙な社會組織を有する國家と隣合つたことが災難であり、さらに米國を後に控へたことが困難を増して、外交手段で済ませられるものでも、やゝもすれば喧嘩腰にならねばならぬこともある。

日本は大自然から恵まれない様子ではあるが東洋においては立派な嫡男である、たゞ勤勉が日本の生命であつて、その外に何の取りどころもない。常に梅雨に腐つたやうな陰鬱な顔をしてゐるが一たび戦争となつたら晴天の下に大手を擴げる熱帶植物の輝を放つ。人も馬も石でさへも感激する、戦場で愛兒が死んでも親は泣かない、全土に涙なく、古い國が新らしく亢奮に若返る。

戦争に對する日本人の意氣は、地震でやられた時とは全く違ふ、地震に弱くとも戦争には強い、日本人は戦争と何かの因縁がある、他人ではない。

過去の出来事以上の關心事をもつて未來を見透さねばならぬ。開國から五大強國の列に入つた今日まで日本の國運は軍人の力によつて推進された、内政、實業なども日本の進展に就いて重要な役割を演じてゐるが獨り外交が退歩してゐる。軍人は日本を利し外交官は日本に損をさせてゐる、外交官が國際交渉に出かけたら空手で歸つてくるか又は國威に疵をつ

けて歸つてくるが、軍人は必らず何か氣の利いた手土産を提げて歸つてくるから外交官の歸つた時は國民が懇意に満ちて、軍人の凱旋のやうな歡迎ぶりはできないのである。

軍人の努力した成果が、いつも外交官によつて毀損されるから國民が軍人に對するのと外交官に對するのと信任の程度に非常の差がある、外交官が國際問題で眞空的發言をすれば後難が日本國民にふりかかる。

平時ならそれでもいいとして國際關係が變態となつた今日に、ダンスと語學の上手なことを除いて何の見込もない、氣概もない、安全第一主義の下に小才を働かせる外交官に凭れて無理に感情を弱く持つてゐられるものではない、日本人は結束して龜裂しかけた日本主義に補強工事を施さねばならぬ。

黄色人は、いくら氣張つても白人に何の脅威を與へるものではないと安神してゐたのは今から十年以前であった、白人自身が「我々は没落しつゝあるのではないか」と感じ始めたの

は昨今である。

有色人は西洋文明に適應し得られるか否かの問題は日本においてその回答を得た。いま支那がその問題を課せられつゝある。東洋の別家である印度、蘭領東印度、フキリツビンはついでいて答案を提出するであらう。答案を書くのが面倒ならそんなものを引破つて實力質質で答へるがいい。

世界三分の一の人口を有つ吾等のアジアに、君等白人は少數の存在ではないが、何分の一、何千分の一の存在か、それを意識したら自分ら少數の利害のために、さう勝手に振舞ふことは遠慮すべきである、アジアの治安を素するものよ、去つてくれ。

P

白人跳梁の一九〇〇年——三二一年

白人没落の一九三三年——四〇年

アジアは白人の支配に向つて呴鐘を撞かう。白人の專横四世紀、餘りに長い不人道であつ

た。その反動として當然に禍ひの時代が來た。海の向ふの薄汚ない國民と賤視された吾らの邦にも泰明の春はくる。同時に地球の他の半球には夕暗が訪づれるであらう。

Q

白人は支那の排日問題に對してどう向背を決するつもりであるか、支那に味方することは資本主義の自己否定であり、日本に味方することは支那の民族運動を認めない結果に陥るものと彼らは思ふであらう。白人たちはこの問題に關して、はつきりとした斷案が無いやうであるが、彼らは國際聯盟によつて日本を抑へ、それを世界の輿論といふ。日本が反抗すれば世界輿論の前に日本は重大な責任を負へといふ。

そんな勝手な難題よりも、日本人それ自身が今むづかしい問題に出逢つてゐる。白人に組みして撃取仲間に加入するが、支那に味方して撃取連中を大陸から追つ拂ふかである、この範の取り方によつて日本の動向に一大變化を來すであらう。

國外の迫力は強く、個々の人に向つて感じた時代となつた。それは列國が國內で革命騒動を演じるより、國內を結束して對外戦に一致せしめる方が有利であると計算したからである。陸軍だけでも武裝するに大きな費用を要する。その上に海軍、その上に又空軍、日本はこの三つの中のどれを缺くこともできないやうに敵前に露出してゐる。従つて戦争に最後の勝を占めやうとすれば三方面に涉つて遺憾なき準備と軍資の蓄積とを要する。

科學と機械とが主となり、肉弾と勇氣とは第二義に落ち、金が肉より力ありとする物質至

上感念からみれば日本は××××の敵ではないと、×國人がさう觀るのは成金人として無理のないところである。

戦争は黄金の投げ合であり、戦争をやり切るものは、たゞ富國のみである。勝利は金で買へる。彼は機械と金との威力をもつて全世界の委任統治を行ふべき時機が、近き将来にくらうとの自惚れも、他國からみれば世界の委任統治よりも自國內部腐蝕の方が早く進

行するやうに思はれるが、本人に取つては元來が誇大狂であるだけに實現すべき豫想と思ひ込んでゐるらしい。

次いで来るべき戦争が物資的にのみ依存して戦争の要素である精神、氣魄を加算することができないとすれば物資的統計において劣勢な日本は必然的に敗北の結論に到達するであらうから米國の勘定は簿記的には誤つてはゐない。

英國は米國の勃興を忌みかつ怖れた、歐洲諸國を誘うて米國を押へつけやうとして國際聯盟を企てたが、英國よりも有力に聯盟を利用したものがあつて聯盟はフランスの手に丸められてしまつてフランスは英國の友邦ではなくつた。英國は例の傳統的外交によつて他の諸國を誘うたが、英國のために米國の矢表に立つやうな馬鹿ものは歐洲に存在しなかつた。なぜならば米國の前では英國が餘りに落ちぶれ方が甚しいからである。名譽の孤立を誇つた氣魄が消散してゐる英國は歐洲諸國の離反してゐるのをみて、醜然として自ら米國の前に跪

拜した。英國を自分の囊中に寄せた米國は、長き手が更に長くなつて、その横脇は十分に日本を越えて支那にとどくやうになつた。米國共和黨の親支策は計畫的に日米戦争の前提となりつゝある。

世界の争覇戦といつても世界人の全體が参加してゐるわけではない。少數の野心ある國家の間にだけ火の出るやうな摩擦が行はれて、他の多數國家はその飛沫を受けて迷惑してゐるに過ぎない。たゞ僅かの國家、くわしくいへば米、英、佛、伊、露と、たつた是れだけが全部である、五本の指で數へられる少數の争ひのために世界人は血の沐浴を強いられてゐる、特にアジアにはその中の一國すらもないのである。

特に米國の一段高い頭角は他の四國を焦慮させ、世界を再分割にむかふ速度を急き立てゝゐるが、この五つの中で大小強弱はあつても、どれもまだ完全に世界を征服するだけの力はない。それを得んがために個々の國家を本位として他國を突き落さうとしてゐるばかりで世界的な汎人類的な大規模の政策を建てるるものがない。たゞ何がなしに争つて、どこからともなく壓力が加はつて戦場へと押し出されつゝある。

和平主義者は一種の陰謀家であつて危険な存在である、日本が時局に概して決然として起つた時には、國內の觀念論者は強力實行の前に姿はない、どこへ行つたのだ？

米國の平和論者、英國の労働組合は聯盟規約による經濟封鎖（第十六條）を叫んでゐるが、アンゴロサクソンを戦争に巻き込む最善の毛布であらう。被封鎖國の苦惱が封鎖國にどんな反射するものであらうか、廣角度の視野から眺めたらその無謀に驚くであらう、現に歐洲の眞中でドイツが倒れつゝある、それに對して列國は手を引いて立つてもらはねば世界經濟の一環が千切れ去つて困つてゐるではないか。

米國の考へてゐることを代つて云つてみやうか……
日本は支那に勝つた、ロシアにも勝つた、併し日本の戦つたものは相手が貧弱で、ほんの小さい局地戦に過ぎない、米國を相手にしたら勝手がちがふことを知つてゐるか。
歐洲大戦でドイツが海岸から英國を空襲したことの記憶があらう。日米戦争では、日本は

英國より的確な標的だ、ハワイ、ミッドウェー、アラスカはいゝ足場である、米國は戦争の用意がある、と、これだ。

日本は土をつかみ、水を握んでゐるが、米國は空をつかんでゐるのだ。空軍であつて空襲ではない、實際的だから日本は氣の毒なものだと附加へるであらう。世界一の飛行船は米國人の高慢を乗せて上昇した。星を嘆美しながら深夜に歩いて河へ落つこちた何とかいふ人のことを思ひ出させる。

米國機の積んでくる一千キロの爆弾は、マツチ箱のやうな日本家屋の上にどんな兇暴を逞しうするであらうか、航續能力から推せば日本は完全に米國機の活動範囲に包括せられることになる。

現代の戦争は平時に使用されない過剰の工場と原料と労働豫備隊が後方に控へてゐなければ第一線に立つ軍人は有機的に働くことはできない。日本の造機能力は平時においては辛う

じて需用を充たせるが非常時に残された製造餘力は甚だ少い上に、地形は攻めるに便利であるが守ることは數百マイルの外に防禦線が張らねばならぬから線が擴大せられて守力は稀薄になる。

戦争の原因は、どちらから始めたのであるとか、どちらが不正であるとかいふ泥をかけ合つても始まらない、外交生活をしたものは卒直にいへないやうに舌が曲つてゐるが、米國は一直線に上海事件をもつて日本の責任であると高唱してゐる。

日本が滿蒙を強壓したといふが、メキシコに向つて、ハイチに對して米國が強制したものよりは筋が通つてゐる、南京條約は支那擯取法についての英國の創作であつた。米國は支那の土地を掠奪する代りに、支那の空と心とを奪つた、空といふのは航空権であり、心とは宗教侵略である。米國が毎年一千五百萬ドルの巨費を支那の布教費に充て、三百萬の信徒を神の名において米國に歸依せしめた。米人は米國優越感念を高く双手にさし揚げて自ら救世主をもつて誇つてゐる、布教組織は周密に計畫され支那人の頭を隸屬化させるため極めて巧妙に運用されてゐる。

米國は支那に對して親切なつもりか、不親切の心を持つて臨んでゐるのか、その眞意は米国人自身にもわからないであらうと思ふ、支那に親切をすれば支那がそれを悪用して排他的材料とする。圖に乗せるだけ乗せて、降りる術を教へてやらねば支那が可愛想ではないか。米國は一たい支那をどうしてやらうといふのだ。支那のために日本と戦うだけの決心がなくして親支反日政策をもつて場外の熱狂者を喜ばせてゐるだけなら支那を援助する精神に逆行するものである。

南支に重大な利害を有する英國も日本の進出についての防禦を堅固にした。香港が打てば纏く金屬製の要塞となり、シンガポールと呼應して軍艦、飛行機、望樓、印度兵、砲台、船渠といふ完備した殺人手段の規模を大きくした、それでも尙ほ英國は絶えざる恐怖を抱いてゐる。日英同盟があつた時分の安泰な氣分を想ひ起すことであらう、東洋で日本を敵としてどんな結果をもうけるであらう。金城でも鐵壁でも戦争となつたら何處に行つても安全地帯があるものではない。

その六 財閥と戦争との關係

A

米國の財界は二十五人の會社重役に支配せられてゐるが、日本は三つの財閥のその番頭によつて經濟を振り廻はされてゐる。と、書き出したら僕は共産風を吹かすやうだが、帝國主義國家の成員となりながら支配階級の跳梁を制止しやうたつて、それの無理なことはよく知つてゐる。僕らは治維法による××の××を××してはならない以上は寡頭大番頭の後に追随して、こぼして行く分け前を拾ひつゝ國民大衆ともに進んで行かねばなるまい。

日本の金融を支配するものは資本集中による銀行の動力で、それから系をたぐつて政治の中権神經に喰ひ入らうといふやうな野望はなくとも、彼等は大きな仕事をする限りそこまで知らず／＼こゝへ進んできたものであらう、なぜならば蠱利の大きな粒はそんな怪しいとこ

ろに轉がつてゐるからである。

民主主義は多數的意識の上に立つがゆゑに民衆の意旨を尊重せねばならぬから幹部といはれる專制勢力の存在餘地は狹められたはすであるが、事實はその反対であるやうに、金融資本にも鋭い巾着切り智慧と貧乏人を残ぎ倒して平然たる慘酷な度胸をもつた番頭の指揮を必要とする。

B

どんな政黨が内閣を組織しても政治的にも經濟的にも多量の社會施設を政綱政策の中に組織されねば民衆の支持を得られない、昔の帝王でも獨裁政治家でも善政といはれるものは民意尊重——特に貧困者に對する同情を政治に反映せしめ決して無條件で資本主義を擁護しなかつたものであつた。しかるに今日の寡頭番頭は何の幸ひか社會民衆特に貧困者の意思、境遇を考慮することなく營利一直線に走つても法×、×徳、×××、×××などの十分な保障を受けてゐる。こんな資本主義財閥に取つて×××たい時代は昔から絶無であつた。政黨の御

用金を貰いだり申請だけの慈善を行つたらるでは貸借は平均しないであらう。

社會主義たつて理想論では矛盾は少いが實行に取りかゝつたら矛盾はいくらでもある、矛盾の毛を一本づゝ抜いて行つたら豚は丸裸になつて風邪を引く、矛盾は一種の保温材料である。

僕は社會から矛盾を一掃したいと思ふやうな潔癖家を嫌ふ。僕は資本主義を殺したくないため富者の讓歩によつて下層階級の飢餓を克服したいと思ふ。現在の國家構成の下においても、その範圍内で講ぜらるべき方法はいくらもある。今日の慢性恐慌は資本主義破滅の時期に入つたものではなくして貨幣制度を運用する方法を誤つた一時的の發熱に過ぎないものと僕は打診する。番頭たるものは地盤を固めることなくして財閥をして最高階段に登らしめてはならない、そこは危いところである。

僕らは生活の安定を國家の××××に求めないで資本主義的混雜の中を泳いで行かうとするのだから錦魚のやうに硝子瓶を番頭さんに振り廻はされて、鼻を擡つまいと身をかはすこと忙しいのである。インフレーションでは労働者、俸給生活者に伍して低い生活水準の

も一つ思ひ切つた低下を強いられ、中產階級なら營々辛苦の預金の何割かを没収される。デフレーションなら失業と生活苦とに挾まれて勤儉の餘地のない勤儉を強制される。インデフでも水の動搖するたびに錦魚は疲れる。餘り上下させてゐると貨幣がその信用を失つて資本主義は外廓から崩れ始める、こゝらで資本主義の攻撃を始めたら溜飲を下げて痛快がる人も讀者の中にあるかも知れないが、僕はその仲間に這入り切らないで意氣地なくも番頭さんの駒尾に付かうとする資本主義下の善良な市民である。

C

貧乏人は財閥を攻撃する資格はない、なぜならば大富豪を造りあげたものの大貧乏人でありますからである。貧乏人が自分たちの所有物——貨財、労働力、購買力を馬鹿々々しい値段で賣つてしまつたから今では何一つ残つてゐないのである。相對づくの取引であつたら法律上では、突つかつて行くべき権利は何もない。

二百圓のサラリーマンまで出世したら上出来である、別荘の番人として活きて行つても仕

方がない、職業に貴賤なしとは、彼奴！　うまく云ひやがつたものだ、そんなことをいつて阿呆をたらし使ひにするのだ。でも辛抱しろ、といつても共産主義的に總ての人が總ての事に平等に携はるといつた出來ない相談を持出すものではない、犬の群にも強い奴と尾を垂れてゐるやつとがある。強い奴を暗殺する弱い奴は底のない意氣地なしだ。

猿まはしの體になつたとあきらめろ、繫がれた紐の伸縮によつて上手に藝當を演じてみやうではないか？　面白いよ。

D

財閥といふ新しい經濟力は戰勝を経ることに幾何級數式に増大する、戰勝は彼らに取つて「商業化した特殊の形式」といへる。××の給與は薄いもので人間の耐へられる極度の困苦を強いられる、ナボレオン戦争、南北アメリカ戦、普佛戦、日清、日露戦、歐洲大戦、そんなもので何人死んで何人不具になつたか、そんな氣の毒な人達の外に超然として死ぬ氣づかひなしに莫大な黄金を獲得し得る××の×××がある。

平時においてはファシズム頭の持主が並等で、財閥を攻撃する無産頭が優等品のやうに青年たちに思はせるが、國家に事變が起つた時には、ファシズムに轉換する頭が特製上等品とせられる。戰争狀態となればプロレタリアから攻撃の××を避けて××はちよつとの休憩時間と火事場稼ぎの時間とを得られる。下層民の零細な郵便貯金が軍事公債に振向けられたり満蒙、上海事變でさへも下層者の慰問金が集つて千萬圓に上つたが富豪たちは殆んど金を出さなかつた。

E

世の中に活動してゐるものは正體と假體との兩面を持つてゐる。無産黨でさへ上海事變といつた國際的爆發性のものを前へ持ち出された時には、氣の利いたものは支那大業に同情するともに日本の権益を主張する、氣の利かないものは黙つてゐるか又は××に××されるこれは英國でも米國でも同じことで平時の赤色が首鼠兩端の鼠色となつて逆橋をこぐ。——もちろん陰では何かの動きはあるやうだが——。社會立法案を持出せばブルジョアジーは嫌

な顔をしながら正面からは反対しない——陰では何だか策動してゐるやうだが——。下積になつてゐるものは割合に正直だが社會的に勢力のあるものは水陸兩棲であつて、賛成でもあり反対でもあり中立でもあるから水陸空の三棲である。潔癖なものは眞偽ができるない保身術を知つてゐる、ゆゑに潔癖なものは社會に立てない。

戦時には賃銀が騰つて労銀者も利益を享けることはあるが、それはいふに足らぬ。企業家も儲けることはあるが一種の冒險であるから損をすることもある。ひとり金融資本家はそんな冒險を必要としないし又た冒險をやつても恐慌となれば國家經濟界安定のためといふ好辭令の下に國民の租稅で救濟があることがある、たまに慈善行為もやつてみるが、それは惡魔頬上の笑靄の一黠に過ぎない。

こんな制度は人間が深い考慮を拂つて築き上げたものではない、もし人類が計畫的にこんなものを造つたものとせば餘りに無茶な組織である、どちらにしてもこの形勢は進行を續けてゐる、どこまで進行するか、たゞ今のところ無見當である。

無産者が百圓の金を稼ぎ出すのと富豪が同額の金をもうけるのと、その勤労の難易は比較にならぬ。一方の百圓と大富豪の百萬とは同じ程度、或は千萬圓とも匹敵するかも知れない。同じ利得でもストーブもなく煽風器もない小賣店が寒の北風に吹きさらされたり夏の土用の夕陽に照らされたながら朝の五時から晩の十二時まで休まないで刻苦して得たものと。スマッシュの通つたオフキースで寒さ知らず、氷柱の立つてゐる洋室の暑さ知らずの中に、平日は六時間ばかり、土曜は半休で、日曜を休んで、月曜の午前は怠業状態で得た利益とは勤労原價は同一でない。山村海島で小作、漁撈、樵伐で無産者がいくら働いても一生に千圓を残すことは不可能とされる、その千圓は東京とか大阪とかで働く十萬圓にも相當するであらう、大阪で十萬圓を稼ぐだけの労苦を覺悟したら、同じ苦勞でニューヨークならば百萬圓と一桁を上げたであらう。

三菱の資産はいくらあるかは知らないが假りに長者番附通りの五億とする、もし岩崎が米

國にゐたら五十億の富を持つてゐたであらうと思ふ。この點において岩崎が米國に生れないで日本に生れたのを氣の毒に思ふ。地所を丸の内を所有しないでマンハッタンの全部を持つてゐるかも知れない、丸の内の坪當りの地價とマンハッタンのそれとの差違は日本の三菱台資と米國の三菱合資との財産測定の尺度ともならう。麻布島井坂は僕が用事があつてよく通るところだが、彼の邸の前を通つて自動車の窓を越して高い門標を見あげた時にはそんな感じが起るが、彼を呪ふ氣分は不思議は起らない。

三井だつてその通り、日本に居ればこそ大財閥だと、政友會との腐れ縁だとか、ドル買ひだとか罵倒されるが、米國にゐたらもつと金持ちになり、もつと贅澤をしても日本のやうなけちな攻撃を受けなかつたであらう。

贅澤は怨嗟的となるが他の一面では文明を推進する。新らしい發明、新らしい企業は贅澤の報酬を得んがために企てられることが多い。暴利の誘惑は名譽の感激とともに個人の計畫活動を刺戟する、浪費のないところに文化はなく下層民を霑はさない。公共社會經濟組織は暴利、浪費、贅澤を抑へるが、文化の進路を閉塞する。ゆゑに富豪は公共事業に金を出

すことが第一で、それがいやなら貧澤と浪費とによつて金を下層に分散せしめることの義務がある、富蒙の勧險節約は利己の甚しきものである。プロレタリアはブルジョアの貧澤を攻撃するより寧ろそれを獎勵するがいいのだ。

三井岩崎が日本に生れたのを僕は氣の毒だといつた、併し物は思ひ様だ。もし彼らがロシアにゐたらあの手でハンマーを握らされて牛隊、馬隊に伍して人隊の中で強制労働をやつてゐるかも知れない。英國にゐたら所得税と相續税とで資産の半分は削されてゐたであらう。日本にゐたから維新の國內戦から明治十年の西南戦、日清、日露、日獨、滿蒙上海事變と、一階段を経過することにMにしても、も一つのMにしても、Sにしても國家は強盛になりそれとともに財力も太つた。戦争のもうけは何はさて置いても財閥のもうけであるから日本が負けてゐたら無産大衆が反対にもうけてゐるかも知れない、無産大衆のもうけといふのは××を×××ではなく無形のある物×××を指すのである。そこを考へたら彼らはいゝ時代にいゝ運命を持つていゝ國に生れたものといへる。だから無産者は彼らに奉仕を××し、××を××する××があるかも知れない。

G

財閥を憎みながら中產階級は虎の子を財閥の銀行に預けるのは他の銀行よりも財閥の番頭さんを信用するからである。財閥の生命火災保険へ契約するのも宣傳からくる信用に眩惑されたのである。貨物は財閥の倉庫會社へ預けるのは擔保として貸してもらへる便利があるからである。信託預金もする。財閥が過半數を占めた残りの株式を分けてもらつて株主の末班に加へてもらつても何の権利もないのである。財閥の企業會社のつくつた製品を買ふのは大量生産で安いからである、營々として蠣のやうに金を盛り土を盛る。金を盛ることのできないものでも子弟に學費を入れてサラリーマンとし土を盛る手傳ひ人となる。それもできないものは財閥の建てた軍需品工場で働く、小さな工場で働くよりは政府の補助のある財閥工場で労働する方が待遇がいいからである。かやうにして國內で採取する——財閥が採取するといふよりも周圍から寄つてたかつて採取してもらふ。被採取志願者の幾萬が一つの財閥を囲んで働き蜂となる——。國內で餘つた採取力が海外へ溢れ戦争の基礎をつくり、戦争となつ

たら××××が眞先に××せねばならぬ、皆さん！ 珠勝な心がけである。

H

戦争の原因が貿易競争から出るものとせば、多くの悲惨な記録を残した戦争も支配階級のために戦つたものといへないことはない。そんなつもりで戦つたのではないにしても結果がさうした現象を呈するのだから仕方がない。日本の財閥は遠慮深く米國のそれほど悪性ではないから財閥が戦争を挑撥したとはいへないが、戦争によつて財閥の活動範囲を擴大し、歐洲戦争のやうな大規模のものでも××××の排他力による奇術であつたと聞かされたら塹壕で命を投げ出して働いた××××は驚いて腰を抜かすかも知れないが、國際經濟の潮流を冷視した理智のある人ならそれ以外の觀察は××××はずである。

現在の所有制度を再吟味することなしに、資本主義をそのまゝ讃美せしめることは御用學者によつて、所有感念で脅かされてゐる階級に對する貪婪遂行の辯護にしかならない。現代の××××を擁護する經濟法則が相當に慘酷なものであることは橋の下に臥てゐるルンベン日本の××××はそれさへもしない。

を拂り起して聽かなくとも誰にても理解できることである。米國が年額二十五億の慈善金を投するそのうちの五分一は富豪の寄附である。彼らは擣取で頭を殴り、慈善で頭を撫でる日本の××××はそれさへもしない。

財閥の慾の深さに愛情をつかして今度できた新滿蒙自由國での企業は財閥を除外して株式組織の會社を設け政府の補助と監督との下に統制を圖らうとする企てもあるが、政府の聲のかゝつたものは完全に發達しない。半官半民も満鐵で懲りたことで役人の臭ひがすれば政黨が潜入する、その上に能率が舉らないで経費が嵩む、その結果は總括的に國民の負擔となるからそれより財閥の方がいいかも知れない。

東拓でも満鐵でも總裁の任期は5ヶ年だが、政黨の都合で永くて三年短くて六ヶ月の椅子である。これでは政府からいくら補助してもらつても成績は駄目だ。僕の記憶するところでは任期を完了したものは僅かに一人あつた切りである。新に満蒙に事業を起しても、あの調

子でやられては國民は迷惑する。

満蒙には日本の利權が經濟的理由で確保されねばならぬことといふまでもないが、あんな大仕掛けな匪賊の大清潔法を行つたあとが又た財閥に獨占利益を提供して大衆がその恩惠に均霑しないのは不條理だといふ聲に二つのMも一つのSも遠慮して手を出さない。するとどうだ、満蒙を大掃除したあとの建設を誰が始めるかといふに誰もない。却つて無資力の鮮人が水田經營に出かけて前哨となるぐらゐであつて、この點においては内地大衆は役に立たないといふのは中途半端の文化人となつて生活が向上してゐるからである。満洲ゴロ、支那浪人などが蝗のやうに走り廻つても害になつて益にならないといふわけは彼らはヂヤバン製馬賊なのである。で、政府も民衆も骨折つて掃除した坐敷へ大財閥の出席を乞はねばならない。そんな機運を見計つて財閥は嫌やゝながら國家のためなら致方がないといった表情で出掛けて奉仕だと宣傳しながら××××をする。

資本家だけなら、どんなに満蒙であればても恐ろしいものではないが、それに動力が附隨すると恐ろしいものになる、財閥が満洲へ乗り出したら動力製品に低貨銀を結付けて内地工業を威嚇するであらうし、さらにロシアに對抗する食料品、支那に對する紡績織布、他の列國に對する石炭、鐵、大豆、肥料といつた國際商品が動き出して紛争の種となるであらう。大農場には電氣農具がゐる、それが内地の農夫を威迫しないでは済むまい。大きな製粉工場毛織工場等、總ての企業が擴大されて關稅の擁護のない限り内地工業はこれに對抗することはできまい、財閥の資本の進むにつれて國防戰線も進めねばならぬ。

満蒙にレバブリック・オブ・グレート・マンチユリアの標識が建てられ、日本の支持によつて樂土化するにつれて日、支、露の外の各國から集つてきて混合民族ができる。一と日本支露といつても日本人には内地人と鮮人とがあり、ロシアには赤白二民族があり、支那には滿、漢、回、藏、蒙があり、利害も風習も違つたものが各地に集團をするであらうし、米國は金をもつてドイツは機械をもつて英も鐵道關係をもつて割込むであらうし、佛、伊も進出するであらうから財閥が風の種を蒔いたら國際は嵐を持込んで、満蒙の大平原を背景とし

た戦争、戦争を背景とした経済争闘、利権争奪、その後に来るものは米國の金融的占領であらう、満蒙自由國は國際關係を複雑にし、日本もこれからます／＼多事になる。

K

世界を歩いたら到るところに凱旋門がある、ガイドはそれを仰いで昔の武勳を旅客に誇る文化の高い都市ほどそんな目ざわりのものが多い。日本にも軍服を着た銅像があるではないかといふものもあるが、日本は平たく尚武國だと打出してゐるからそれでバスすることはできるが白人國ではさうは行かない。彼らの精神的背景はクリスチの教義であり、博愛であり、平和であり、隣人愛であつて侵略主義でも拜金主義でもないのに、どうしてこんな言行不一致の下に結束してゐられるかと探求してみれば、その以前には種族を同じうしたのが原因で集つたのもあらうが、近世においては經濟上の利害の爲に都市集中となつたのである。現在では經濟關係の外に防禦と攻撃において同意する市民の共同戰線を形づくるための集團となつてゐるのであるから戦争を始めたら有利だと信じたら何時でも平和條約から自衛権

を抽出して絶對的に無理な主張をするであらう。

オランダ、スペインでもその通りであつたが今では生氣が抜けて外形だけが残つてゐるに過ぎないに反して、バルカン半島は小さいながら睨み合つてゐる。これなんかは可愛ゆい摩擦に過ぎないから世界的に火を發する危険は少いが、富有擰取地域を多く持つてゐる國ほど戦争の長き歴史を持つてゐる。

兒童から青年、青年から老人に到る貫した生活を走る長い線路には祖先の武勳禮讚心理が並木のやうに植ゑられてゐる、あの軍服を着て勳章かけた銅像の人の生きてゐた時代の働きが歴史に載つて少年の脳髄を強く着色した。

文化を誇る白人國の今日の繁盛は過去の侵略行為が齎した遺産である、どんな國でも現在占有した通商路は血の代價でないものはない、なぜかとならば通商路が一線でありこれを求めるものが二國以上であつたならば——妥協による均等に出づる外は——強い方が分捕るのである。たとひ一時に妥協して共有になつても双方とも排他心が強いから結局は強者の手に移らねばならぬ。どちらが專有するかは戦争の結果であり、戦争以外に明かな裁きは望

まれない。

そんなことをして得た血の通商路は何人に與へるかといへば資本主義國家であらば××に與へられる。中小資本家の手では受け切れない大物であるから、たゞ大財閥のもうけの臭ひを嗅いて満足する外に方法がない。財閥が無理に國家から奪つたものではなくして自然に轉げ込んでくる暴利である。かやうに國民は財閥に奉仕したが財閥はどんなサービスをしたかといへば軍事費に向つて多額の負擔をしたといふ辯疏は、その金はどうして得たかといふ反駁に對して尾を出すことになるであらう。

満蒙には原料がある、消費もある、消費から追求して生産に到り原料に廻つてくる時はスタートは資本投下に歸する。生産品から原料と製造費と運賃（保険料、研究費等）を引き去つたあとの剩餘は資本投下者と労働者との利潤に歸属すべきものであるが、資本家には企業の危險料を受けねばならぬ外に貨幣の中間介在によつて勞資の公平な分配を決定すること

とは極めて面倒な仕組みになつてゐるから、資本家が労働者の當然の利得を呑んでしまふことは傳統的であり合法的なものと認められる。しかるにこゝに労働者をして権利を主張せしめることを憚る新らしい力が出現した、それはストライキ破りの動力である。資本家は云ふであらう労働者が儲けさせたのではない、労働者より廉く、そして勤勉である動力がもうけさせたのであると。

人間は職業によつて損をするものと得をするものとがある、犠手してゐて利益が入つてくるものと一生を働き蜂に終るものと、みなこれ運命である。

如何ともすべからざる運命に反抗して跪いても、もがき損である。共產國家に在つても幹部と下積み黨員との間は奢壟である。同じく大臣になつても三種ある、刑務所へ引かれて有罪になつたものと、證據不十分で青天白日とは行かなくとも暗天黙日ぐらゐで前科付きを逃れたものと、同僚が未決にゐても世間體を憚つて辨當の差入れを遠慮してゐるものとの天地人である。他人の幸運を呪詛するより自分で自分の樂境を開拓することが間違ひのない幸福である、と、さて、僕は何を害くつもりだつたか、さうだつた、財閥の番頭禮讃だ、本論

に立戻る。

M

領國制度の割れた殻から、これまでに存在しなかつたところの、サムラヒに代る職業的軍人——國際會議ではエキスパートといはれたもの——と、ミステリーに代る海外商戦商人——商業史ではアドヴェンチユラースといはれるもの——とが飛び出した。軍人の後には商人、商人の後には軍艦が追随して、商人は國益を増進するものとして、軍人は國威を發揚するものとして、商人が本國へ運んだ外國財が租稅となり軍事費となり軍人を推し出した。商人といつてもその名の示すやうにアドヴェンチユラースの無茶ものであるがゆゑに向う見ずに商陣を遠征せしめる。それを擁護するため廣範圍の防衛を要するが、軍人によつて爲された防衛は消極的から積極的攻勢に轉するを原則とする、國際競争の敵彈の前に勇敢に身を暴露して到るところに有形无形の衝突も遭遇戦も行はれた。

それから今までに何度も平和危険(恐慌)と實際戦とが行はれたが、その度ごとに破産者

と戦死者とが續出した。

日本が今日のやうな變化を來たしたのは科學の進歩でも人文の發達のためでもない、そんなものは附隨物であつて舊い小日本を十年ごとに大きくしたのは、ちよつと云ひにくいことではあるが、戰争のためではなかつたか。

戦争は勝つても負けても×××ぬといふのは嘘である、道徳家はわざとそんな嘘をいふが大成金、新興國は財産目録の柄を高めたり地圖の色を擴げたりする。

僕は日本が國を富ますためといつた不純な動機から戰争をしたとは云はないが、餘儀なき戦争が偶然に日本を利益させたものといふ。日本の主たる目的は害を除くに在つた。害を除きつゝ滿鐵線に沿うて北進してゐるうちに偶然にも滿蒙に新國家が現はれた、交通、關稅、財政、金融、國防、郵便、貨幣等に整理の手が着けられてゐないから、まだバラツク式ではあるが虐政だけは廢除せられた安住の確立した國家ができ上つた、それが日本と満洲國の大

衆を、どんなに益するかは將來に殘された問題ではあるが、前途は必らずしも兩國に不利ではあるまいと思はれる。

戦争が採算に合はない社會活動であつたら昔から今まで歴史的に繼續的に、狂氣のやうになつて非戰闘員までが聲援するはずはない、聲援しないものは平和主義者であるが、同じ平和主義者といつても骨の髓から戦争嫌ひのものがあり、憶病によるものがあり、正義觀念を誤つてゐるものもあり、又た道徳家の假面をかぶつてゐるが、一朝戦機が熟すと見れば主戦論者に早變りする利口ものもある。米國の平和論者は——宣教師をその中に包括して——後者に屬する。

どんな社會運動でも萬人が皆損をすることのないやうに、一般が全部利得に均霑する公平は望まれない。一方にのみ與へて他方に與へない厚薄濃淡のあるのが面白いところであるがどちらに轉んでも損をしないのが本國にどうろを卷いてゐる大財閥である。

彼らは戦争によつて資本主義の強力的維持、需用の強さに乘する戦時の不當に近き利得、

通商路の延長による利益の把握、生産餘剰の處分、そんなものゝ總和が肥満資本家の脂肪と

なつて一層の血色を善くし肉を附け加へ、戦争は一直線に富の王國へ導く。

無產大衆にはそんな恵まれた機會がなく飛行機も内燃機關も潜水艦も自力で設計することができないから、ブルの指導の下に軍需工場で働き兼ねて高い財閥をより高くするため働く。詰らないといへば詰らない様だが彼らはこんな大相場に參加すべき證據金を持たないのだ、と、こんな怨嗟的のアツビールを始めると、僕が當節流行の資本主義打倒の假聲を使つてゐるやうだが決してさうではない、何とかして平時においても特に戦時においての利得を公平に分配する方法を讀者とともに紙上で搜索しつゝあるのではないか。

日本に財閥が無かつたら國家今日の繁榮を見なかつたであらうが、同時に財閥が無かつたら今日のやうに思想が矯激にならなかつたかも知れない。財閥の功過の貸借は、よくバラン

スが取れてゐるや否や、いさゝか検討を要する。

現代では財閥の異常な膨脹とともに時代に特色づけられた現象は、無產者の政治的に法律

的に社會的に集團として確認せられたことで、無產者の生活權擁護運動が事變の終るとともに勢ひついて現在の進行に速度を加へるであらうことである。

これは威すためにいふのではないが、富豪が國民全部の利益を無視して私腹を肥やすに鑿進すれば、大衆は建設維持の穩健から×××の××に向ふことである、事變の後には大衆の力が××に對して×××となることは世界的である。

何とかして高賃銀を支拂つて労働者の根強い反感を緩和しようとする意旨は十分に資本家の胸中にあるが、それは英國の労働黨内閣の下に新しき失敗を演じたことで資本も労働も國家も、ともにへたぱりかけた。組合は労働者の生活標準を維持するため失業擴大といふ犠牲を拂つたから全體として何の得るところもなかつた。

帝國主義を養ふものは富豪の納稅ではなくして却つて間接稅である、富豪の不當利潤の大部分を消費力の培養に振り向けたならば、國內の經濟事情は餘ほど整理せられるであらうがそれは理想であつて、現實としては國の收入の大部をもつて富豪のために海外市場、海外原料の×××に充てられる。

この弊害の増大するに従つて一種の國家社會主義が擡頭して國粹主義が社會主義と妥協するに到るかも知れない。日本では百圓の郵便貯金を持つてゐるものは自ら無產者とは信じてゐないで小ブルデヨアの誇りを持つてゐるから割合にお目出たい、無產運動の振はないのはそこにある。

ドイツのヒットラー黨が俄然として力を成したのは國民性に合致したためであり日本にも發達する可能性は濃厚であるが、日本の政黨は妙な組合せから成つて、政綱の中には社會政策も國粹思想も何でも包括して平和にも戦争にも向くデパート式であるから原則的に實際行動的にも極めて不明瞭なものである。

國家社會主義が行はれたならば富豪の力を破壊して生産手段を國家に委任することになるであらうが、そんな改易をした結果を考へてみると政黨が財閥の代理をするのだから掠取は却つてコム・バルソリーになつて労働者は意思に反した働きでも公然かつ義務的に強要され、解放は理想と遠くなり、支配者を換へた掠取は今まで進行するであらう。

そればかりではない、國家と國家との間に民族意識が強くなり、生産權が國家に集中す

る結果として統制に利便を與へるから、戦争は極めて簡単に、そして機敏に行はれることになるであらう。

大騒ぎをしてそんな改革を断行しても理想が翼を擡げて飛び去つたあの無産者の幻滅こそ恐るべき自棄行爲を伴ふ。

P

政黨の得手勝手な主張によつて平穏であるべき公衆生活を國家對抗の急激な渦の中に投げ込み、戦争をして明かな國策上の争點に立たしめないで超國策の社會活動たらしめることがある。今後の戦争は動力の過剩と人口の過剩とを消化させる劇薬として使はれるから東洋において戦争必至の情勢は國民をして暗黙の間に認識せしめて、こゝへ國家社會主義の出るのは、萬ざら出處を誤つてゐないが、それは大衆の期待してゐるやうな幸福なものではあるまい。

國家社會主義といつても社會主義ではない。國粹主義者からは國賊呼ばはりされるのを回

避し、社會主義者からは搾取私黨といはれる目標をカムフラージしたものであつて、戦争團體に近いが、社會主義とは全くの別種である。驢馬が散髪を怠つたからといって綿羊になれるものではない。

生産、分配、交換の手段が資本主義經濟から切離されて國家の管理に移つたら財閥介在の中間はないが同時に労働者の享ける幸福は議論的内容が充實してゐる割に空虚なものである。歐洲大戦で資本主義政府も資本家に氣兼ねしてゐられないで、敢然として生産、分配、交換手段を國家の強制管理に移したことはあつた、經濟の國家管理、労働力の國有は資本も労働も塔へられなかつた。こんな破滅的な非常秩序は戦争終了とともに待つてゐたとばかりに戦前の状態に還元して國家の強い手は引つ込まれた。もし國家管理が理想的なものであつたら暫行的政策が今日にも尚ほ續けられて財閥は姿を隠してゐるはずであつた。

Q

一たび戦争を経ることに國家は進歩する。國家は戦勝後に衰へた例はあるが、それは驟慢

と怠惰との結果であつて少數の例に過ぎない、戦勝の後には資本主義が確乎たる支配権を植付けるが、戦敗の後には恐るべき×××××が擡頭する、破壊的情勢は戦敗後ばかりではなく時としては××××のために戦勝國にすら芽ぐことがある。

財閥が企業の高下駄をはき金融のオペラハットを戴いて巍然頭角を挺んでてゐるが、公平な富の分配からいへば財閥の蓄財身長が延びるともに課税尺度がそれ以上に伸びねばならぬ、國家財政の眠つた原則の自覺めを社會大衆が促がしてゐる。

選舉ごとに大衆の投票を掬ひあげる手段として各政黨が社會主義と富蒙征伐の旗幟を翻へすであらう。いまに大衆は租稅による勢力の削減——取得累進稅、遺產相續稅、資本稅等々の加重——を要求し始めやう。さうならば經濟界は勢力の集中中権を失つて國力は氣體となつて消散するであらう。かくして資本家を鋸で引き倒したあとの無産大衆は陰鬱な顔を蒸しタオルで拭つて晴々とした樂土に住めるかといふのに決してさうではない、そこに條件がある、世界全體が××××になるが、單に日本と×××××とだけが××××になるからである。世界が×××××に統一されずして日本だけがさうなつたならば戦敗者のやうに強

國から武力又は經濟力をもつて征服され、國內の財閥に搾取される以上の、何百倍かの力をもつて國外から掠奪されるであらうから、資本財閥の打倒は無產者に取つて潤滑を下げる快はあるであらうが、次いで來るものは更に強き搾取力であるから潤滑は再び吹にこみ上つてくるであらう。

R

手近い例が滿蒙善後策である。日本が滿洲より搾取どころか滿洲に搾取される年月は暫く續くものと見ねばならぬ、大衆は滿蒙に投じた血と金とによつた利益を財閥の獨占に歸せしめてはならぬといふが、滿蒙の利益は今日資本を投じても收穫を十年の後に待たねばならぬから一攫千金の夢を抱いて出かける徒輩は國家の長策を妨げるものである。小中工業に開放しても支那の商工業者と對抗するだけの粘り氣がない、勞働者が出かけて苦力と取組んで賃銀上の勝味はない、屯田制は北海道の開拓に貢獻したが滿蒙でも効果的であらうがその成功は遠い將來のことである。關稅を高くすることは時代錯誤であり日滿間の關稅を撤廢すれば

食料原料は日本に流入して農村、炭坑は先づ破滅する、双方とも荒廢するであらう。從つて日滿を一括的に考へることはできないが別々に切離したならば日本が滿蒙へ進出した効果を稀薄にする。誰が行つて、どうする、財閥が出かけないで誰が行く。

日本内地は資源が涸れ果て見る影もないが、アジア大陸には天惠が手をつけず保存されてゐる。これを歐洲諸國が吸ひ殻のやうに振り盡された土に比べて、優れた未來に輝き、その地上には低廉な労働力があつて、しかも未組織であるために弱く、財閥に取つてこなし易い組織になつてゐる。

S

金鎖を見つけ出したものは、いつでも無智にして無資産な寒村の樵夫であるが、その権利を安く買收してそこに大仕掛けな機械を据ゑつけて企業化するのは資本家である。

資本の効果は集中によつて強力化し、分配によつて解消する。國際凌轢の中に立つて資本の強力化尖銳化によつて海外の市場に血路を開いて行くのは利己的から出たものであるが財

閥は國家に對しても相當に盡してゐる。M、M、Sの財閥を國際間に突き出す時は米、佛、英などのそれに較べると、また力が弱いから、國際競争には、もつと太らせたいと思ふ。日本財閥が大きいといふのは、ほんの國內的だけであつて國際商戦に奮闘してゐる姿は極めて微力なものである。だから日本の財閥も、もつと大きくかつ強くなつてもいゝ。三大財閥もその次の二流どころも合體して一塊となつて、國外に、もつと強く進出してもらひたいものだ。

商業は戰爭でないといふ十八世紀の學者の謬りは訂正されて今では立派な戰爭である。たゞ商戦といふ名において平和的にみられるが、實戦とどこがちがふ。死屍累々たる破産者と廢墟となつてゐる工場は商戦の敗者である。國外のみならず國內においても戰争は戦はれて中下層は刻々に貧乏化されつゝある。工場に新しく職を求めるものは地方自作農にあらずんば中商工業者が大資本の壓迫によつて家も資本も土地も取りあげられ、裸にされて勞働市場に筋肉を賣りに出たものである。

しかるに日本全體が貧乏になつたかといふに、貧乏になつてはゐない。反對に日本の富は

躍進しつゝある。人口の増加より富の増加率が五パーセント高い。いま五十年前に比してどこの地方でも人口は増加しつゝある、それ以上に富は増加しつゝある。生産も増加しつゝあるがそれ以上の率をもつて貧民も増加しつゝある。財閥はそんな危険の対象の中で富を蓄積しつゝある。いろいろの手段でそれを隠蔽してきたが隠蔽し切れないので、それが白晝に現状状態が暴露しかけてきた、財閥は古い手を換へねば××である、ドル買ひといったことが、どんなに物議の種となつたかを思へば、この上は國內でもうけることを斷念するが賢い。

日本の財閥もこゝまで成長したのであるから國內で餓鬼大將となつてゐるより國外で英米佛の大物を相手に争闘して男を磨くなら國民は喜んで財閥の存在を認めるであらうし又た後援を畜まないであらう。

文化の低い他國に商品を押付けやうとしても、その國は機械を買つても牛産品を買はないほど賢くなつた。その中に機械、までも自國で製造するやうになつたら、もう購買市場として

の滋味を失つてしまふ。最近十年において支那の工業は三百パーセントの大飛躍をした、布拉ジルもフキンランドもボーランドも濠洲もこれに劣らず飛躍した、これらの購買市場は遠からず生産工業地帯となつたら物資は滞積する方であるから、これからは國內で製造したものを他國に賣りつけることが困難であつて、この困難を克服することが財閥の國家奉仕である。

今日の生産と消費との妙な食ひ違ひのまゝで進むことは、破産に通ずる旅程に上つてゐるものかも知れない。たとひ國民の生活費とともに生産費を極度に低下して一時を切り抜けても道中の一歩くに過ぎない、相手方のない取引は、いくら安くしても賣れるものではない。海外の市場も前述の見透しがついた、購買力のある國は購買力以上の生産力を持つてゐるし、未開國は購買力が少くして貿易の逆調を防ぐため國産品愛用主義を鼓吹してゐるし、野蠣地では文化品を買はない。かやうに外國市場を断念したら内地市場はどうかといへば尙更らしい、資本家が労働賃銀を引下げ、物價を高め、失業させ、貧困に陥れて、それに向つて生産品を買へと迫つても仕方がないではないか。

こゝに隣近な例をあげる、經濟學の入門だと笑つては困る、笑つても別に差支えはないが——織物工場がある、流行に投する意匠はお互に秘密を守つてゐるものである、同じ一ヤルドの織物でも柄によつては五圓ともなり六圓ともなるが嗜好に投じなかつたら原價の三圓でも賣れないとする、工場は冬物を夏に織つて時季を見計つて九月に市場へ出す、この時に秘密にしてゐた意匠が始めて明るみに出るのである。

甲の意匠が乙より優つてゐた時は乙の資本家は損をするが工場に働いてゐた労働者は自分らの責ではないとして賃銀を値下げして損失を分擔するものではない。丙の意匠が甲と同じものであつたとしたら、双方ともに嗜好に投じてはゐるが生産過剩であつたら、甲の獨占利益を許すものではなく丙から求められた競争を甲は逃げることができないで安く賣るから甲乙丙はともに損をする。

甲の製品が意匠も善く競争のない稀少性價格を持つたら資本家はもうけるであらう。その

時に労働者が資本家の搾取を屬づけても、前の場合のやうに資本家が損をした時に損失を分擔しなかつた労働者が、大もろけをした資本家に分け前を迫る権利はない。

もうけさせると、もうけさせないと資本家の力でも労働者の力でもなくして社會の力である。どんな事情の下においても損得は不合理で、社會大衆が不用意の中に生産物の損益決定権を握つてゐる。

手工業時代には生産高が少なかつたから餘り經濟法則が手きびしく働かなかつたが機械が大量生産するやうになつてからは思惑が一たび外づいたら工場は破産し労働者は失業にまで投げ出されるが、その製品が賣れないものかといへば、必らずしもさうではない。賣れないで困つてゐる製品を大百貨店が一手に買占めてわけもなく消化させてしまふことがある。彼は大きな市場を持ち、又たび劣等品でも優等品のやうに思はせるだけの信用を持ち不用品でも必需品のやうに、流行おくれでも流行の尖端ものゝやうに宣傳するだけの力を持つ。死んだものでも大資本の息を吹きかけたら踊り出す。

十人の九人までが購買力を失つて貧困を訴へてゐるところへ百人でも使ひ切れないほどの生産品を面前に積上げるのであるから物資は潤澤ではあるが分配組織の厚硝子を隔てた美酒佳肴であつて貨幣を介して交換するにあらざれば、手に入れる途は一つしかない、それは××を破つて×むことである。

物資は生活の必要と別々になり食料は腐敗させても胃袋へ入つて來ない、貨幣を持たないものは消費市場から締め出される。働くかれば食ふべからずが原則であつても原則だけでは生活はできるものでなく原則が實地に働いて始めて生活ができるのである、働く途はなくとも人類は消費を要する。

動力は労働力に代つて、將來にいくら好景氣が訪づれかけても労働力に戻つてきてもらふ必要はなくなつた、なぜならば企業家は労働力ほど高いものはなく、労働力ほど安いものはないことを知つたからである。どうしたら労働力を減じて生産高を高めることができるかとは工

場の能率技師に課せられた宿題であるから、技師は企業資本家に忠實なる考へとしては、動力を多く使用して労働者を醜首せねばならぬことである。

勞働力を要する仕事が漸次に減少してくるのは經濟界の新現象であつて、消費を要することは昔から今まで、今から未來まで一貫して變らない鐵則である。

手工業時代は幸福であつて、供給が需用と調子を合せてゐたが、現代の生産は大衆から採取を續けて貧乏線から突然として飢餓線に立つてゐるものに向つて尙ほ生産を續けてゐる。今日及び今日以後の生産ぶりでは市場として地球は餘りに狭く人類は餘りに少い、人類が少いのではなく購買力を持つ人類が少いのである、國內に溢れた商品と國外からくる商品とが押し押されて輸出入が平均したら餘剰はない。

相模栽培業者が妻を娶つた話がある、妻を娶つた目的は人糞肥料を得るにあつたからこの結婚は間違つてゐなかつた、なぜならば妻は必ず用便しないではゐないからである。しか

し結果は面白くなかった。

妻は食物の消費に比して排泄物の生産量が少かつた、これが昔の經濟情態であつたが今日では生産が多く消費が少く、消化不良で機械が生産をこなすだけの消費を呼ばない、全く彼女の製肥術を逆に行くものである。

財閥も收入が多くして支出が少いからその差額は柑橘を肥やさない、貧民層はその反対をやつて財閥を肥やす。

利権漁りの政治家は近頃は一向景氣がよくない。利権らしい利権は一括して領袖の手から財閥にさらはれるからで、代議士になつても利益的に張合ひがないわけであるが、そんな張合なんかは有つてはならないが、どちらにしても國民は迷惑する。

財閥は獨占はあつても割合に暴利を貪つてはゐない、暴利を貪つたのは財閥が今日のやうに固い基礎を築きあげなかつた以前のことと、今日の財閥は堅實一天張りであるから財閥系の銀行會社の利益は六朱を出ない——八朱一割の配當は積立金を合せた資本から出る——他の株式會社個人商店の方が却つて暴利を貪つてゐる。

X

生産は自動車で走り飛行機で飛ぶ、消費は駆りながら追つ掛ける、財閥御用の經濟學者は駆りのお臂を鞭つて前進を續けさせても六朱を出ない。

勞働時間數又は勞働能力を尺度として測つたものが調査の回轉數によつて測定される時代に經濟學者の意見は少々の訂正では間に合はない。その學説は生産諷諭で人間生活の否定であるから動力の前ではその説は化石である。世を擧つて秋風落葉の中に財閥だけは華を咲かず、實を結ばない狂花ではなからうか。

貧乏を根絶して全國民が皆財閥になつたら申分はあるまいが、それでは財閥といふ特異性がないし又たそんなことはできることではない、なぜならば財閥といふものは貧民層の上に建つ樓閣なのである。

機械よ、勝手に生産しろ、人間よ、勝手に消費しろ。二つの間に聯絡がなく、却つて矛盾がある。その中間に寄生して兩者を操つて太つて行くのが金融財閥である。

機械が人間に勝つて社會が統制を失つた、そこに現はれたものは寡頭金融財閥ばかりと思つてはならない、多數の貧乏人も亦たその產物である。

機械と××とは世の中を荒廢せしめるが、××は貧乏に對して責任感念がなく機械も消費調節に對して責任を負はぬ、血と涙との通はないところと、觸つても冷たいところは××と機械と共通である、非人格的で節制のないところも相似てゐる、財閥の自家辯護の呼び聲は油の切れかゝつた機械の軋る音に似通つてゐる。

こゝまで、嫌やな結論をつけるところまで讀者を引つぱつてきたが、僕はこゝで明かに結論をつけることを遠慮しやう。併し現下の日本の國是としては無產階級と財閥とを並べて國際的共同戦線に立つてもらひたいと思ふ。いま國外に向つて力と金とで突つ張らねば國際的攻撃に對して日本が凹む、だから好きだ嫌ひだと躊躇をいつてゐる時ではない、國難を前にして喧嘩もしてゐられない。喧嘩の話なら後でゆつくり聞かう。

その七 馬と電氣と戰爭

A

君は落葉を見たことがあるか。ないつて。僕は見た、それを話さう、愛宕山の一夜を想ひ出してみやう。愛宕といつても東京の低いあれではない京都の高いそれだ。

かつて天狗を宿めたといふ大きな檜——杉ではなかつたが——蘇東坡が「根は九泉に入つて曲處なし」と吟じた十圍もある老いた檜なのだ。ぱり／＼と響いたとともに紫電一閃！マグネシユームを燃やした寫眞班の一齊スナップのやうな——あんな小さなものではない、もつと強く想像してくれ給へ、とても凄いところが想像できないかね、困つたね。まあいゝ。その紫電が一山を震撼させて檜に落ちた、皺膜が裂けたと思つたが無事であつたことを祝福してくれたまゝ。翌朝それを見たらどうだ君！その太い高いやつが捻ぢ切られて堀起され

てゐるのだつた。人間の力なら十人が一ヶ月もかかるやうな破壊を一瞬間にやつてのけて、あとは晴天白日で知らぬ顔をしてゐる、その雷の正體といふのは電氣といふから驚くよ、雷といふものは破壊するだけて善後策に對して何の考慮を拂つてゐない、少し責任感念のあるものにはできない亂暴だ。

その電氣が太平洋の向うで雷鳴をやると日本は憂りだ、日本人にビリ／＼つと感じるほどワシントンの電氣は強力なのだが、今では科學のために人間が雷の代りに飛行機を使ふ、重爆が落雷の代用だ。こやつは狙ひをつけて落とすのだから雷のやうに氣まぐれに深山の植物を打倒して自ら快としてゐるやうな超世間のものではない、君や僕などが群集してゐるこの都會のその頭上から見舞ふのだよ。

平時でもたゞ商敵を撃退したり降伏させるだけではない、根こそげ掘りかへすのだ、塵芥だ。

B

電氣は動力となつて機械に魂をつける、動力の行くところには恐慌と失業とが殘る。米國は戰術として電氣を擡んだ、歐洲人は始めのうちこそ米國の電氣に對して黙つて冷やかな微笑をもつて酬いてゐたが、一つの新らしい機械が造られるごとに十の悲しむべき現象が發生して、それの堆積がつひに今日の飢餓世界を開いた。生産物は堆積してそれを買ふべき金がない、美人が金持ちのおやちに抱かれて眠り、駒「馬」痴漢を乗せて走るといふ變態世界である。

C

君は支那馬に乗つたことがあるか、僕は痴漢が瘠馬に乗つた經驗を持つてゐるのだ。支那では南船北馬といつて南方には沼澤河湖が多いから船で旅行するが、北方は平原山岳であるから馬背で行くのが便利なのだが、支那人は歐米人に捕取される腹いせに馬から捕取するから馬は瘠せて倪黃の山水画のやうに骨が突兀として乗り心地が悪い。

南方の方の南京で畫舫に乗つて玄武湖へ出やうとしたが國民政府が、あの有名な奏准の運河

に畫舫を通じさせないほど兩岸を埋めたから僕は馬車で出かけることにしたが、支那馬の意地の悪いのに驚いた。

孝陵附近に少しの高低がある、坂路にさしかかると馬はぐる／＼と廻るばかりで決して進まうとしない。お客様が降りると眞直に進むがお客様が乗つたら横にねぢれて駕者がいくら鞭をあてゝもぐる／＼廻りをやるだけだ、君！日本の馬を想像してはいけない、日本の馬は支那のそれに比べたら猛獸だ。

支那馬はおとなしいが、つむじ曲りのものだから僕を乗せないので、馬まで排日をやるのだ。

戒厳令が布かれてゐたから辻々には衛兵がピストルを突き出す、今日の衛兵は昨日の苦力であり一昨日の匪賊であるから馬より恐ろしいものである。馬と衛兵に脅かされながら城壁を出て場末の細い巷へ出て、そこで、君、とう／＼馬車が顛覆したのだ。

その邊は回々教徒（清真教）の集つてゐたところで僕はそれらの人々に扶けられて一日を油くさいところに暮した、その邊はアンペラを組んで生活してゐるところだつた。

こゝでちよつと論文を挿む。

支那の手工業は主人と被傭者との相互依存主義であるが、廣東上海あたりで突として起つた労働組合は雇者に向つて革命的挑戦を起した、労働者の一部は支那の舊制度から反逆的に離れて行つた。

外國歸りの學生によつて指導せられ、官憲の禁壓を排除して潜行的に蔓延しつゝある。これまでの運動は、ロシア革命より古い歴史を持つてゐたにかゝはらず無方針で騒いてゐたのであつたが最近ではソビエートの受賣りで、實行の可能と不可能とは別問題としては彼らは理想的のスローガンを掲げて旗幟を鮮明にした。

運動は北方より南へくるほど盛んで、廣東、上海を除いてみるべき團體はないが雷同者（ブラインドフォーブ）の澤山を持つ労働組合に、未組織のものでも一呼して合流させる勢ひを持つてゐる。共和制を布いた今日では立派に政治的に合法的に動けるはすであるが頑固な傳統が共和制の實際の

運用を拘束して昔ながらの專制治下の民俗を脱してゐない。

E

支那を混亂させる因縁は十指を屈することができる、學生運動もその一つである。日本のインテリは國際協調思想を持つてゐるから愛國心が薄いといはれるが、支那のそれは愛國心が強いともいへるし、エゴイストであるともいへる、どちらにしても世にもうるさいものは、支那のインテリである。

日本が強國の列に躍進したその秘訣を習得しやうとして支那は三千の學生を日本に送つたが、これは學問的、精神的に過ぎなかつた上に、日本の教育者が指導方法を誤つたために本國に歸るや直ちに猛烈な排日運動の首唱者となつた、彼らは日本に留學して備に日本の弱點と缺陷とばかりをみて歸つたのである。

日本に學ぶより日本の先生である米國に學ぶことが日本を乗り越し得られると考へるやうになつてから今日では米國に學ぶものが多くなつた、米國で學んだものは崇米家となり日本

F

て學んだものは侮日者となり、ともに排日に合流する。

支那における高等學府もこれに負けてはゐなかつた、或はそれ以上の惡性であるともいへる、大學は排日の巢窟であり教育は治安に害のあるほど左傾してゐる。

さらに在支外國人の利害が錯綜して日、露、英、米、葡、獨、佛といふ順序に四十萬の勢力がバラ撒かれてゐる、四億八千に對する四十萬は物の數でもないやうであるが、その資本機關、勢力は支那全體を混雜させるに十分である。

支那の思想は輸入ものが多く、三民主義といへども孫中山の創造物とはいへない、三民主義に助言するものにソビエートがあり、英國式の國家主義に反抗する民族主義がある。擇取階級の軍閥があり、擇取軍閥と財閥と帝國主義列強とを合せて攻撃する國民運動がある。運動に秩序統制がないため外國の干涉を招いて支那人自身が支那人全士を擧げて世界列強の角逐場として提供してゐる、戰争を招くものは支那人それ自身であるともいへる。

支那は國家として自給自足ができるやうに、支那の社會組織そのものが自給自足である。これは印度でも同じことであるが、開港場から五十マイル以上も離れた田舎へ行つてみたまへ、そこに支那の本當の平和な生活が展望される。

溝渠がある、その兩側には自然の堤があつて楊柳や櫻が生えてゐる、晩春には楊花が風なきに飄々として空に舞つてゐる。緩く流れる水勢に任せて船がゆる／＼と行く、堤の上に細い道があつて一輪車が辛うじて通つてゐるところもあり、軍用に徵發——或は掠奪——されたあとには車も牛も馬もない、人間の肩が車となり牛となり馬となつて荷物を運ぶ、荷物を運ぶといつても交通が狹範圍に限られてゐるから一日程か、多くも三日程を出ないのであらう見渡す限りの廣野の中に生れたものは一生のうちに海も山も知さないでこの世を去つてしまふ。

排日とか愛國運動とかを叫んでゐる青年は一部富裕な家の子弟で、開港場で腐化して一種

族に過ぎない、そんなものは支那大衆の實際生活の對岸にある。

彼らは苛税も經濟侵略も餘り氣にかけてゐないユートピアンのやうにみえる、運命に逆はない哲人のやうである。

かやうな支那人を相手に抗争することは、抗争するものゝ心理が、自責なくしては説明できないであらう。

馬車の顛覆から支那のことを長く書いた、「馬と電氣と戰爭」との元に還らう。

人間は自分より智慮の低い牛馬を使つた、機械を腕で動かした、つひには動力を使ふに到つて、人が動力を使ふか動力が人を使ふかの區別がわからなくなつた。馬の力をもつて何馬力と數へるが、馬はたゞ單位計算に用ゐられるだけで馬の効用は電氣文化ガソリン文明に驅逐されてしまった。

Trolは腕の延長であり機械は道具の延長であり、動力の魔手は太平洋を越えて南洋を搔き

廻はずほど長く、競争に迫車づける力の強さは驚くべきものがある。動力は排他的であるから共存共榮の原則を無視して掘りかへす、帝國主義を進展せしめるに打つて付けた前軍である。

科學と機械とは平行的に直線に進んできた、その兩側には人間の労働力を排置して操縱せしめたが、動力は機械を非字形、梯子形に組織換へをして主要機械の兩側には補助機を排置して自動的裝置として完全に人間を排斥してしまつた。人間の便宜のために造られた機械が機械の便宜のために人間を餓をしめた、馬が尾を掉るのではない、尾が馬を掉るのだ。物が心を支配するのだ。

馬の臂が騎手の頭より高いのは變態だが、鶴越えの逆落しに勾配の急なを形容して「馬臂人頭より高し」と山陽外史は名句を吐いた。

騎兵は敵の弱點へ味方の勢力を急速に集中せしめる用兵上の効果はあつたが満洲事變でも自動車がこれに代るやうになり、高梁の陰にかくれてゐる馬賊も飛行機から爆弾を降らされでは逃げ路もなくなつた。

人間生活には飲食と住居と光熱と被服と文化との五種を條件とする割合に貧澤なものであるが馬は食物のみで済む簡易生活である、食物の不足した時が馬の不景氣で秣が前に積み上げられた時が馬の好景氣である、その上に馬にはいゝ事がある、それは貨幣のないことである。

馬には貨幣がないから直接に草を食つて行けるが人には貨幣があるから必要以上に山積せられた滯貨を前にして貨幣の媒介なくしては食ふことができない、食ひたくとも購買力がないから買へないのである。ソビエートの貨幣否認主義は馬の主義であつて人の主義ではない製品に食傷してしかも分配されないのが資本主義である。

空腹な馬の前に堆積した秣があつて、それを食はさないで無暗に臀に鞭を中てたならば馬でも人間に抵抗する、人でも馬でも正しい分配がなくては、しまひには支配階級のいふことも聽かなくなる。

科學の計算では動力の使用によつて大量生産で安いものが着られ安いものが食へるはすになつてゐるが、それが反對に意外に高いものを奢り食つたりしてゐるのである。收入の一尺と支出の一尺とが並行して伸びて行くのではなくして收入がそのままで支出が倍に伸びたら生活は半になり、收入が半分に縮んで支出が倍に伸びたら四分一になり、支出がそのままでも半分になつても失業して收入が無くなつたら零になる。政治家は下層生活のアツビールなど馬の耳に風である。

感じてゐるやうであり感じてゐないやうでもある、たとひ感じてゐてもその対策を講じないで、風は馬の耳を支配するが馬の耳は風に命令することができないといふ。生産と消費とが交互に假裝敵となつて、米國の軍艦が現在のまゝで日本が半分縮めたら米國はそのまま二倍になつたわけである。

馬を論するに耳をもつてするのは誤つてゐる、何となれば耳は馬の價値を高めること能はず、馬はラヂオでニュースを聴いて駆け出すものでないからである。馬の價値は脚である、耳は長くとも角ではない。角は牛の武器になるが頭に膠着して動かせない、牛が角を動かす能

はず人が耳を動かせないことを冷笑して、自分だけは耳を動かせるのを自慢したらそれは馬の馬鹿である。

脚が尊ばれるのはスピードにある、鶴の脚は長しといへどもこれを切れば必ず悲しみ鳴の脚短しといへどもこれを續き足したら必らず憂へるといつた意味の文を莊子で讀んだことはある。人間は馬の脚の長さを利用することを知つて馬の耳を認めない。耳は休息することはないが脚は休息の必要がある。人でも馬でも休息といふ不經濟な病的症狀がある、しかるに機械は休まない、その上に稼を要しない。

秣を馬に與へるのは人が馬の胃袋に對して慈善作用を行ふのではない、馬の脚を驅使しようとする利己心からの偽善行為であつて、馬の舌も胃袋も必要ではないから、口も舌もなくして、たゞ脚だけが働いてくれたら百パーCENTである。尾も耳も口も舌も眼も不用なものであるが、そんな不用なものを入用な脚とを組立て、一つの馬を構成するから入用なもの

より不用なものが多いわけである。しかるに機械は人間に不用なものを取拂つて必要なものだけを提供する。オートバイを見よ、馬より早くして不要な部分品は一個もついてゐない、實用一點張りで目も鼻もついてゐない、まして鬚といつた邪魔になる飾りものは無くある。

尾のない馬は、鬚のないサンタークロースとともに形の悪いものであるが尾は蛇器の働きもしない、何の役に立つかといへば惡童が毛を抜いてトンボを釣る時に使ふか——僕も幼い時にこんなことをやつて馬丁に叱られた——、又は織工場でヘアークロースを織つて洋服の下衿のスタイルが墮れないやうに表地と裏地との間に挿むくらゐることで、蠅を拂つても長鞭馬腹に及ばないやうに馬尾長きも腹の下に及ばない。

龍頭蛇尾——龍には頭があるが蛇には尾がない、蛇に尾があるといふのは支那の領土に満洲があつたやうなものである、支那は山海關が尻尾であつて満洲國は別個の存在であるものを支那人は今までチハルが尾の先であるとも蒙古が尾であるとも思つてゐた、蛇はどこからどこまでが尾で、どこからどこまでが胴であるといふ境界が馬のやうにはつきりとしてゐ

ない「支那とは何ぞや」であつて、支那全體がそれ自身疑問である。

滿蒙は外交の掃き溜めであつたから、こゝを交せかへしたらロシアの蒂もアメリカの種も支那の皮も出てきたが、日本が掃除してから大ぶん清潔になつた。思想上においては日露、經濟的には米日、そんなものが競馬してゐる。大滿洲共和國ができるソビエートの侵入に対する柵を擡てたが、戦場驅馳には若き駒はまだ脚が弱いからいづれは日露の赤白戦場にならう。

宇治川の戦ひは源平の戦ひであり、佐々木梶原の争ひであり、又た池月磨墨の戦ひでもあつた。史上で名を揚げた名馬も多いが、現代では地上に自動車があり、上海の戦ひは飛行機の勝負であつた、道路のない未開地は航空機の活躍場所であつて、モーターレイが馬に代つて働く。

戰つて支那に勝つことは易いが、支那をして心から日本を信頼せしめるのが困難で、前者は軍人の役目、後者は外交官の役目と、はつきりとした分野はないから國民總がかりで、こゝ五六年の間に日支融和して過去の行違の勘定を笑つて破算せねばならぬ。馬を水邊に引つ

ばつて行くのは易いが、飲みたくないといふ馬に水を飲ませることは、強制してもできない相談である。支那馬が渴したら自然に水邊に行つて勝手に水を飲むであらう、それまで待つのだ、仕方がない。

K

駒麟は美しいが、あの走りさまはどうだ、彼女は佇立してゐる時だけは美しいが馬は走つた時に男性美がある、馬蹄の響きは妙な旋律ではないか。

猿は馬より智慧はあるが走ることはその得意ではない、馬の前脚が進化して手細工ができるやうになつてもそれは馬の本質ではない。古代の戦史に象、牛、駱駝はいふまでもなく豹、虎なども兵勢を助けた記録はあるが駒麟、猿、狼は戦に利用されてゐない。馬、牛、象、自動車、飛行機船等の輸送を助けるものは發達したが、そんなものゝ合計よりも人間は矢張り脚を使ふことが多い、馬、牛、自動車、汽車、汽船等の總てを所有しても兩脚を別られたならば人間は不便を感じするであらうが、汽車、汽船、電車といったものが發達して今では室は靴をはかないから日本人より更に器用だ。

内とか近距離の歩行だけにしか脚を使はないから二肢は退化機具となつてしまつた。日本人が机から鉛筆を落しても椅子に凭けたまゝ足の指先でそれを摘みあけることはできるが白人種の足の指は靴によつて一そう退化してゐるから、とてもそんな器用な藝術はできない、猿から動く素質を持つてゐる人、馬に動力をかける工夫に、科學者は動物質を峻拒する。それにはわけがある。

動力の動物を嫌ふ理由は、木、鐵といった中性物は休息しないが、人、馬といつた動物質は休息したがる、なまけ者である。人は八時間労働、七時間労働といつた生意氣な主張をす

るし、馬は人間ほど理窟を云はないが無暗に瘠馬の臀をたいても、一定の精力を消費したあとは極でも動かないほど拗ねる。拗ねるものと理窟をいふものは科學は好みない。獸々として服従するものを選んで科學は乗り遷るから馬は昔ほどの威力を發揮しない。馬券を賭する競馬場で人を感激させるぐらゐで、駿馬も不遇時代になつて天下分け目の大戦にも馬は参加する資格を失ふであらう。

競馬は馬の脚によるが人の鞭による、騎手の巧拙によつて勝敗に重大な關係を及ぼすが、機械はさうでない、精巧な機械は熟練工を要しない。誰が操縦しても同じものができる明智左馬之助の湖水渡り、勇壯な姿は畫に描いても駿馬と調和するが、牛に乗つたのでは面白くない、豚に乗つたら尚ほいけない、だが、琵琶湖だつたから馬でもいいが太平洋だつたら飛行機でなくては及ばない、航空術が發達して太平洋が琵琶湖より縮まつた時が日米×の始まる時だ。

それまで外交戦で水を隔て、理論争闘の礪を投げ合ふくらゐだが、外交解合を裏返へして讀むと戦争の脅威がある。正面から咬みつかないで後むいて蹴るところは外交は馬に類し

戦争となつたら軍人が前から突いてくるところは牛に似る。

平和を愛好する精神は何人にも存在するが日本でも米國でも動力が發達すれば人間の生活を變態にしてしまつて、一本の針金で何千マイルの遠くに何千馬力を送り、労働時間と労働者數とを減じ、今でも生産行程の道すじに人間は辛うじて働かせてもらつてゐるが、科學がもう一步進んだら労働者全體を失業者として自働機械工場から驅逐して人間の力ではできまい働きを機械が代行する、かくて海外市場の爭奪となり國民大衆の望んでゐない方向に進み生産は混亂に宙返りして人類は好ぬまざる競争に流込む、狂氣でも平氣でもない正氣の沙汰であり電氣の沙汰である。

M

乗りものは瘠馬である、騎士は拍車をかけた、一鞭又た一鞭、勞働級である瘠馬は急速力で走つた、資本騎士は眼前の谷、溝、丘、カーブ、そんなものばかりを注意してその他を顧みてはゐられなかつた、道徳も情誼も顧みないで、ひた走りに走つたが、向うからも同じ

状態で疾騒してきた騎士と突當つた、どちらか一方が墜落するであらうが、それが負けであり戦敗である。馬の走つてゐるのは意識を伴はない動作に過ぎなかつたが幸福にしても疲勞し不幸にしては倒れる。人馬相提携して進むのではなく人が自分の意旨によつて進むだけであらう。馬は不安のうちに何の意義もなく走つてゐたに過ぎない、これは馬に取つては進歩ではなく體の無理にして意味のない移動に過ぎない。時として水を飲ませてくれたつてそれが何の人の恩恵だ。見たまゝ、水を飲ましたあとは水を飲まない前より更に強く鞭うつであらう。疾走のために取残されたものは操持であり節制であり、安定である。走つたのは馬であるが、どんな徑路を通つてもその罪は馬にない、平和も取り落された、老幼は振り落された、孤兒院も養老院も顧みられない。女でも振り去られて勝手に働くねば生活ができないから家庭から街路へ出た、妻も娘も出た、三角關係も切りやうで四角ともなり、風紀は弛緩した。

■

勤労により天然資源は開發され生産は激増し、すべての物資の利用は増して廢物として顧

みられなかつた——たとへば褐炭のやうなものまで生産市場に活躍する。土地家屋まで騰貴するから世界の富は二十年にして五倍となつたが人類生活はだん／＼苦しくなる。世界の富は人類の富であるが人類は富むに従つて不自由になる、身體も苦む、精神も悩む野蠻人は文明人より勤労に攻められないから却つて生活が安定してゐるのは、彼等は貧乏なためである。

野蠻時代には人のみが働いた、少し開けてきて牛も馬も働いた、人間が五人かかるところを馬は一匹でやつてのけた、人間が三日かかるところを馬は半日で走つてしまつた。徳川時代には馬が働いて人間が失業した、明治時代には仕事が多くなつたが働く男も殖えた、大正になつて少年が働き出して大人が失業した、昭和になつて總動員令でも下つたかのやうに婦人が働き出した、女がさう働いてくれては困るのだが、彼女らは無暗に働き出したから男性の失業者が増した。

機械が動き出して先づ男、次に婦人、次に少年といふ順位に失業せしめた、自動車が走り出して馬、人、鐵道、電車が失業する、人間が四ツ這ひになつて馬を背中に乗せて走るにあ

らされば、馬が自動車を擣いで走るにあらされば、そんなできないことをするに非ざれば人馬ともに失業する、資本、機械、動力の三藤八景で、ぐる／＼と生活苦の火の車は廻る。

その八 戰場としての支那

A

支那の巨體は自らを中華と稱し他を夷狄として眼下に見さげてゐたその野郎自大思想に囚はれ、自ら外國の良制度を受入れて進歩するだけの雅量を持つてゐなかつたため、つひに今日のやうに、その規模においても深度においても比較のない擣取を招いた。各國はバラバラに切離された外交——しかし擣取に一致する外交をもつて支那を強要した、種々雑多の條約を持つてゐることを支那ほど多い國は珍らしい、それが皆支那自身を縛りあげる條約ばかりである。

儒教が權威を失つてから土地に依存する支那の村落生活を結束する思想紐帶は無くなつてしまつて傳統と血族關係などを除いては、ただ僅かな社會的經濟制度が殘存するばかりで、ギ

ルドは今でも經濟上の家族を構成し、社會組織は地方分權で、國防としては無設備であったから帝國主義國家が經濟侵略の種子を蒔くにふさはしい沃地であつた。果然、一八四二年に英國は先づ南京條約を植ゑつけた。

帝國主義列國から敵へ込まれて今では支那人自身によつて工業化しかけてゐるが、それはまだ漸く出発點を離れたのみであつて、その現象は都會の支那人生活に少しばかり閃めいてゐるだけの弱體國家で、本當に組織された統一體ではない。日本においても五十年前にはこれによく似た社會過程があつたが、支那のやうな擬制國家ではなかつた。

機械製品が潮のやうに入り込んで支那の貨幣を持去り金融帝國の壓倒力が支那の生活根柢を搖るに到つて、萬世不易の眞理と信じてゐた保守思想が破れて始めて革命的聲張の新段階に入らうとしたが、時はすでに遅く全身は不平等條約で縛りあげられてゐた。政治的改革を叫んでも反響は少なかつたが労働組合の少數だけは、眼前の利害問題に釣られて幾分か覺醒しかけてゐる。

支那のやうな古い歴史を持ち舊慣を頑守してゐる國は、何世紀か前に定められた勞銀の基

本線から出發して計算するので、理論的主義を却けて生活に即する具體的現實が手つ取り早く埠を開ける。水は冷たい、それでいいのだ、なぜ水が冷たいかといつたことは有閑學者の方へに任しておけばいいのだ。

B

文明國の機械製品が入込んでゐるとはいふものゝ支那はまだ手工業國である、傳統を重んじてゐる國は機械製品は入り込みにくい、日本でも和室には機械でできないものが多く、床柱、掛軸、額、鐵瓶、疊、骨董といつた國粹的なものは機械製品に較べて割高な手工業から成つてゐるやうに、支那でもその通りである、まだ日本以上に傳統的であることを示すため一例として棺屋話をさう。

支那内地を旅行したものは陋屋のこすんだ民家の中に立派な工業商店をみ出すであらう。それは棺桶の製造販賣所である。棺桶は泗川、雲南あたりの名木を割り抜いて一個數百圓、時としては數千圓のものがある、遺族は死人に對して棺代を惜まない、支那で身分不相當な

ものゝ隨一は棺桶ではあるまいかと僕は思ふ。こんなものは機械工業が發達しても傳統が懷れるまでは依然として特種工業として存在し自給自足せられるであらう。

その外に廣東あたりの象牙細工なども加へて、これらの特種手工業の多ければ多いほどギルド組織は堅く維持されるが機械文明は徐々に傳統を碎いて侵潤するであらう。いま生活の變化が機械工業の波紋を擡げて奥地に向つて進みつゝある。

手工業時代には働くことが獎勵され、失業したものは罪人と見做されたのは、働く意思へ持つてゐたら何なりとも——不具者でも——職業があつたからである。日本における浮浪罪とイタリーにおける乞食罪が、それに近い。働くことは道徳的に人の義務であり經濟的には郷土にその必要があつたからであるが、現代では働くにも働くことのできないやうに機械が職業を退治してしまつたが、支那の内地では働きさへすれば食へるといふ結構な大自然に恵まれてゐる。(もちろん日收は大洋銀十三錢で満足しなければならないが)

滿洲に新國家が生れたからといつて、滿洲の住民が變つたといふではない、依然として生活の低い人々である。滿洲國民が日本の物資を買うのは滿蒙の農產物が日本へ送られて資金

化し購買力化と變じて後のことであるが、こゝに注意を要することは滿蒙は農業立國で、日本は農民保護のため他國の農作物を成るべく輸入しない方針を建てゝることである。農業政策において兩者の利害は相反してゐるが、滿蒙の農作物を日本が買はないで誰が買うか。滿蒙に突然購買力が生じたものと思ふのは何といふ早合點であらう、今滿洲國は四つのS—行政、財政、税制、幣制——を整理するに忙がしい、その整理解期に無暗に生産品を持込んでも賣れるものでもなく、買へるものでもないが、習慣、嗜好、風俗、信用をよく知つてゐる支那の粗工業が日本の大敵として山東の移民ともに南支から入込みつゝある。支那の原始的な奥地生活の中にも開港場の近くでは紡績業が機械工業のトップを切つて他の製粉、撲寸、製紙、製革、石輪製造等の工業がこれに雁行し、鑄業、金融等も近代的形態を取つて經濟的基礎を据ゑ始めた、鑄產物についていへば想像埋藏量が世界鑄富源の四〇%を有してゐるにもかゝらずその產出量は四〇分一%にしか當らない。鐵鑄の無限量を有しながら鐵を輸入し、綿花の產地でありながら綿花を輸入し、礦山も耕地も自然の富は手を着けないで貯蔵されてゐる。その地上には廉價な労働力をもつてゐる、油斷のならぬ怪物であ

る。

國內において動亂を繰かへしながら製品の輸入は割合に増加しないで機械と原料との輸入激増は何を語るであらう、紡績機械が輸入されると三年後にはそれに應じた綿糸の輸入の減少が目につく、列國のパワーが支那の上に角逐してゐるその下で支那自身は目ざましい經濟的革命を進めつゝある。

C

上海とか天津とかをみると手工業者も多いが賃銀労働者もまた多く、そこには近代的分業が展開されてゐる。労働者は資本家から命ぜられた仕事に拘はつてゐる以上は必ずしも機械の毒にかゝつてゐる。その労働は大きな長い生産過程の一一小部分にしか關係してゐないから文明の弊をうけて、かういふところには勞資の軋轢が尖鋭化するものである、支那は機械工業の益を受ける前に、すでに機械工業の害を受けつゝある。

怒り易く激し易い開港地労働者の性格を利用して不逞の徒が一ぱん効果的な排日を煽り、

支那人本來の性質と全くちがつた群集心理をモツブ化せしめる。排日に成功したら次に来るべきものは總括的排斥外であることを知つてゐる英佛あたりは日本が上海で支那と衝突する時は日本の膺懲が徹底的であつて排外の根幹を抜取つてくれることを望むであらうが、日本が成功したら日本の勢力が遠く伸びることも恐れてゐる。注意せよ、日本の勢力よりも英佛に取つては恐るべきものが天窓から覗いてゐるのではないか？ 興安嶺から内蒙古を経て廣いドライブウェーが手を伸ばして支那とソビエートとを繋いでゐるではないか。赤い魔風はそこから吹く、それを防ぐものは東洋における唯一の資本主義帝國である日本のみ外にはあるまい。

D

佛、英、××のやり方は舊式であつた、領土侵略といつても支那全土を一國で征服せられるものではない、僅かにその何百分の二かを得て、しかも他の列國からは侵略主義の名をもつて呼ばれ、支那民衆からは仇敵視されるが、たゞ米國だけはそんな汚名と怨恨とを買ふこ

となしに漸次に支那を併呑しやうとしつつある。今ですら支那インテリの心は完全に米國に占領されてゐるではないか。米國は貿易、宗教、金融で支那を占領して領土に手を付けないかやうにして支那人全體を隸屬せしめたならば、それは支那全土を得たのと何の差違もない。のである、ゆゑに門戸解放を固執して他の強國が支那の領土に指を染めることを恐れる。米國の心はすでに支那全體をそつくり我物にしやうとする、それは新式の鮮やかな侵略である。

日本の鶴の首を押へて山東の鮎を吐き出さしめ、二十一箇條の中核を碎き、軍艦の比率を低下せしめ、南洋諸島のうち主要な點には委任統治權を拠棄せしめ、軍縮會議では唇から舌まで銅鐵で武装した樽組折衝を續けてゐる。

支那で揉み合つてゐる列強の中で獨り米國だけは耳ざわりの悪くない平和主義を唱へてゐる。平和の績くことは米國金融占領の漸増と擴張とを意味するから、このまゝに放置すれば支那が米國に隸屬するばかりではなく、支那に争つてゐる列強も米國に服従せねばならぬやうになる。

米國の専恣を挫くには一日でも早ければ早いだけ列國の便宜である。歐洲諸國は大戰の創痍が癒えないから一日も遅きを便とするであらうが、あの創痍は膿みかつ腐りかけてゐるから、いつ迄待つても回復の見込がない上に米國の積極的進出は何の猶豫期間を與へない。日本を除いて支那における米國の併呑政策を防止するものは決して無いのであるから歐洲諸國が國際聯盟まで米國に服従させて日本の勢力を支那から追ひ出さうとするのは東洋の事情に對する認識不足を自白するものである。日本は東洋の運命を擔いて死線を超える悲壯な決心をもつてゐる。

歐洲列強より後れ走せに支那紛争に參加した米國は門戸解放といふ旗印をもつて支那へも満蒙へも押込んできた。満蒙に關する限り日本は一步も譲歩しないため、又たソビエトの進出を防ぐべき日本のやうな本土、朝鮮、満洲に張られた鐵道網を持たないため、如何とも手の下しやうもなく今日に及んだが、それまでに東支鐵道を買ふことも満洲鐵道の日米共同

管理案にも、金で面をはる政策は日本の不服で、どれも成功しなかつた、日本はいくら貧乏でも金のために生命を賣るほど窮迫してゐなかつたからであつた。

米國は政治的には後れてゐたが、その偉大な經濟力をもつて前に立つた列國を暗殺しながら今日では目さましい進出を遂げた。

米國の東洋進出の鋭いことは次の数字によつても明かである、——一九二七年を基數とする昨年（一九三一年）——の輸出額増加は、歐洲へ八〇パーセント、アフリカ三五〇パーセント、カナダ及びニュー・ジーランド一八〇パーセント、ラテン・アメリカ一九〇パーセント、オーストラリア一八〇パーセント、アジア四〇二パーセントである。

いま米國に太刀打ちのできる怪物はソビエトロシアの外にない、——五年計畫の宣傳をそのまま信用するとして——、石炭、木材、小麦は確實に米國に敵対することができる、鋼鐵もやがてその列に入るであらう、貿易戦に十分な野心をもつソビエートも金融力の不足で待機状態にある。

米國が日本を憎むことはソビエートに親しむ意思ではない、日本を憎むと同時にそれ以上

にソビエートをも併せ憎んでゐる。日本が赤色恐怖の屏障である滿洲國を支持することは米國を怒らせるが、しかしソビエートが滿蒙に反帝國主義を宣傳することも米國の好まないところである。日本にしても滿蒙に出しやばる米國を怒るといへどもソビエートに對して好意を持つわけではなく、米國以上にソビエートを恐れてゐる。滿蒙における日本の勢力増加もソビエートの勢力増加も、ともに米國の好むところではない、米國自身が滿蒙に勢を張るにあらざれば彼は満足しないのである。

F

白人國相互においては、もはや賣込んで利益を奪取すべき餘地のないほど生産機關が有り餘つた。その緩衝地として印度、支那、南洋、アフリカ、オーストラリアに突入して生産物の捌け口を求めて、滯貨の幾分を減少することを得てゐるが、支那にも印度にも近代機械工場が設けられて、もう暫くすれば送り込んでくる商品をはね返へすだけの力を備へるであらうから、買へといふものと、買ふまいとするものとの衝突となつて高度に進んだ工業國の攻

勢に對する新進工業國の防戦は激化するであらう。

いま世界は五つに分類されてゐる、上位には米國、別格上位には英國、その次が英、伊等の戰勝國、その次が獨、塊等の戰敗國、その次は第一線から退却した國家、オランダ、ノルウェー等、ソビエートは張出しとして、最後にラテン・アメリカ、屬領地、委任統治國、支那がある、ラテン・アメリカは北米合衆國の拠取地であり、屬領又は委任統治國は各々その所屬する本國の支配に從ふが、ひとり支那だけは特異性をもつて名は獨立國でも各國が力次第で拠取のできる共有拠取場のやうな觀を呈してゐる。

これは支那の知つたことではないが、誰がこんな無茶をしたかといへば列國であるとはいふものゝ、そのこゝに到らしめたのは支那自身が招いた禍である。

G

支那人は政治と生活とがバラ／＼であつて政府を信頼できないから吾身それ自身を信頼するより仕方はないが、法制のない國では個人の生命財産といつたものは楊花より軽く散り去る。

る。

支那人は大別して二種となる、核のない觀念の固執者としての奥地の大衆と、外來思想を注入された開港場の少數の近代人とである、少數であるが近代人が自餘の多くの人を束縛したり走らせたりして彼等は決して到達されない理想に彼自身を追求して、究極は米國のために五座を用意してゐる。

H

一たい支那の政治の中心はどこにあるか、一時は北京に在つたが市民の知らないうちに黃河を渡り長江を越えて南京に移つてしまつた。北京が北平となり、省の直隸といふ名も降下されて河北となつたが市民は政府を引つ張つて歸らうともしないで荒廢に委せてゐる、同時に大原にも廣東にも洛陽にも首都と稱するものができた。

古いことはいふまい、最近のことには及ばず、南京政府が支那を統一して暫くは政治の中心

を成すであらうと信ぜられた。文化首府として土木を起し大きな道路と高い政廳、それに孫中山の陵墓——レーニンのそれに比すべきもの——を配して現代都市の形を具へかけた。それが四年と五ヶ月目に一夜の中に——誰も知らない間に消えてしまつたのだ。誰も知らぬ——それは實際に知らないのである。

四億八千萬民衆のうち蔣と汪と二人の巨頭が朝のうちに相談してその日の午後四時半に突然に、本當の突然に飛行機で飛んでしまつた。あとのものは重要書類をかゝえて浦口から汽車で北上した。

夜が明けて中央政廳の貼紙をみれば、首府は洛陽に移轉したとあつたから市民は膽をつぶした、と、書くのは日本人らしい書き方である。支那人は決して膽も頭もつぶしはない、又た行つちまつたか、何と、臂の軽い要人だと、三々五々掲示板の前で感心してゐる程度であつた。

會社が移轉するのでさへ裁判所に登記をする、定款の定むるところによつて公告もするのだが、支那政府は國法も定款もない、あつても無きに等しい。市民の氣の付いた時分には——

——新聞さへ知らなかつた——政府の印璽も首府とともに夜逃げをしたあとであつた。

南京落ちは支那に取つて悪いことではない、南京に首府を置いたのは大きな誤であつた。楊子江の南に都した國は必ず減びる歴史を持つてゐる。南宋はこゝに都して元の伯顏將軍にやられた。三國、六朝と古きを温ねるまでもない、南京は楊子江の要害だけを頼みとするが南京の古跡は悲劇と哀史とをもつて満たされてゐる。

「英雄一たび去つて豪華盡き、たゞ青山の洛中に似たるあり」といふ許渾の詩が吟じてゐるが、それは口實であつて、上流に蟠居する共產匪が恐ろしいのであつた。日本なら國際公約もあることであるから上海で交戦しても無抵抗である以上は南京を陥落させることはあ

るまいが、共産匪は攻めたら山林に逃げ込み棄てゝ置けば集團を作つて漢陽を狙ふ、いふかは南京も包圍せられる形勢にあつたからである。

しかば今度移轉——といふより飛び去つた洛陽といふところは南京に優つてゐるかといふに、これも亦首府としては落第の試験済みで、こゝも亡國の歴史をもつてゐる。宋の李易安は「洛陽は天下の中に處り、殺鼈の阻を挾み、秦隴の襟喉に當り、趙魏の走集、蓋し四方必争の地なり、天下事なきに當つては則ち已む、事あらば洛陽必らず先づ兵を受ける」といつてゐる、洛陽だつて、その附近の鄆州でも開封でも天下の中央だけに政令を布くには便宜ではあらうが港に遠くして近代都市ではない、内亂となつたら真先に兵を受ける危険地である。

洛とは河の名であるが、日本でも當時の首府であつた京都を支那にあやかつて洛陽と唱へて鴨河を洛水に擬したもので、今でも京都へ行くのを入洛するといふ。京都奈良附近には洛陽式の建築物や畫、彫刻などが残つて多く國寶となり國家保存物となつてゐるが、却つて本家の洛陽には見るべきものが何も残つてゐない。

南京は外敵防禦に適せず、洛陽は内亂においては日本の京都のやうに四方から爭奪の巷となり、しかも要害堅固なところとはいへない、難攻不落といふ觀點からいへば咸陽が一番であらうが鰐が石垣の中に潜つて要害を負んでゐるやうな消極的なところである。すべてにおいて一利一害はあるが、やはり北平が一番理想的らしい。と僕は思ふ。

たとひ首府がどこにあらうとも、あんな無茶な政治をして、どこに身の安全を求められるか？すべての義務を一拋に附して、遷都を手軽く決行する支那は、家賃を拂はないで近所の小賣店を踏み倒して夜逃げするものと何の變りもない、彼らは夜逃げの常習者である。

日本人と支那人とは同種同文で同じ思想を持つてゐるやうに思はれるが、或は南宋時代までは支那の感化が大に日本に加はつてゐたであらうが、現代では皮膚の色の外は全く違つた存在である。

白人は日本の動きと支那の動きとを同じ認識思惟の根本形式 Category に置いてゐるから日本

支が隣國でありながら相反撥して根本的に融和しないのを証つて、それを日本の罪に歸するのである。

支那と日本とが近代に到つて類似點が無くなつたのは支那が變つて日本が傳統を保守して變つてゐないためではなからうか、支那で衰へた儒教、佛教が日本の指導精神として残り、唐宋時代の漢詩漢文が愛誦せられ、支那趣味の建築、美術が日本で神聖視されてゐる。

天然の恩恵が二國に對して大きな偏頗を與へた。日本は忍苦と悲嘆との間に建設を爲し、建設が成らざるに地震といふ大自然の翻弄がある、又た建設する、又た破壊する。支那にも日本にも洪水はあるが、日本は山脈を脊梁とする細長い國土であるから洪水は急激にかつ猛烈で、退水の跡は砂礫で埋めるから耕地は荒涼たるものとなつても移住すべき土地がないから更めて開拓して美田とせねばならぬが、支那の洪水はその來ることと徐々であつて上流から肥沃な黒土を運んでくるから退水したら肥料を要しない良田となる。洪水に災されても別の土地に去つたら、どこにでも耕されないで棄てゝある一望千里の沃野が待ちうけてゐる。彼らが飢餓に當つても絶望しないのは、かやうな天の愛顧を享けてゐるからである。

支那を維持するものは氏族の連帶責任感であつて國家の法制は家庭から拒絶せられてゐる家族が單位となつて村落を、村落が單位となつて省を構成してゐるが、省が單位となつて國家を構成してゐない。バラ／＼に切離された國家十七八が別々に機能を持つてゐる、これを一括した支那として説明することは講義にもならず結論にも到達しない。

労働運動も新聞紙上では盛んであるが、あれで果してプロレタリア革命が成し遂げられるであらうか、不完全な革命は半熟のまゝ残されて革命以前より惡い結果を招來した。民衆を帝政時代のまゝに置き去つて智識階級のみが共和制を布いたが、それが少しでも民衆に響いたであらうか。專制者が他の獨裁者に席を譲つたまでで、幸福であつた天惠國民が人爲的に秩序を破壊されて到るところに怨嗟の聲がある。

こんな悲劇は改革の過程に附きものであるとして冷然として見過すことが果して政治家の道徳であらうか。

半世紀前には支那も印度も自給自足で何の不平もない穏やかな國民であり日本ではさへもその通りであつた。しかるに今日では海嘯のやうに先進國から突付けられてゐる輸入品は消費を混亂させて今さら自給自足に戻れないほど搔き交ぜられてしまつた、白人の不道徳な賣込み競争に累ひされた東洋人共有の迷惑である。

個人と個人との間に非道な財貨争奪が始まり、個人の集積である國家と國家との間にも同じことが演ぜられる。アフリカ、印度、日本を差し廻つた機械力が今支那に集中されて禹域四百餘州は對立と衝突との舞台となつて、四億萬衆は生活に基へないほど低廉な勞銀のその餘剰のないはずの懷から餘剰を搾つて外國商品を買はせられてゐるのである。

形勢は少し調子を換へてきた、歐米の資本家が支那の安い勞銀を利用して青血制度の下に

支那に工業力を据ゑつけ、こゝに利潤搾取の基礎を建設するから高賃銀文明國家は本國において工場を鎮し、労働者を遊ばせ、搾取するつもりの國から却つて經濟的に不道徳のシツペをかへさせるやうな立場にならうとしてゐる。これが本國においては不景氣の景象となつて現はれ、本國は失業者を養ふに莫大な國費を浪費せしめられる。
購買力の伴はない過剩生産が世界に溢れて冒險的外國市場争奪戦は、金力と動力とが暴れ迴る米國の參加によつて激化した。

支那に据付けられた機械は支那人のために働く。なぜならば機械には國境感念がないから英國に据えられた機械が英國人のために動くやうに支那の機械は支那人に味方する。その機械の聲を聞け……お前は心配することはない、俺には熟練工を要しない、俺は据付けられたと同時に四億八千萬衆の必要以上の大量生産をするために俺は回転するのだ。輸入防止、オーライだ。安い原料と安い労銀とを俺に配したら價格において白人の製品は一と難ぎだ、そろ／＼輸出の用意をしろ、と、これだ。

支那は利拂ひさへ出來ないほどの窮地に陥つた——彼は陥つたのではなく被動的に陥い

れられたのだといふ、それは尤も千萬だ。貸借は合意によつて成立するとはいふものの、貸手は十分な餘裕があつて貸さなくとも済むのだが、借手は借らなければ立ち行かない窮迫状態に在るのを常とする。

それを見込んで貸手は十分な條件を出して押へつけるから、かやうな平等の力を備へてゐない取引が借手に取つて殘忍なことは始めからわかつてゐる、しかしそれが合法的に契約となつた後は、國際的に履行の義務が發生して、それを踏倒さうとすれば無茶に尻をまくるの外はない。

支那が無茶に暴れ出して常軌を失つた時は外交的に眞空抗議書を送つても鼻紙にされるだけである、抗議が支那に對して効果を奏すると思ふのは素朴も甚だしい。

支那は無心蠻の存在だから、どこを突いても致命傷とはならぬ。
脈絡ない愛國運動も學生騒動も一黨獨裁で言論を一軌にし、國民の耳目を隠蔽するから正しい判断を誤つて、志士の雛兒である純眞な學生までが書籍を抛つて學校を破壊したり停車場を打倒したり、妙な方面に愛國運動を向けるが、それは黨の指導部が學生を誤らせたもの

であつて彼らの盲動は政府の責任である。

支那人は平和な民であつたが、無謀な反抗を企てるところにまで列國が追ひつめた、その餘波として日支兩國間に敵對的要素が相當に積みあがられてゐる。

多數の資本主義國家が擄取の觸手を延ばしたから支那人の眼からみれば、どれもこれも魔の髪と見えるであらうが、日本だけはさうではなかつた。共存共榮の原則を支那に求めやうとしたのであつたが、支那の諒解するところとならなかつた。

日本にも外交上の失敗があつた上に貿易業者は日本の國是を理解しないで例の奥の手を出して暴利を貪つた、支那浪人は姿を變へた倭寇となつて荒し廻つた。支那の對日感情は悪化して事毎に日本と衝突した。

支那は近い隣人より遠い仇敵に助けを求めた、國際聯盟に挺入れをしたり、米國の他力で日本を驅逐して、紫金山の頂から日本の敗退を悠然として見物しやうとした、彼は三國干涉以來無防備で日本に勝つ良策を會得したものと信じてゐる、國際的無錢飲食者である。上海事件、滿蒙事變、ともに過去における外交上の清算であるよりは、將來に向つて日本の

大陸發展の希望の一端であらねばならぬ、しかるに從來の外交が折角の成果を帳消しにして尙ほ支那人の怨恨だけを残したことは、遠く三國干涉を援用するまでもなく、シベリア出兵、青島攻陥等の遺恨千秋の生々しい記憶を想起し、今度の事變において亦た往年の失敗を繰返へすのではないかと、外交官に對する頼りなさを感じる。今度といふ今度において尙ほ國民義務の反射光を浴びて外交官が働くべく外務省の看版を撤廃させねばならぬ。上海事件は日本の大陸政策を具體化する第一段階であらねばならぬ。

支那の軍人は文官に比して餘り尊敬を拂はれてゐない、人民はその搾取と掠奪とを怖れ、その部卒は人間として最も卑くべきものとされてゐる、しかるに日本では政府の支配以外に立つて天皇に直屬し帷幄上奏の權を有し統帥權は議會から超立し、武力が日本全體の生活を維持してゐる。なぜならば、日本人は國防が不十分でなかつたら工業原料はいふまでもなく食料さへも得られないことを知つてゐるからである。國民は軍部を支持して軍隊的規律のものとしてしまつた。

下に一致せねば、排日毎日に逢つても隣國の爲すがまゝに運命を托せねばならぬ。従つて支那式の個人主義は成立しない。そんな國情から枝葉が出て今では全く種族を思想的に違つたものとしてしまつた。

北美の半分強の人口が北美の十分の一の廣さしかない日本本土に墳つてゐるのだから、戦争の要素が老幼男女込み合つて緊張を續けながら運命を開拓して行かねばならぬ、これを支那人の恵まれた自然の懷に抱かれてゐる生活に比べたら同じ東洋人でも環境によつて性情の變化を免れない。

支那の兵士は一種の職業であり兵匪は一の失業者である、戦ふにしても何の理由も知らないで機械的に大砲を撃つだけで少しの亢奮もない、敗けたら生きて給料を踏み倒され、死んで草原に遺棄される。

國民的戦争はそんなものではない、戦時には憎悪が激發すべきものであり、この憎悪は交戦前から双方の間に醸されてゐなければならぬ、その激情の正否が戦によつて解決せられるのであるが、支那の兵士はそんなことには無關係である。苦力、失業者、匪徒、共匪の混合

で世界最悪の軍隊を組立てゝゐるのであるがそれでも日本の兵を指して東洋鬼子と呼んでゐる。戦争は國民闘志の反射作用として現はれるものであるから支那のやうに將帥に熱がなく國民に憤りのないところは、いくら訓練したつて強くなるものではない。上海事變で日本の兵と戦つた第十九路軍などは最も精銳なものといはれ、新銃の科學戰で相當に日本兵に敵對したものであつたが、結果はあの通りであつた。ドイツ將校に指導せられて相當に規律もあつたが、敗退の際は掠奪一空をやつた。むしろ不正規兵である便衣隊、高粱の蔭に出没する馬賊などは一種の義氣があつて割合に頑強であつた。

支那は正規軍一百三十萬人を養つてゐるが、この數は實數ではない。地方軍權は中央政府から軍費を貯はれてゐるが實數は十萬でも十五萬と報告して差引き五萬人分は軍閥の懷を肥やすこともあり、裁兵が叫ばれて兵數を減少せねばならぬ時は自分の兵數が削られるから、勢力を維持するため實數十五萬を十萬と報告することもあり、中央の支配力の及ばないところ

ろは思ひ／＼になつてゐる。ソビエートは支那の半數強であるが機械化戰備を充實せしめてゐるから國防威力は總括的に帝政時代より飛躍した。

日支間には戦争らしい戦争は無かつた、將來といへども嚴格な意味を持つ戦争はあるまいと思ふ、なぜならば戦争の本質は暴力をもつて敵を脚腰もたない程度に打ちのめすことにある、しかし支那は敵ではない、白人侵略に對する共同防衛者である。支那を荒廢せしめることは日本を弱めるものであるが、ただ日本の國是を擴げる便宜において、局地的に彼の抵抗力を失はしめる程度で、しかも列國に遠慮しながら上品に暴力を使用せねばならぬ苦しい立場にある。滿蒙事變といへども國際法上の慣例を政治的手段に使つただけのことであった。

國民と軍人と外交とが戦争に演ずる役割は重く、その時によつて三つの中使用の強弱はあるが、日本の強いのは軍人だけであつて、他のものはこれに添はなかつたために何度でも日支間に紛争を延長してゐる。特に外交において一ぱん劣つてゐるのは必ずしも日本の外交官の無能ばかりではない。

いま世界に行はれてゐる道徳律は皮膚の色によつて厚薄濃淡がある、白人が行ふ道徳は黒人に許されず白人が支那におけると同じ行爲が黄色なるがために日本人に許されない。そんな原則の下に干涉され、同色の縁ある支那人も白人と組んで排日を始める、彼は白人には利權を與へるに寛大であるが日本人に對しては極めて拒否的である。

日本がもし白人と同じことを支那に行つたら感情に根ざす本來的な憎悪心が勃發する、しかし死物に向つて無効な攻撃を企てるゝも息の根は止められない。東洋人相互間にはどこまでも依存性を忘れてはならないが、白人が參加する時は、さういふ内輪關係では濟ませられないと。なぜならば白人は外來者であるからアジアの土地に對して愛着感念を持たない、これが荒廢したら本国へ去つたらそれで仕舞ひである、従つて掠取は地軸にまで精分を吸ひつくして、次の收穫がどうならうとも考慮の中にはない。

國際貸借の亂麻は各國が金本位を罷脱したことによつて慘澹の度を増した、航海、航空の争覇戦で貧乏の上塗を競争してゐる。こんなものは武力の無限界的進展を助ける働きをするものであるから何の利益にもならない企業を東洋に集中せしめてゐる、それを辯護する外交

辭令は物理的發言に過ぎない。

P

支那を誤らせたものは經濟的國家主義と國際協調といふ眞空的平和とであつた、そこを説明してみやうと思ふ。

日本が滿蒙で頑張つたのは日本の天職であるといふよりも、あれは自然的行爲であつたといふ方が穩當であらう。

日本は北から南へ支那へ發展してくる道程でストレンヂヤーに出逢つた、それは英國の帝國主義であつた。

自國領土の總ての資源は絶對的に自國民の所有であり、他國からの商品輸入と勞働力の浸潤とを許さないといふ主義、その經濟的國家主義だけなら單純な自我主義として認容せられないこともないが、自分より劣つた國に對しては自由に資源を占有し、さらに自分の國の過剰なものを勝手に押付けるといふ利己政策を加へた、この無理を貫くためには武力による壓

制を必要とした。

米國は無論のこと、英國もソビエートも資源を日本に向つて塞いだ。支那も白人たちの口辯の一部を取つて領土内にある利源の絶對的獨占權を日本に主張した。併し支那が主張する以前に支那の權益はすでに日本に書入れとなつて日本の進行の豫算中に加へられてゐるものである。これは權益拒絶でなく既得權の奪回である。日本が最少限度の希望をさへ許さないとすれば日支間の國交に大きな罅裂を生ずるのは當然である。

白人諸國が經濟封鎖をもつて日本を威嚇するに對抗して日本も覺悟せねばならぬ。台灣と福建との水路を塞いで、これから東北における物資をもつて自給することは、支那にも豫め含んでおいてもらはねばならぬ、この袋地の制海權は日本のものである。買手がなくて困つてゐる時代に日本を經濟封鎖して、苦むのは誰であるかを白人諸國にも豫め承知してかゝることあることを注告して置く、特に念をついて置くことは日本は入超國である一點である。歐洲帝國主義のコールドンサンニテール（陸境隔離地帶）によつて西方の門戸を鎖されたソビエートは再び注意の眼を東方に向けた。ソ國は今直ちに日本と衝突することを好まないが

計畫が熟したら、どうせ主義の上からでも一戰を交ゆべき前途を持つてゐる。

現在としては日本と決裂しないで、支那からペルシヤ、トルコ、アフガニスタンを駆ね、エジプトとインドとの間に大きな隔離の楔を打ちまらうとして、これらの民族に向つて思想的連繋を望んでゐる。

この間に日本が一と休みできると思へば大きな誤りで、思想的潮流が製ひかつたら、出来てまだ弱い滿洲國を風靡し、一石二木といへども動かされないものはなからう。

ロシアが帝國主義を棄て、たとひ表面だけでも共產主義をもつて支那に臨むに到つて日本は極めて不利な立場に置かれた。日本の善隣主義は、かなり古くからの國是であるが今まではすつかり支那に嫌はれてしまつた。からなつては外交を越えて武力を使用するも止むなき破目となつた。日支兩國のために、これを吊ふ。

Q

猿に對して人間になれと命じたとて、それは無理であるが、養成したら猿だつて人間のす

る芝居でもするといふ不自然になる。教へ込まれた猿は、猿自身に取つては獸類の本質を失つてゐる、藝が上手になればなるほど本質から遠ざかる。

人間が猿の後裔であるといへば誤つた進化論に憑かれてゐるクリスチヤンたちは怒るであらうが、日本人なら怒らない、先祖がエテ公であらうとも、そんな系図はどうでもよく、却つて傳統のないのを誇つてゐる米國人が氣にかけるのだ。

猿は軍人思想を吹き込まれると自らを罪人として承認する。クリスチヤンは自分を哀れむべき罪人として認めるだけで、懺悔しないのは、その罪を累ねても十分間の祈禱で罪障が退散してしまふからである。世界の武力征服といつた人間の本質に違ひ手段でも、彼は神に祈りながら人に大砲をうつであらう。

金に憑かれてゐた人間が、次には機械に憑かれ、又た戦争に憑かれてゐる、戦争の慘禍を忘れて到達されない世界征服を追跡してゐる人は氣の毒なものである、そんな夢を驅逐して後に自身が安眠の快味を知るであらう。

併し平靜に暮せない、事を好む國民に取つては食用としての鼠がなくては、猫は活躍の機

會がなからう。用事のない満蒙にまで出かけり——貪慾は彼らを多忙に追ひ立てる。

R

僕はこの章の末段において心から善き友人として支那人に通告したい一點を持つ。

僕は相當に支那を悪罵した、支那人は僕を好ましからぬ日本の一成員と思つてゐるであらうが、僕の次の一言は氣を大きく持つたアジア人として日本も支那も包括した高所から省察したものである。僕の前に著した「日本は衰へるか?」の一書は、いさゝか支那にも賣れた又たその一節が支那文にも翻譯されて中華民國人にも讀まれたことでもあるから、この書も或は、わが隣人に讀まれる光榮を有するかも知れない。それを期待して僕は中華民國人のたとひ一人でも共鳴者を得たいと思つてゐる。

中華人の經濟的に苦んでゐるのは世界的不況の上に特殊の國難が加はつて二重になつて、しかも前途には豫期されるいろいろの國難が加重して、だん／＼深刻な淵に落ちて行きつゝある。これを救ふものは目前の黃金であつて深遠な學說ではない、と誤解する。

歐洲諸國は陰氣な經濟學説を持つてゐるが、黃金を持つてはゐない、金貸しの職業と實際の金とを持つてゐるのは米國である。いま苦難に落ちてゐるものゝ呴を潤すものは遠き未來の水道の良水よりも手近な濁水である。それを爲し得るものは日本でも歐洲でもない景氣のいゝ米國である。米國はそれを成し得るであらうし又成し得るといふ老舗としての信用を持つてゐる、だから中華人が日本や歐洲を袖にして手を米國にさし延ばすことにして、僕は無理とは思はない、どうです、これ以外に中華民國人の外交心理を説明する言葉はあるまい米國はそこに乘じて、すつかり中華人の氣に入つてしまつた。他力本願者は國難の暗中に一つの光明を認めたといつても差支はない、僕は無理のない悲願であつたと思ふ。

だが、そこに考へねばならぬ一事が残されてゐる。

米國そのものは繁榮を續けてゐるか、否や、いま反動的に不景氣の雲は米國を被覆してゐないか。この不景氣が果して打開されるものであらうか。金の流出は續き、國內政策として物價を高くしたが在荷は増加する一方である、この逆潮を打開しやうとして不自然な煽揚を試みてゐるが何の効果もなく、無謀に近いインフレーションの注射をやつたが、病人は左身

に臥てゐたが、それが右向に寝がへつただけで、起き上らうとする元氣も出なかつた。昔は元氣でスポーツの選手として先頭を切つたものが今では自由も利かない中風症にかかりつゝある。

無理な景氣煽揚策が他日の累を成して病勢は悪から最悪に進むであらう。失業者も、銀行の閉鎖も、工場の休業も、米国人の好きな世界一ではないか。

現實の不況を直視するに堪へないで、目を瞑つて好景氣の紙ラツバを吹いてゐる、好況か不景氣かはその疑問符を消してしまつて、明かに不景氣のレツテルを貼つた。

將來に望みある中華民國人、いま没落に向ひつゝある米國人、この二つの立場を注視するがいい。

僕は米國に身を委せてゐる中華民國人を氣の毒に思ふ。中華は中華自身の力で立上らねばならぬ。アジアは日支兩國民の力で振興せねばならぬ。吾らはエボツクをつくらねばならぬ縋つてはならない他力に縋るから、縋られない國が武力的に抗議を申込むことになつて、こゝに中華民國人が自ら好んで自國を世界の戰場として提供することになつた。

上海事件の起つた當時に日本では總選舉が行はれてゐた、政友會が軟弱外交の民政黨に對する大勝を博したのは、米國及び國際聯盟に對する强硬政策が人民投票によつて確認せられたものである。無産候補者が獲得した總數が前回の五十二萬から一十七萬に激減して、それだけの票數が對外硬を標榜する政治家に加へられた。

列強が支那に向つては外交辭令でどんな甘いことを云つてゐるにしても、國家主義の進展は世界的大勢であり、どの國も同じ道を歩んでゐる、米國は特に先頭を切つてゐるのである。極東の平和提唱は日本に申入るべきものを、國家的恐怖病者は取ちがへて米國に申込んでゐる。

支那人が認めてゐるやうに日本が國際的孤立に陥つてゐることは僕らも明かに認めるのであるが、強國に凭れて情けてゐるよりは、孤立して緊張することが男らしいといふばかりでなく、却つて國家が興隆する原因となる。國民が一致して邦が亡びた例はない。日本のこの意氣を買はないか。

支那には資源が埋藏されてあるが日本には剛毅の精神の埋藏量が無限であつて、非常時に

は土を割つて堀起する。國難を笑つて歓迎する。この國が一つ、東洋にあるのはアジア人の誇りではあるまい。

さらに振返つて米國に遺憾の意を表したい。

米國自身はそんな積りではなかつたであらうが、いま國際聯盟はそれ自身の力で日本を抑へることができないから米國を煽揚して反日に向けしめ、米國をして國際暴君たらしめやうとしてゐる。米國は支那の友人をもつて自任してゐるが、その動向は支那の友人としてゞは無く、支那國民を毒する軍閥の友人となつてゐる。國內では挑戦的平和論者——彼らの平和論は却つて衝突を激化せしめる——が羽振りを利かせてゐるが、彼ら——學者と、それに煽動される無智の人々——の空論が東洋から延いて世界的禍亂を惹起すやうになつても、彼らは責任を負ふだけの力はなく、その責任は全米國人に轉嫁されるであらうことである。

その九 貧乏と盜賊と戦争

A

維新後といへども日本は傳統的に農業國であつた、瘠せた耕地の上には小作、自作農、地主といつた複雑な存在はあつたが、金融資本、不在地主がまだ兼井の毒を散布してゐなかつたから割合に平和なものであつた。

工業副産物は主として自家の消費に充てられ剩餘があつた場合に限つて他の部落に賣られることはあつてもそれは極めて僅かのものであつた。生産物は必需品が主たるものであつて贅澤品を大量生産によつて國內に氾濫せしめやうといふ考へは少しもなかつた、たゞ何かなしに原始狀態から離れ難く、人のための士、士のための人、士と人とは不可離の關係をもつて、瑞穂といふ釣で人間は地上に打ちつけられてゐた。

明治の末期から農家の副業を奪つて工業を専門とする小機械工場が現はれ始め大正を経て昭和に到り、日本を工業國に變化させてしまつた。

誰云ふとなく工業立國に向つて聲を挿へた、日本は突進した。一人として悲觀するものはなく、日清、日露の一いつの戦争は勇ましく戦はれた、しかも勝利をもつて終つた。日本は土を離れて機械に移つた。

日本は前進するのみ、樂觀でひた推しに推してきた、悲觀は國論の一一致を妨げるものとして又た國民の義務として遠慮せねばならなかつた。

併し造化は日本を恵んでゐなかつた、鐵がない、石油がない、原料がない。人口は飽和點を超えて張り切つたから苦みは年一年と加重して最高潮點に上つて行く。交通線は朝鮮からアジア大陸へ、そこに石炭と鐵と食料とを。樺太に石油、木材を。マレーに錫といつたやうに張り渡されて、どの一綱が切れても血液は順環しないから、手に餘る航海權を把握しなければならなくなつた。

農業國には敵は無くとも工業國になれば市場の争奪から敵に遭遇する。今では四面敵に囲

まれて軍艦で取巻き高射砲に装弾して置かなければ眠れないほど、周囲に不用心な敵を持つに到了た。商敵とは文字通りに解譯すれば「商賣がたき」であるが、そのあとには軍艦が附着して何時でも砲弾を打ち込むといふ油斷も隙もあつた商人ではない。貿易額と軍艦のトン数とは有機的に相關聯してゐるのではないか。考へてみれば平和の商戦といふものは恐ろしいものである。

事態が更に悪化して經濟封鎖となれば經濟學説は却つて説明し易くなる。外國から金を儲つてくることもできないから孤立經濟になつて國家の權力が物資だけを統制して貨幣が不用になること觀念論者の注文通りだ。

B

僕らの理想を云はしむれば——世界の科學を人間に隸屬せしめ、機械を人類に奉仕せしめるやうに社會を再組織して、各人各國が個々の利益を棄て、國際的機能に融け入つて、今日の對立觀念を棄てねばならない——さうすればこゝに始めて根本から平和は生れるのである

が、それは夢想であつて現實ではない、そんなことはインドあたりの哲人をして語らしめようだ、そんなことを語つてゐるうちに、強國はその國を屬領してくれるのだ。僕らは抗争状態をます／＼尖銳化しつゝ生きて行かねばならぬ情けない環境の中に投ぜられた、僕らは空氣を噛んで生活してゐられないから國民が總括的繁榮に浴するまで踏ん張らねばならぬ。

農業から工業化したのは日本だけではない、支那もソビエートもその他の小國も漸次に工業化しつゝあるから工業輸入品の賣れ方が東洋では鈍くなり、國際分業の組織は急激に變化し、古典的な貨幣制度は新路に乗り入れ難く價值計算基準であつた爲替相場は投機的に上下に翻弄され、各國は關稅高障壁の中に經濟的アヘンであるインフレーションを競ひ、それで足らずして金輸出を禁止した、これは金融危機に對する最後通牒の強き意味を持つたものである。

日清戰爭、日露戰爭、歐洲大戰には戦争稼ぎの暴利商人が簇生した、そんな俄か成金が今では殿様と私稱して贊美な生活をやつてゐる。あの時に味を占めて軍器賣込み商人と結託して戦争熱を煽る奸徒も少くないやうだが、そんなものに乗せられたら國民は馬鹿を見るので

ある。憐むべし彼らは近代戦争の本體を知らないためのあの盲動だ。

近代戦争においては國內全部の生活形態が更改されて國家管理が經濟界を支配して奸商が私利を稼ぐ餘地ならしめるから、彼らの望んでゐるやうな不統制の際につけ込む暴利は存在しないのである。利益のないのを知つて戦争を叫ぶものが眞個の愛國者である。

今日のやうに推詰められて尙ほ平和を唱へてゐるものは争闘責務の一寸のがれだ。

C

普佛、日清、希士、米西、日露、歐洲戰爭といつたやうに斷續的にはなつてゐるが、その精神は一貫した連續である。父兄を失つた子弟、子弟を失つた父兄の慟哭の聲は昔から今まで絶へたことはなく、特に日本に關しては、國土のどこを掘つても血の滲んでゐないところはない。

西洋文明は絶へず日本を震撼させて一日の倫安を許さない、航海技術の發達は西から東へ巨波を送つた、これが加速度に戦争運動を導いた。それに續いて機械文化は汽車、火薬、戰車

軍裝具等を金力のある國民の手に委ねて、その考へ次第で何時でも戦争を起すだけの能を與へた。

文明國民の手には更に潜水艦と航空機とが渡されて、戦争の誘惑は水中、地上、空中に、經に緯に網目のやうに、國民の脚に手に糸を絡みつけた。

戦争は政治上又は軍事上の理由から起つたにしてもその根柢原則は一括して經濟的原凶に歸納することができる。

戦争の目的となつた地帶は必ずしも經濟的に價値の多いところであつた。沙漠を占領するものがないやうに豊腴な地域に向つて眼が注がれ、占領した價値を擁護するためには、そこに向つて延長される本國の威勢は、莫大な軍費の上に建つ。

貿易のあるところには葛藤が附き物である、葛藤は戦争の母胎で、政治にも戦争を孕んでゐる、戦争なき世界を求めるることは政治と貿易との無き世界を求めることがあるが、文化は政治と貿易となしには構成されない。今、機械は貿易、政治の利害を大ならしめた、この利害が衝突するところが戦争——しかも大規模の戦争となる。

戦争は活き物である。平和主義者が自分の主義を説明するに足る理論を書物の中で搜す時は容易に抽出されるが、それは死んだ物である。死んだ人が書いた死んだ理論をもつて戦争を定義付けやうとする。

日本のやうな孤島は國粹主義が奥をくふに適するところである、その純粹な國民性を永久に維持して不純な混合から逃避するためには國境に柵をつくることは必ずしも悪いとはいはないが、それは軍事上に便するであらうが經濟生活の中に國際的思想を取り入れるには不便である。

國家と國家との抗争を裁くものに國際裁判所もあり聯盟會議もある、立派な法規もあるがそれは合法的の陥穰である。聯盟は外交上の革命的變化をもたらした。日本對支那の抗争に、支那が聯盟の蔭に置れたら「日本」對「支那の主人聯盟」の抗争となり、米國の袖に結つたら「日本」對「支那のバトロン米國」との抗争となり、又は「日本」對「支那の主人聯盟」及

び支那のバトロン米國」との抗争となり、非常に苛酷な性質をもつて壓迫が單一國家の上に加へられる。これを稱して世界的制裁と云ひ得べくんば、世の中に繼子ほど無告なものはない。

どの國も平和を高調しながら進むが、出合ひがしらに戦ふ、零と零との合計か一となる。それが眞理であるかといへば、どれも眞理である。各國ともに眞理を異にして、都合の悪い眞理に出逢ふ時は弱いものは顔を背けて通り、強いものは蹴ちらして通る。

平和をかざして正面から日本の相手になる米國は結局は氣の毒なものだ、併し反日主義は米國全體の意見ではなくして共和黨だけ——民主黨は反対だから——の意見であらう。もつと東洋觀念を滌治することができないものかと第三者からは思はれる。九國條約を締結した時と今とは事情が異つて主たる政權の存在がないから日本の行動は止むことを得ないのであるが、米國に云はすれば條約調印の當時に支那が發展行程の中には今日のやうな混亂があるべきものと見越してあつたのだと、そんなことを承認する寛容が支那を付けあがらせて支那を衰亡に導く、支那を驕慢にさせたのは米國に責任がある。

ソビエートは世界觀が超越してゐる、戦争はインチキ・スポーツだから戦争の興味なら見物席から味へる、戦争は資本主義の熟練工に任せて置けばいいのだ、と。寒くて大きい「氷の大地主」は戦争を遠觀する。

E

國內の經濟が完全に國民を養ふに足つたならば富の公平な分配も期圖し得られ又た社會主義制度を實行する上においてロシアのやうな便宜もあるが、それがどうしてもできない國が

二つ、西の英國、東の日本である。

日本だけに就いて云へば、今さら僕らの生活水準を支那、印度まで押下げることもできず、更に歐米先進國まで向上させたい望みを抱く以上は退歩的になつて金融攻擊、貿易侵略を消極的に防いでゐるばかりでは済まない。必らず白人の組んだスクラムを突破して進出せねばならぬ。膨脹して止まざる人口を國內に繋縛して高賃銀を維持することは不可能なことである、經濟的理法は武力準備と並行せしめねばならぬ。

F
人類は平和な理想世界を建設しやうとして何度も機會を捕捉し損ねた、無理に平和會議を唱へ出しても、世界は鬪資を失つても鬪志に満ちて、大勢は眞の平和境を造るに適せずして理想の逆コースに向つてゐる。

生産機關の共有化も唱へられて又た消えた、經濟だけが競争をやめよといつても無理である。人間は優勝劣敗に興味を持つこと競馬場を見たらわかることで、今日の文化國では競争に落伍したもののだけが失望的に所有の社會化を鳴くが、意氣あるものは勤勞のあるところに利潤を求め、前走する人を超越して進むことを考へる、その氣概がなくては社會はだれる。利潤行為のない社會には元氣がない、破産して復權の見込みのない舊家の主人の氣持ちはそんな消沈したものだらうと思ふ、文化を持ち希望に燃えてゐる國民は時間を惜んでよく働き、よく學び、よく遊ぶが、未開國で生産機能の發達してゐない國民は遊惰で、だらしがない、働いても働きばえがないからでもある。

大きなビルディングが建つ、その中に食堂が附設される、新らしくて安いから小料理店のお客をトロールするが、その廉いのは社會公衆のためではなく、社會大衆に榮養を供給する奉仕が目的ではなくして、利益が目的である。利益が無いとみたら即時に閉鎖するが誰れだつて食堂經營が一般人の飢餓を助けるための行爲と考へるものはない。個人的利益が目的でない公園でもベンチは早いもの勝ちに座を占める、櫻爛漫たる上野、淺草を見るがいい、公園の最も眺めのいいベンチを獨占する心は、やがて土地兼併の心であり、それを引き伸ばすと労働組合の平員より地方委員となり、中央委員となり、ついに執行委員長の椅子を狙ふ心となる。運動場でランニングの第一着を贏ち得たい心を押し廣めると、尾山血河を越えて敵壘に先登したい心となる。

公園は利潤が目的ではなくとも、競争心がベンチに現はれる。ベンチが明いてゐる時は冰雨ふる冬であつて、そこに花はない。利潤を求めない時は、たゞ食つて行くだけのソビエト式で、所有慾は解消するが、それは人間の眞の心であらうか？人間の骨を抜いて鰐とし鰐から動物質の脂を抜いて山の芋とするものである。競争は山の芋に脂を注ぎ込み、鰐に侵

骨を加へる、利潤争奪は文化社會の裏に飛躍する活力素である。

G

人類は戦争によつて餅のやうに引き千切れられ、石のやうに碎かれ、飴のやうに引き伸ばされ、結局は灰のやうに骨葉微塵に吹き飛ばされ、生き残つたものは疲弊窮乏に泣いて平和の夢在未来に描きつゝ、尙ほ年々に軍事費として租稅を捧げつゝ、次の戦争の準備に充てゝゐる。戦争、盜賊、貧乏の三幅對は文化部屋の床に飾られる。石川五右衛門は盜賊であつたから視野は盜賊の範圍を離れなかつた、彼者は盜賊の種は盡きまじと詠じたが、貧乏と戦争の種は盡きまじと豫言するだけの遠大な視野を持つてゐなかつた。カルテンは社會は戦争そのものだと喝破した。

戦争か人間であらうか、人間が戦争であらうか、盜賊、貧乏か人間の當り前の姿であらうか。僕らは感情の單一體から理性の綜合性にまで進んだならば或は平和論者の夢に轉寄せすることもある。經濟の絶望から起る生活の變化が爭鬭觀念に再建を強いることがあつた

ら、これも亦た戦争の機會を幾分か減少することもある。財閥、大企業家、御用商人等が戦時に不當利得を獲得する機会を持てないやうに國家が統制するのも一法であらう。教育、宗教、道徳が戦争を光榮あるものと指導する代りに恥づべき行爲であるとして争鬭氣分を和げるとも一法であらう。戦争に懲りるところまで世界人を血の風呂につけてしまつたなら得心するであらう。いづれにしても他國がそれを行はないで一國だけが、そんな方法を取つたら戦敗よりも辛い目に逢はされるであらう。

戦争と貧乏と盜賊とは同時に根絶せらるべきもので、三つのうちの一つだけを減ずることはできない、なぜならば、どれも同じ經濟組織から發生したものである。經濟組織が變革されるとまでは平和を唱へる時期ではない、その時期の熟するのは次の世紀の中葉ではあるまいが、いづれにしても僕らの時代ではない。

H

戦争の原因は人口の過剰と機械の發達とが主たるものであるから日本においては要因が極

めて濃厚である。上古において戦争が無かつたのは道徳的抑制によつたものではなくして、人口が稀少で戦争の必要がなかつためであるが、近代において僕ら日本人が戦争せねばならぬ機會の増加したのは人口と機械に激化されたものである。

人口の増加が彌榮えに榮える國家の擴大性を伴はなければ、人口の増加が彌榮へに衰へ行く國家の貧困性に拍車をかける、こゝが思案の追ひ分けだ。積極進取の外に誰が考へたつて思案はあるまい、貨幣なしの國家會計制度といつた元氣のないことは日本が力盡きて國際ルンペニに零落してから後にゆつくり考へても遅くはない。

どこまでも強氣で有利な結論を追ひ詰めて行かねばならぬ、日本の不利な結果は僕らの結論ではない。日本が満蒙へ一步踏み出せば數國が集つて事毎に日本を阻礙する、満洲の敵を轉がつたらドン底に落ちるのに間違ひのない直路一線だ、だが繁榮の頂上に登ることが苦勞なのである。

人舞臺ヒューリだが上海シナではさうは行かない。

東洋ドウヨウに特殊トコロの勢力セイリを持つイギリスは根ざしが古くして且つ深い、イギリスを除外セイヨウしては米國ミツコクが獨りあせつても經濟封鎖エコノミック・ブロックをすることが出来ない、イギリスは米國の外交方針セイエイに追随ソリューションするといふもの、東洋ドウヨウに關する限りは獨自の立場リョクジが米國より一日の長がある。

十三對トトノイ一の調子トコロが續くやうでは一國對ドントウ一國の武装ブツウでは心許ハラモトない、少くともアングロサクソンアングロ・サクソンを相手アビドとするだけの計畫カクバンが望ましく、不戰條約ブツセンジヤクを深く掘り下げる、その根には戰爭動機センジンが絡みついてゐるから油斷ウイリがならない。

資源の缺乏カクハに悩んでゐることは悪いやうだが、その實は日本に取ヒグチて悪いことはない、それは日本が進歩充實シンボウした證明ウイリである。日本が昔ながらの村落經濟で世界の風潮シテイに乗らなかつたら今日の苦みは無かつたであらう、今日の苦みは取りも直さず發展膨脹ヨウヒンした結果である

動物學者ドウブツガクシヤの緻密チヒツな研究ケンジヤウを聽いてみると狸と狐との區別クワツは分らなくなつてくる、だが、幸に

して動物學者でない僕らには化けない限りは明かに區別クワツができる、白人ホワイトたちは滿蒙マニルと支那シナとの地理的民族的區別チヨウセキが十分でないが狸と紹タヌキと、狼と山犬、蚕と虱と蛇と蠍と蝮ヘビとさへ日本人にははつきりわかつてゐる。完全な國家と擬制國家との區別クワツも支那の隣人はよく見わけることができる。

假りに滿蒙マニルが支那シナの領土リョウトウであつたにしても、それは切斷せねばならぬ腐りかけた片脚ハタラキであつた。

九國條約クウノクジヤクでは國家と認めて文明の列セイヒンに並ぶ能アバウトはざる國家は安寧秩序アーニン・シキスの紊亂者ソウレンである。祖シロぎで尻シテまくりをして公道を渾歩ハラハラしながら喧嘩ハラハラをするから僕らは人道の名において呼びとめていたる裸ハダにして着物を着なほさせやうと思おもふ、あの不行儀フウギは許さるべきことではない。

亂暴ランボウの基本的自信は九ヶ國條約クウノクジヤクであつて、これのある限り日本が支那に對して手の付けやうがないと誤信してゐるのであるが、顔の眞中に膏藥カクヤウを貼ハサフつて、これは梅毒患者メイズウであつて自己腐敗シヨウハイをする危險な人物ヒヤウジンであるといふ印シラレが九ヶ國條約クウノクジヤクである、支那シナが統一國家トウイチであつたら、あんな取極めヒヤウをする必要はあるまい、あれの存在は支那シナに取つては國恥クノシであるから人前に出

せない證文である。それを聖物のやうに珍重して、自分の造つた金屏風を引廻したやうにその蔭にかくれてお正月氣分になつてゐるのはお目出たいものだ。

僕らは東洋の治安が支那の地にべりによつて脅かされてゐるのに大きな迷惑を感じてゐるのである。

どの國も條約が纏ひついて身動きもならぬほどになつてゐるが、精神のない條文は餘り効果的なものではない。米國は不戦條約からモンロー主義を除外してゐる、英國も同じ主張で英國の利益を構成してゐる地域に効力を抜いてしまつたが、英國のやうな廣汎な地域が條約の外に喰み出したら世界は不戦條約の及ばないところが多くなる、その上に各國が各自の事情から勝手な解釋を下してゐるから尙更効果は薄いものとなつてゐる。

日本にも、もつと早くアジア・モンロー・ドクトリンがあつたら今日のやうな混雜は無かつたであらうし、外交官は國際會議で申譯ばかりしてゐないでも好かつただらうし、軍人も外國に氣兼ねしながら滿蒙で戦はなくとも好かつたであらう。

滿洲の匪賊にさへ二萬の軍人を要した、大陸軍には交通、工場、港灣、金融等の後詔めが

なかつたら何の働きもできない、軍事には後方に大仕掛けな計畫を伴ふ。

ソビエートの計畫だつて軍事がその中核を成して産業はこれに附隨する軍主工從主義である。フランスが年額七百萬フランの損失覺悟でサワラ沙漠に横斷鐵道を敷き、本國から五十時間で北アフリカに到達し得られる大計畫だつて恐怖からきた仕事であつて、戦争の豫想から植民地の防衛を有利にし黒人軍の動員に便するためである、それが目的であつて世人人は交通の利に浴するのは副効果である。それだけの費用を社會事業に投じないで、何時起るか知れない又た起らないかも知れない戦争に投するのは、それほど戦争が重大に視されてゐるのである。

併し人口の増加しない國に取つては戦争は有利なものではない、急激な人口増加に悩まされてゐる國に在つては算盤の彈き方は自ら異なるを得ない。時としては戦敗が必然的な形勢の下にも悲壯な戰鬪行爲を開始せねばならぬ場合が生ずる、このまゝで餓死するよりは戦場の花と散らうとする負けても餘儀なき事態もある。

暴力は戦争だけではない、政治も多數による暴力であり、外交も無論暴力の後援を要する

経済も資力の暴行であり、經濟封鎖に到つては戦争以上の暴戾なものである。

戦争は敵國を不具にすることを目的とする、有史以來の戦爭大取引は歐洲大戰後におけるドイツ賠償金であった。あそこまで行き過ぎては勝つても駄目だ、何となればドイツの支拂不能は無理ではないからである。賠償額が過大に課せられて敗者を破産させ、息の根を絶やすしてしまつては面白くない。賢いものは敵を生かしておいて合法的に恐喝取財をするのだ。軍人が職業になると同時に戦争も經濟化する、高度に工業化した國家は急激に貨幣購買力が變動して好況期間が短く不景氣は永く續き、國民は軍事費の負擔に堪へられなくなる。國家はその膨大な軍事費を稼ぐために、その收入を戦争に求めやうとする。求められた國は利權又は領土を割譲してこれに應するか又は決然として起つて大砲をもつてこれに返答せねばならぬ。

その十 滿洲新國家

A

歴史家は僕たちに歴史を教えてくれた、ついでに日本固有の道義をも注ぎ込んでくれた。

それを要約すれば日本はとてもいい國だ、僕たちは世界無比の祖先を持つてゐる、對外戦争には負けたことのない尚武國で、國際的に經濟的封鎖をやられても伊勢の神風が吹き拂つてくれるであらうし、山水は秀麗で瑞穂は原野に充ち、義侠が國民の指導精神となり、武士道がけつぶの出るほど胸に詰つて、佞邪を憎み、國體は死をもつて擁護せられる——と、これは成るほどの國だ。

世が離れると忠臣義士を立ちあがらせ、それに節婦義僕をあしらつて史上に燐然たる光彩を放たしめること、時代祭りの行列が徐々に神殿に近づいて行くやうに思はれるから僕らは

無批判に、結構な傳統を有する國家に生れた光榮を感じ謝るとしやう。

歴史家の啼き聲は思想善導業者のそれによく似て、くどくと辛抱強く説明するから根氣に負けて僕らは説服されやう。それに反抗するだけの證據も持ちはさないし又たそんなものを搜索してゐる暇がないから止むを得ざる同意であるが、それもいゝだが、水源から今までの經の流域は明かに承知したが、横から波打つ現實の生活苦は吾々に解釋のできない史外の問題である。

殺したり殺されたりした鬪争史と、上つたり下つたりした貨幣史とが交互に悲嘆を語つてゐる。歐洲大戦の人類殺傷史が終つて新たに混亂した貨幣混亂史が登場した。こんな時には大富豪と大貧乏とが簇生して社會は不正に満ち、却つて殺戮の男らしさが慕はれる。優れた財政學者が公費で養はれてゐる、その後に翻譯財政家も輸入知識をもつて控へてゐる、そんなものが陰氣なとばかり提唱するから僕たちは困惑的な理窟に詰められてゐる。左に引く學說と右に引く理想と、前へ、後へ引く力が錯綜して日本をして進退に迷はしめてゐる。

學者といふものは易占家と同じく過去ととて詳かであつても豫見は見事に外づれてゐた氣の毒なほど外づれてゐた。外交家の豫見は、もつと大巾に外づれてゐた。平和なんかそんなものくるのを、いつまで氣長く待望してゐるのか。

前世紀に起つた戦争の歴史的経過、それに續いた今世紀も同じことを繰返へしてゐる、螺旋形に繰返へしてゐるから、少しづゝ縮めつけて、だん／＼尖銳的になるから、前年よりも加速度的に遂行力を高め、擴大的強化的となつて、狗の咬み合ひが狼の搏撃に變つたのであるから形態は一層悪くなりつゝある。

歐洲戦争は、その當初に聲明されたやうに戦争を根絶するための戦争として局を結ばなかつた、復讐の志ある者を今に重石で押へてゐる戦場で批准された休戦に過ぎない。こんな不安狀態が經濟的にも危険を増大し、戦争の要因は細かく碎かれて世界の隅々にまで散布された、この破片が到るところで發達し、それが數外く集つて又た第二次大戦亂を引き起す基礎をつくつてゐる。

ラテン・アメリカを帝國主義の車で、おでんのやうに突き通した米國の餘力は、「厭ふべき

「平和」を飛行機の脅威で東洋に突きつけてゐる。

B

世界における最も興味あり、かつ必然性を持つを戦争——金融戦、貿易戦及び武力戦は英米二國の間に醸されて、僕たちは安全な對岸からそれを見物するであらうと思つてゐたが、いつの間にやらこの大きな渦が英國の戦はざる敗北によつて消えてしまつた。かくてフランスの自由になる國際聯盟と米國の操る軍縮會議の二つによつて戦争は伸縮自在のものとなつた。

アフリカにおける英伊、地中海における伊佛、近東における英佛といつたやうに渦も小さくなつてきた時に、突として支那の上に大きな戰亂の渦巻が現はれた。白人は日本が起した事件とばかり思ひ込んでゐるが、日本にしては支那から貿はれた喧嘩であつた。併し白人は被害者と加害者とを取りちがへてゐる、何にしても資本主義の不當利益を追ふ列國民によつて戦争の指標は期せずして絶東に向けられた。

彼らは歐洲大戦に従事りて、恐怖と戰慄とに打たれながら誤つた國際觀念を煽られ、ふるへながら東洋の戦場に物言ひをつけやうとする。

C

個々の資本家がだんく大きく塊まつて營利合同人格（トラスト、カルテル、組合）となつて攻撃力を強め、今では政治家の力でそれを統制するとのできない程、のさばつてしまつて、社會機構に重大な變化を齎らしつゝある。國民はその弊に堪へかねて、むしろその強化した迫力を外國に向けしめることを希望する。なぜならばそんな無法な力を國內に置かれたら國民の血は乾いてしまふからである。自國では高關稅——門戸閉鎖であり支那では門戸解放——機會均等が、その現はれである。

實に今、手取り早く世界の霸權を握る方法は戦争の外にない。

いま戦争すべき理由は澤山にある、さらにソビエート國家の年次計畫が世界的經濟混亂に絡みついて、資本主義國家の同志打ちに複雑性を加へてゐる。

ソビエートの理想が紙上の計畫通りに實現するとせば、それこそ帝國主義資本主義の破滅である、資本主義國家は相抗争しながら、ソビエートの横から攻めてくる勢に脅かされるる。

ソビエートは支那に何を吹き込んでゐるか、勞農大衆——その實は労働者だけで農民は與つてゐないが——の獨裁、借金踏倒し、土豪劣紳の驅除、土地分配——こんな好餉をもつて支那を釣つた。

支那の國土の上における列強の角逐爭奪、軍閥同志の相剋、立體的の階級爭闘、そんなどさくさく混れに××の機會を攫めと、てうどロシアが歐洲大戰で國內空虚の時に舊國家を顛覆させた、あの仕方を學べと。

D

日本が満蒙に占據したらソビエートが黙つてはゐまい、こゝに獨立國が出現することを認容するはずはない。ソビエートが黙つてゐても米國が出て九國條約の權威にかけても何とか

するであらう。米國とソビエートが黙つてゐても平和規約が嚴として存在してゐるから面目にかけても國際聯盟が片をつけてくれる。或はこの三つが合流して日本を叩きつけるから、日本は世界の憤怒を一手に引受けて奉天城門の上で割腹して相果てる、と、そんな錯誤に陥るのは馬鹿ではできない思ひつきで、智恵があつたからそんな錯誤をしたものである。國際聯盟が力もない割に大きな理想を攘げたものだから、支那はいゝ氣になつてその中に包まれて、日本恐るゝに足らずとして、排日を始めたものである。これは賢い、但し薄智惠から出た生兵法であつた、もつと智恵があつたら他人の何やらで角力は取らないはずである。この角力取りは體ばかり大きくて全身に毒が廻つてゐる、毒とは何かといへば私腹を肥やすことである。軍需品の不正を承認して不發彈に帳簿面だけの支出をしたりするから、戦ひとなつても武庫には撃てない砲弾が山積してゐるのである。

こんな精神が全國に瀰漫して、それをチンパオ（中飽）といつて怪まない、貴人に面會するにさへ取次人に賄賂を贈る、これをメンチエン（門錢）といふ、内部における腐敗が外に現はれて外交の不信不義となる。

僕らは氣の毒に思ふが憎む氣になれない、僕らが今唱へてゐる對支硬論は隣國、人類にも亦た吾が國に取つても不幸な「攻勢防禦」であるが、十年を出でないうちに、こんな議論が忘却されてゐる時代に達するであらうならばアジア人類の總ての幸福である、對支硬論は大局安定に至るまでの一小過程であつて、こんなことが永久に子孫にまで續いたら畜生道である。

支那に責任感がないことに原因して不戦條約に苦い試練を嘗めさせられた。國際裁判所はあつても法律問題ではなくして政治問題であるがゆゑに手が付けられない。國際ボイコットは日本を威嚇するに足らぬ。米國にしても日本を仰へ切るだけの自信はあるまい、そんな無用の労力を費す餘裕があるなら、なぜ世界市場の出入を解放して日本をして平和の仕事に戮力して働くかしめないか、日本だけに風當りが強くとも倒れなかつたら吹き損ではないか。

米國の積極的重壓が日本を挑戦的ならしめ、それと同じく支那の消極的反抗が日本の瘤に

障へしめる。上から押へても下から突きあげてもその中間に在るのは必然的に動搖を起す支那は強制による條約の無効を主張するが、現存の國際條約の中て双方の心からの承知づくて結ばれた神聖な條約はどれである、一時の便宜によつたもの、力の威壓によつたもの、賄賂で買収されたもの、戦敗の清算に成つたもの、そんな不合理なものが大部分を占めてゐるが、批准を経たものは總て合法的根據を持つから仕方がない。

條約の破棄は餘り困難なことではない、力があつたらいつでもできる、理由が無かつたら捏造すればいいのだ、無茶をする考へなら條約など鼻紙にもならぬ。向ふが破つたからといって、こちらからも新論據を持ち出してみては議論倒れで、水の掛け合ひは美服を着たものが損である、裸が得である。

こんな擬制國家に向つて外交的基準をもつて臨んでゐる三十年の陰忍さは驚くべき辛抱の強さであつた。そのうちに首府が代る、首府が代るとともに主權も宿換へする、掛け合ひが困る。

支那政府に對して教訓的に、有効的に、徹底的に機宜の措置を取れる國は日本以外のどこ

てあるか、日支事變をかく大袈裟にしたのは日本の忍耐が度を越したからであつた。

日本を押へて満蒙事變を曖昧にするとともに、日本を撤退せしめない程度の干渉が列國に取つて必要なのである。なぜならば資本主義列強は市場として支那人の機嫌を取結ぶ必要があると同時に、ソビエートの赤流を堰かしめるため日本の陸軍を動かしめる必要もある。これは道徳行動ではなくて商行為である。そこで列強は日本の條約権は認めるが武力の發動は認めないと、いふ日本人には譯のわからぬ抗議となつた。

満洲が日本の植民地化するのは列強の認めないと、いふが、満洲を棄てゝ置けばソビエートの赤い思想の南下は阻止できないではないか、このまゝに放置すれば、そこから新らしい抵抗力が生じて共産主義を吸引するからである。

右すればソビエートと衝突し左すれば米國と突き當り、黙つて直立してゐたら支那から擲ぐられる。日本を満洲から手を引かせた後に支那の友人として現はれるものは、云ふまでもなくソビエートである。支那政府は日本を満洲から驅逐しロシアをも排除することをもつて方針としてゐるやうだが、空氣は空間に満ちやうとする。双方とも押しのけて満洲を眞空の

存在とするか、それは馬鹿を喜ばすだけのことである。

米國は日本の占據した土地を支那に還へせといふ、日本は返へすといふ、かへせ、返へすことでは争ひのできるはずはないのであるが、そこに争ひの生ずるのが妙である。

もし列強が戦争によつて獲得した領土を一齊に還元したら面白い地圖ができる。賛成だ。

英國も米國も佛國も全部屬領地を還へすがいい、さうすれば世界は住みよくなつて日本は満洲のやうな悪いところに喰さがる必要はない。

満洲を俎上にそんな議論の闇はされてゐるやうに、そこに大満洲國が生れた、米國はそれを認めぬといふ、併し眼が有つたらあんな大きなものが認められぬはずはない、たゞ條約的に認めないと、いふのだ、それなら強いて認めてもらう必要もあるまい。

満洲が次に來るべき根本的解決の責任を日本に負はせて、どんなにして自由國を育てあげるかの手並を、岡目八目で見物して批評してゐる方が列強に取つて賢明な方法ではなからうか

台灣の統治にさへ完成までに八年もかゝつた、大満洲國の確立は半世紀を要する大仕事である、匪賊の剿討を外にして内治外交上の問題は大變なものである、まだ御馳走が齊はないうちから招待しないお客様が食指を動かして出かけるのだから混雜は一方でない。

試みに米國だけの過去経過を書いてみやう、日露戰役でロシアがまだ手を引かないうちから満鐵買収問題を持ちかけた、それが成功しなかつたため満洲鐵道中立を提案し、それから満洲銀行の計画となつた、その時分から米國はドルを手先に使つてゐたのであつたが、注意すべきはその當時の米國は債權國ではなくして借金に悩んでゐた時であつた。

満洲の財制改革案と借款問題、それから四國借款團、日本の對支廿一ヶ條に對する警告、石井ランシング協定の締結（間もなくそれは廢棄）對支借款團の組織（日本の既得優先権の委譲）、華府會議における支那の援助（日本の權益保護の強要）、九ヶ國條約、日英同盟の廢棄在支宣教師の排日挑發、機會あるごとに支那に同情の押賣り、満洲に本國政府の後援ある銀行會社の支店進出政策——蛇は一たん狙つた蛙を思ひ切るものではない。

列國が支那問題、特に滿蒙問題に認識不足だと思はれる點もあるが、列國は又た日本の認

G
議が不十分で、近いところは却つて足許が暗いといふかも知れない。僕をしていはしむれば列國も日本も認識十分であるが、國の利害關係が違へば觀點も從つて異らざるを得ない。日本は共存意識に據る行動範を、どこまでも保存せねばならぬ。

過重な負擔から苦しまれてゐた滿蒙住民は自分の敵である軍閥が、偶然の出来事から日本

の手で取り拂はれて自然革命に逢つた。
自ら發憤して革命を遂げたのではなくして他力から轉げ込んだ幸福であるがゆゑに、滿蒙自由國はソビエートのやうな熱がなく、總てにおいてバツシーヴである、すべての革命政府は青年が中権となつてゐるに反して、この國は老人を引っぱり出して政治をやらせてゐるから積極的な、新國家に似合はしからぬのろ／＼とした執政ぶりである。

日本は世話をやけることである。

文化侵入に備へるだけの經濟的陣立も立てなほさねばならぬ、日本にしても一港主義を固

執するか、葫蘆島に大連の繁榮を分割するか、そんなことも考へられることである。

満蒙に新國家がまだ孵化しないうちから貨幣本位論が始まつた、金制が、銀制か、金銀兩建か、むろん銀本位制でなくては保守國民を混亂させるであらう、ついに銀本位を探ることになつたが、銀本位を主張した日本の經濟學者は何といつたか、「傳統的貨幣觀念を破壊するから暫く銀本位のまゝにして追つて金本位として日本と共に通にするがいい」と、僕をして云はしむればさうではない。銀本位制はそんな目前の苟且主義ではいけない、新自由國を銀本位制として日本も追つて銀本位にするも面白い。さうすれば支那も印度も埃及も追随するであらう、ドイツも誘ふ、イタリーにも勧める、こんな國を打つて貨幣連合をつくつて、米佛の黃金の山に對抗するのだ。

貨幣は必ずしも金に限らぬ、何でもいいのだ、金に執着するから經濟に行詰る。

いま金は一方に偏倚して購買力を失ひつゝある、僕らは意地づくでも滿蒙國家を銀色燐爛たるものにしたいと思ふ。

H
歐洲大戰は生に輝く系列と、死に衰へ行く系列とに列國を仕分けた、換言すればまだ闇ふ力のある國と、もう戦ふだけの生氣のない國とに分類したのである。國家の等級は文化の度よりも武備の差で測定する方が簡単で正確なものとなつた。文化のあるところには武備があるとは斷定し難いが武備のあるところには必然的に文化的活動があつて、系統をつくる經濟學理の逆進説を力づける現實である。

國民の福祉も計算の基礎を誤つてゐる、社會人が生の安定を享有する程度を測らすして國家の輸出入總額の數字をもつて統計的に片付けてしまふ、まして生産を基礎として國富を計算するの誤りたることはいふ迄もない。この誤謬は資本主義國家において肯定されるやうに共產主義國家においても眞理である。

國家が農業經濟で自給自足してゐる間は戦争的には無難であるが、それが産業經濟で自給自足を圖るやうになつて戦争が不可避となつた。原始的家族的の農業本位で組織された未開國家が、争鬭的不道徳的の文明國家に推移する時に、國家相互間の対抗が激化され、利潤争奪武力競争の悪性角逐が文明國家を築きあげた、文明國家の礎石は不道徳の塊である。

原始時代に恐るべきものは毒蛇猛獸であつたがそれは今では征服された。傳染病の毒菌、瘡瘍さへも科學的に殆んど拂ひのけられた、山に溢なく海に賊なきに至つたのは文明の賜物である。

文明は小利を奥へて大害を残した、毒蛇猛獸その他の厭ふべきものよりも更に厭ふべき戦争を持込んだ、文明史で一ぱん僕らに馴染の深い局面は戦争である、歴史は僕らに一個の間違ひのない結論を教へてくれた——お前たちの生命には終焉まで戦争が絡みついてゐる、と戦争も精密な檣圖の上に行動する以上は勝利は毎戦の理づめの創作である、戦争は破壊が目的ではない、それは手段である。目的は戰勝後の追撃に在る、敵を追つ拂つたあとには戦勝の成果が残る。

日本戦争の起りさうで又た沙汰止みとなるのは、日本が勝つても追撃に移ることが困難であり。米國が勝つても日本をどこまで追ひ込み得るかが疑問であり、領土侵略は今日に在つて公然と行はれ難いが、それ以外に戦勝の費用を償ふものがないから米國は日本に勝つても追撃の妙味がない、ために慾張り國民も起ちさうで起たないで今日に及んでゐる。

米國と英國とは巨大な蟻が中斷されて別々に動いてゐるやうなものであるが、金融上の必要性から切つても切れないことになつて債権債務で二つが膠着するであらうと思ふ。もし世界大戦が起るとすれば二つのアングロサクソンは合體するものとせねばならぬ、武力闘争でこれに對抗するものはフランス及びその友邦を除いて見當らないが、思想で反抗するものはソビエートを中心にボーランド、ドイツを聯ねるであらう、その時は日本がキヤスチングボートを握るわけになるが、そんな旨いことはあるまい。

もし英米が日本を叩きつけようすれば、日本には厚意を持たないが反アングロ心理をもつてソビエートは原料により、ドイツは技術により日本を聲援するかも知れない、フランスは好意的中立を守るであらうことは、英米聯合をして全捷せしめたならば歐洲本土は完全に

服屬せしめられるだけの勢力を彼れに與へるからである。

列國の離合集散は財閥の少數が國家を擔いで國民大衆の考へてゐるところと、まるでかけ離れた方面に運んでしまひ、思ひがけない國を相手として戦はねばならぬことにならうと思ふ。

ソビエートが不可侵同盟を結ばうと云ひ出しても國際的孤立の日本がこれを峻拒するのは××の氣に喰はない相手なるがゆゑである、その拒絕の理由としては、すでに不戦條約もあり國際聯盟もあるから無用の條約を結んで英米佛の注意を惹くを要しないといふのであるが、その實はソビエートに近づくことが病を感染せられるやうに思ふことから生じた一種の心理である。

満蒙が今日の状態では他を顧みる暇もなく、ロシアを侵略するなどは、先方から頼まれてもお断りすべきものである。ソビエートを安神せしめ日本とともに北邊に休息することは必要であり、平和な條約は多きことも重複することも妨げとならぬ、不可侵條約で武力行使と思想宣傳との二つを封じたら好かりさうなものであるが日本の軍閥も財閥も外交官もソビエ

一トを何かなしに毛嫌ひしてゐる。

米國が日本をもつてソビエート南進の夜警とならしめてゐるのは米國の喰へないところだが、日本が自らソビエートの出口を封する石垣の役目をもつて任ずるのは白人資本家に對する馬鹿げた義理立てといふのだ。

米國には大きな動力がある、日本にも少くは動力がある、動力と動力とが接觸するところに戦争の火花が散る。歐洲大戦前の英獨の關係に似たところもあるが日本をもつて戦前のドイツとするは當らぬ、第一に環境が違ふ、歐洲には支那といつたやうな巨大な團體に絶えざる内亂を包んでゐる國は無かつた。歐洲のは不必要で奢澤な戦争であつたが、日本のはさうではない。武備が無かつたらアジアは白人の蹂躪に委さねばならぬからである。

ソビエートには動力が缺乏して原料と食料とがある、日本と競争すべき品種が少い、從つて思想宣傳を遠慮するなら同盟國となつて有無相通する利便は多い。

日本の資本家と軍人とは無暗に赤化を恐れてゐるが、ソビエートにしても日本の白色恐怖を感じてゐるのだから、これは五分々々である。相引きにすればいゝのだ。

軍人生活者のその所説は専ら軍略の範囲を出ない、外交生活者は平和の辭令で實相を掩蔽して、いふところが直截でない。學者は實際に遠い純理に囚はれてゐる、經濟家は數字詰めで目前的である。どれも専門的で、それ／＼傾聽者を持つてゐるが視野は綜合的でないために國家の大勢において正視を誤つたところがある。

財閥のソビエートを恐れてゐるのは譯がわかつてゐるが、×××××が財閥の表情に附和して泣き顔するのは譯がわからぬ、よけいな「プロレタリヤの溜息よ！」

】

ソビエートが「永遠の労働に恩恵を感じるもの」であつたらそれでいいではないか。いまに思ひ知るよ、動力で労働が駆逐されるよ。日本人たち心配するな。労農主義以上の過激なもののがソビエートを見舞つて、彼らはあつと驚くよ。

「鐵の言葉」がわかる國人、ハンマーで打てば鐵が答へるさうだ、僕たちには鐵の言葉なんかは、ロシア語よりむづかしい、わかりっこはないのだ。併し動力の合言葉はわかつてゐる

よ、「いまに資本主義も國家社會主義も勞農主義も一と蓮ぎに水平にして見せるからその時に吃驚してくれ！ 吃驚を期待せよ！」とこれだ。

「鐵の言葉」は勞農主義國家の福音だが、ソビエートだけの獨占ではない、資本主義國家にも支那にも「鐵の聲」がある。

日露戰爭に日本軍が使つた砲彈全數百五萬發、これが鐵の聲である、歐洲大戰でソンムにおける一會戰に英佛軍が使つた砲彈だけで三千八百萬發、何と！ 砲口から出る鐵の聲の悲壯な叫び。重き鐵量！

鐵の外に黃金も物をいふ、日露戰役で消費されたもの五十億圓、歐洲大戰では四千億ドル鐵の聲、金の聲、ガソリンの聲、動力の聲、そんなものが戰争を合奏する。

K

國情と國是とを異にし、運動的抗争を持つ六十四國千三百五十人が參加討議する、驚くべき機構。持出された膨大な書類。どんな精力家だつてそれを讀むだけが終生の事業である、

多数の頭のエキスから果して僕らは何を期待していいだらう。

日本だけの事情としては満洲國を擁護するに足る陸軍、群島型を成せる海岸線を確保すべき海軍、その二つを繋ぐ空軍、それでいいのだ。技術的數字は屬僚から提出する。それ以外には何もないのだ。これだけが主張できないやうな協定なら、罪を犯すより、もつと大きな過失である。

國際封鎖は戦争でなく、宣戰せざる砲戦も戦争ではない。平和會議が始まつてから平和に戦争との境界線が著しく不鮮明になつた。僕らから恐怖を取除いてくれる國際會議ではなくして恐怖で僕らを押へ付ける隣人愛であるが、日本が欣然として参加することは列國を喜ばせるには十分であらうが、自國民に取つては、それが喜ぶべきことか、どうか、そこに疑問符をつけて置かう。

日本の近所には妙な國が三つもあつて豫算も決算もない國やら、豫算はあつても變らでも臨時支出のできる國やら、豫算をどうでも變更できる國やら、それが皆大國である。

平時においても鐵と金との戦争準備はどこまでも延びて國境を越えて走る、どこまでも競

争するが決勝點のないランニングは倒れたものを負けとせねばならぬ。

米國上院の解釋によれば自衛権の發動は他國の意見を徵する必要はないのであるから自國の解釋即合法である。決定権はそれを行使する國だけが持つてゐるのであるから、何の必要があつて騒々しい國際會議を招集するのか、さつぱり譯がわからぬ。金と錢との準備ができて、今戦争しようと思つたらそれが合法なのである、自衛権行使の決定といふものは恐ろしく便利にできてゐるものである、と、僕は米國の上院から教へてもらつた。

それで間違ひはないかと、しかと、上院に、だめを突いて置く。

その十一 米國の挑戦ぶり

A

歐洲からきて日本で再吟味された經濟學說でも動力の前では無能であることが明かとなつた。そこで放任主義が始まつた。——この放任主義は「無能からきたものであるから主義といふことは當らないが」。放任は無秩序であり、無統制であり、あきらめであり、成り行き主義であつた、これでも大正の上半までは大きな尻尾を出さないで済ましてきたが、大正末期には機械が異常な發展を遂げて消費力沈滯時代を出現した、それでも尙ほその対策を發見することなしに成り行き主義が今に僕らとともに存在を續けてゐる。

日本は東洋に於ける資本主義國家であると僕らも信じ、列國からも日本は資本主義のかんくであると罵られてゐながら、その實は社會主義がソビエートの次に行はれてゐる國である

るといふ聊か驚くべき奇現象を呈してゐる。普選が行はれてから政黨は社會政策を掲げるのに競争してゐる、無産者もそれがために既成政黨に投票するものが多く、資本主義國家でありながら労農政策の根が錯綜してゐるといふ極めて不透明な國情となつてゐる。
模倣文化の特徴として、日本は今水力電氣と手工業と、薬草と鐵骨コンクリートと、佛教とマルクス主義と断髮と丸髪との同居であつて精神的にも物質的にも雑然たるものである。労働黨それ自身は攻撃的であり労働者は產業戰構成の強き闘士であるが、労働黨の戰闘的政策を既成政黨が受入れてそれを改良的なものにして銃鋒を失敬した。

ために激烈な論争をすかして今日に及んだが、無産黨の振はなかつた理由は產業の不振と失業の増加とによつて爭闘に要する組合資金を得られず又た代表者の多數を立法府へ送ることもできず、労働者の現實の利害を遠く疎隔してゐる職業リーダーに岐途へ引つぱり廻はされてゐたためで、たとひ局部の争闘に勝つても結果は戰利品を伴はない紙上の勝利に過ぎなかつた。

資力のないものが奔命に疲れて共同利害觀念も稀薄になりかけてゐるところへ、國家社會

主義といつた社會主義でない社會主義が現はれて支那事變を利用して矛盾した分派主義に理論づけることができた。

これは無産主義の勢力を分流させることになつて、同じく資本主義排撃にしても微溫的なものであり、國體擁護を政綱の第一項に置くところは、古い温情主義の心臓に脈を搏たせたものである。

日本の温情主義はその屍體を片付けることがなかつたから、再生した、新らしき制度はソビエート思想を加味する米國の機械を中心として工場を組織し、消費力をそのままにして生産力を無限大に擴げた。

これは滿蒙から上海へ引火して國難が起つた時に生れた出来合ひ主義であるから長續きする可能性は持たないが、曇り勝ちの學説を據いで廻ることに厭きた人々には、これも目新らしいものであつたから舉國一致が續く限りは續くものとみるのが適當であらう。

併し本來が無理であるから混亂の起るのは當然であるが、日本にだけは××が起らないものとして安心する議論の根據は××××である。國難に向つては無産者も資本家も一致して

對外硬に清き一票を投じるのは××××もあるが、生きんがための×××も手傳つてゐる。國粹主義は舊道德を國體に結付けて××にまで逆及してそれを證明する。僕らの祖先を浦島太郎と——假りにさうしたならば——その太郎の系圖をつくつて龍宮の寫眞版を入れて、まだ念入りにも毀れかゝつた玉手箱を添えて身許を證明してくれる。

そんなものは經濟爭鬭を調停する甲第一號證ともならぬ、そんな古いものではない、矜威は目前に在る。

日本に於ける勞資共同の敵は米國の機械であり又た國內に輸入された機械である。何とかしてこの機械を葬つてしまはなければ、國境のない労働精神も國境のある資本主義も一括して倒れてしまふ、軍縮よりも機械縮である。機械縮ができなかつたら大砲を擧つ前に生産品を抱いて餓死するか、進んで市場を獲得するために戦争をするかの一途の一を撰まねばならぬ。政友會はこの機運を見たから後者を選んで選舉スローガンを掲げたら無産者も賛成して自黨の候補者を棄て、對外硬論者に投票した。

B

世界の失業者一億三千萬人、この大數は金を持たないで時間ばかりを持つてゐる人たちで全く購買力を失つてゐる。

彼らは機械のために金と物資とから絶縁されて貧乏と親類になつた。働けない人は日々に飢餓に迫つて行き、働く人でも月々に借金を増して行く。

百圓の借金が、手工業時代では十ヤードの織物代金で返済されたが、今は三十ヤードを持出さねば返済することができない。百圓が標準であつて十ヤードが標準でないから借金を持つ國は三倍の物資を提供せねばならぬ。貸した國は十ヤードを取つた残りの二十ヤードは餘剩として原價なしで外國市場へインヴェストメントをすることができる。ドイツの泣くのは泣くべき理由があるのだ。

英國は金融的に軍事的に米國に降服したにかゝはらず政治的にはまだ膨大な屬領を抱いてゐる。英國がいよいよ獨裁を回復する力がないとすればあの僚邦は實力以上の荷物であるか

ら、その支配権は何らかの形式によつて——、獨立、被占領——闇ひ取られねばならぬ。こゝに世界的大きな陥没地帯が現はれるであらう。米國に捧げられた供物は大きい。
米國が東洋問題に強い警告を發すると日本の株式は醜い瓦落を演ずる、何といふ體裁の悪い狼狽ぶりだらう。そんな弱い心底でも日本實業家の口ぶりは對外硬である、滿蒙事變でも上海事件でも實業家が率先して硬論を唱へたではなかつたか。しかも公債の發行は怖れる。
日本實業家の景氣觀測觀念は少しく訂正を要しないか。日本は米國の後に追随するものであつて米國に好況なくしては日本も不況を脱せられないと、まるで米國の隸屬根性から離脱してゐないが、かつて米國が好景氣の時に日本は不況のドン底にあつた、今米國が底なし沼に脚を突込んだ時に日本は漸く不況の底から這ひ上つたものだ。米國に追随のその反対に、日本と米國とは地理と同じく、利害も背中合せになつてゐるのだ。

C

手が顎へる、足もふるふ、心臓が高鳴る。心配し給ふな、君！、それは青春の氣分だ、全

身に若き血が漲つてゐる表徴だ、新日本の若人はそれでなくてはならぬ、全くだ、春の誘惑だ戀を感じてゐるのだ。

逢見すば戀しきこともながらまし音にぞ人をきくべかりける——全身にエネルギーが溢れて戀となるのだ、これは古今の歌だが、まだあるよ、詩經に……：

靜女それ妹なり、われを城隅に俟つ、愛すれども見えず、首を搔いて躊躇す……どうだ、處女と思つて油斷してはならないよ、だが、美しい女だ、なぜ遅いのだらう、約束の時間なのだが、どうしたのだらう。この時の君の胸は不安と希望とに充ちてゐるのだ、戀には焦慮は附きものだ、辛抱したまへ。まだ續きがあるのだ。

牧より夷を歸る、洵に美しく且つ異なり、女の美たるに匪す、美人の賄なればなり……ビクニツクから歸りよ、こんな美しい花を摘んでよ、これを貴郎にあげるわよ、美しいぢやない？——花が美しいのではない、贈つた女が美しいのだ。

君は青年日本の男性だ、體には若い血が流れてゐる、だから手も足もぞくと顎へるのだ。なに、さうではないといふのか、飢餓のためだつて、おや、色消しなことを云ふな、道

理で君の吭から通つてゐる息は秋虫のそれだ。君は餓死が苦しいといふのか、ちつと餓死に晒されて運命の終焉を待つことができるか、できないといふのだね、さうだらう、さうなくてはならない。では戦ふか、元氣を出せ！そのまゝに放任したら結論は死だ、しかも餓死といふ感歎のない死に方だ。

勞農主義にならうか、資本主義にならうか、どちらがいいかと考へてゐる間に君は死ぬよ冒袋の中に空氣を填めて死ぬか、砲弾を満喫して死ぬか、買うことのできない漬貨を破壊したら君は活きられるのだ。

D

人間が生れた時は裸であるが、生ると同時に産衣とともに法律が纏ひつく、私有財産制も國家の主義も法律の基礎となつてゐるから、自分の個性が戦争に反対であつても國民としては國家の方針に服従せねばならぬことを法律の名によつて命ぜられ、刑務所は個性を強く主張する異端者に向つて準備されてゐる。

米國には米國の法律があり日本には日本の法律がある、同じ人類なら同じ法律を持ちさうなものであるが國によつて法律が違ふ、法律を助けるものに國粹主義があり、道徳が修飾しえ教育が習慣づける。

僕らは國は傘下に一致しなかつたら國が亡びて大衆は他國の法律に支配される、自國の法律を破棄してもそれより尙悪い他國の法律が代つて坐を占めるから、法律に不平があつても國法に従ふことが賢明であるといふあきらめに到達する。

僕は京都で生れ東京で成長し、いま大阪で暮らしてゐるがゆゑに日本人である。この地理的偶然が僕をして日本人たらしめたのであつて僕が好んで日本に生れたのではない。

もし僕がロンドンに生れてゐたら今ごろは石炭産出量の少いこと、海上権益が他國に侵蝕せられつゝあること、紡績が日本工業の脅威を受けてゐること、金融中心が米佛に横奪されたこと、労働組合が餘りに横暴なこと、僚邦が本國の危難を助けてくれないことなどを憤慨して「次の問題」とちがつた論文を書いてゐるかも知れない。

僕の眼が黒くして、僕の頭髪が金色でないがゆゑに僕が日本人となつたのではない、僕の

眼が碧く、僕の頭髪が黒でなくとも歸化すれば日本人になれる。日本人となつたのは、そんな理由ではない、極めて單純な手續きが決定する、僕は戸籍によつて日本人となつた、理由は登録された戸籍的根據を出でない。兵役の義務も思想によつて盡すのではなく戸籍簿によつて徵集される。選舉權でもさうだ、そんな帳簿の骨組みで國家が組織されてゐるのだ。さういへば戸籍が主で僕が從屬者のやうだが、君！ 戸籍が僕を造つたのではない「もう、わかつてゐるよ」僕が生れて戸籍が作られたのだ「まだ戸籍か、くどいね」だが、戸籍が無かつたら僕は國家に盡すことができない、戸籍に支配されてゐるのだ。「もういゝよ」松島見物に出かけて旅館で原籍を偽つたら罪になるよ、これでは遊びに出かけたのか、容疑者となつて逃げてゐるのか、何だか戸籍に追跡されてゐるやうだ、そのだん支那人は戸籍が無いからあんな樂天的な無拘束な氣分になつてゐられるのだ、文明人は戸籍に魅入られてゐるやうだ。彼のが米国人となつたのも出たらめで、僕が日本人となつたのも漫然であつて基本不文律で釘付けにされてゐるのも亦だ先天的に敵同志でもなかつたが、お互に二國人が對抗して憎悪し合ふやうに戸籍が仲を割いてきたから、彼のがモンロー主義を唱へたら、僕らはアジ

ア主義を唱へるのだ、なぜならばアジアに住んで、アジアに戸籍があるからである。

人類的に大觀したら融和すべき理由が多く、戦ふべき要因は極めて少いのである、しかるに何ゆゑに戦はねばならぬか、そんな淺薄な質問は、その質問の中に解答を含んでゐるから解答する必要はないが、全世界が相互依存の氣にならねば正直に人道と平和とに執着してゐる國が先づ亡びるのだ。僕は日本が亡びるのが嫌やだから淺薄ながら地理的根據だけで彼れに抗争するのである。

こんな奥行のない抗争を續けてゐたと笑はれる時代が遠い將來にくるであらうと思ふ、世界が心からの平和に包まれる時代は、人間が殺戮に厭きてからのことである、僕らの一生にはそんな時代はあるまい、で、仕方がなく僕らは戦場で暮らすのだ。

E

國際關係を水平にして聯盟では一國一票の表決權を與へ、發言權も平等にする規約にはなつてゐるが事實は金が物をいふ。國際の回轉中軸が二つ、米と佛とで強制的に平和を世界に

突き付けてゐる。これに反対するものは武力で行かうといふのであらば平和でも何でもない。歐洲大戰にも乗り出した戦争好きが今は東洋へも出しやばつて、空の脅威を掲げて睨みつけるにおいては太平洋に面して國を建てゝゐるものは軍備の充實なくして一日も安眠することはできない。金で追ひまくられてゐる國は東に日本、西にイタリー、どちらも隣に強い金融的敵手を持つてゐる貧乏多產國である。

自然物の缺陷、狹小な土地、人口増加と植民地の不足、移民の被排斥、鐵、石炭その他重要原料の缺乏が何等かの手段によつて排除せられねばならぬ、と、イタリー代表は國際軍縮會議で、世界に向つて、特にフランスに向つて呼號した。

これは日本のことを代辯してくれたのかと思つたら、イタリー自身のことを云つてゐたのであつた。同じやうな國情からイタリーが先づ軍國化した、日本も聯盟から壓迫されたら同じ運命を辿るべきその草開きをイタリーがやつたのではないか。

戰勝國の中核を成してゐるフランスに對して、同じく戰勝國ではあるが不平の中心を成してゐるイタリーが戰敗國を聯ねて對フランス・プロツクを構成して、歐洲を平靜に復するた

めの、亂麻の緒は發見されない。

各國殊に特異性地理をもつた參加國が多いことだけでも、すでに結論の困難を暗示し、議案の廣汎なことが會議を氣體化せしめる。

會議の前に三十の大國が集つて方式案を作成した時にさへ列國は各自の條件を付けた同意で、開會前から案に眞劍味がなかつた。

軍縮會議でパナマ代表のいふところを聞け、「吾國は湖上に乘組員二名を搭載する軍艦一隻あるのみだ、これは動かせないから繫留してある、軍縮會議はこれをどうしろといふのか、どう縮少していくのか、決議によつては全廢するに當かない」——この徹底した國も立派に發言權も票決權も持てゐるのだ。

國際會議に蚊のやうに取り交うてゐる弱少國の正義論は強國の侵略を恐れる心理を基礎としてゐるから猜疑心が意見を支配してゐる、たとへば日支に事變が發生したら理非を検討することなく支那を擁護する。

強國が崇高な平和觀念から自身先づ軍備を擱出してもではなくして、空腹をかゝ

へながら年額百億ドルの軍備費を空に捧げる苦痛に堪へられないことが主たる參加理由で、經濟的苦境の一時逃れに過ぎない。

軍縮會議の膨大なる外延に包括される六大内容である人員、器材、豫算、報導交換、化學兵器、一般規定といつた複雜なものが、どういふ保有數字を嵌めて整理されるかより軍事的對立を却つて激化させはしないかの危惧が先に立つ。

『

軍縮規約はアングロサクソンの便宜に出來た強壓的獨裁的の成果で、「條約の名に値しない」とは日本のいふべきことを、これもイタリー代表がづけくと云つてのけた、佛伊は軍縮から賠償問題を環つて角逐を卓上に續けてゐる。

ファウシヨと云はれることを嫌つて、民主主義の啼き聲を出さうとするから日本代表の言葉は不透明である、日本ではそのつもりでも外國は公然と日本を軍國主義國家と呼んでゐるのだ、そんな表面の糊塗事をとしてゐるからイタリー代表のやうに思つたことを大膽に主張

することができないのだ。何の遠慮することがあるのだ。

國際は支那の不戰條約の精神に反する犯罪以上の不善意大過失を寬容して日本の隱忍を強いて、かくして支那を增長せしめ日本の權益に向つて攻撃的侵害に移らしめる、これは驚くべき非行であつて支那のやうな無組織な國家に對しては列國が教訓的に強制的に義務を守らせるやうに、國際の名において権利行使せねばならぬはずではなかつたか。日本の對支自衛手段は同時に對國際自衛手段であつて外交遊戯としては餘りに眞剣である、支那に日本の攻撃を不當とする理由が成立するならば、それ以上の正しさをもつて日本が自衛手段を取る正しさが成り立つ。

G

米國が丸腰になつて金貨根性を棄てない限り各國が競争して積みあげた最高の高塔は崩れない。各國から資本年賦償還の利子と配當とを米國に捧げるためには世界年產高の金の三倍を必要とする、そんなことは魔術の杖で黃金を産み出すにあらざれば出來ないことである。

米國の餘剩は年々に増加する、増加した餘剩は世界に向つて再投資される、その利子を支拂ふに金をもつてせねばならぬが、世界の產金高では及ばないことである。物品をもつて償還しやうとすれば米國には機械生産品が滯積してゐるから米國は關稅によつてそれを拒んで金をもつて支拂はせやうとする。

現在でも困つてゐる上に更に米國內に滯積せる機械生産品を持出して他國の重荷の上に重荷を加へ、それで負擔を軽くさせやうとする矛盾は、首縊を助けるために脚を引つぱるものである、この借金が踏み倒せないものなら永劫に解決の見込がない、見込のないものはどこまで追究しても解決ではない。

現在の國際交換は、その媒介を爲すべき金が不足なのである、一方に偏してゐるための不足であるから物々交換を許さないとすれば勢ひ「縁延べ」を行ふ外はないのであるが、長期に引延ばしたならば金利が嵩んで金の尺度が益々長くなる。

同時に禍亂を切棄てるのではなくして、禍亂を延長する方法である。

市場の購買力は、もう終點が見え透いてゐる、米國の機械大量生産品を金で消化させるや

うな市場はあり得ない、消費市場の擴張は決して望めないことであるから前途の破綻を學說で緩り合はすことができないため、經濟學者は立つて席を軍人に譲らうとしてゐる。

各國に軍縮を強いて、それによつてできた餘剰を米國に貢げといふのが本當の壯であらう米國は来るべき第二次世界大戰の戰死者のために大きな墓を掘りにかゝつてゐる。

金が正義より正しい時代である、金はないが正義ならいくらでも國際間に轉がつてゐる。米國が十個の正義簡條書を出せば、こちらからは二十個の正義を積みあげて對抗することは何でもない、正義は學者でいくらでも製造されるからである。米國が百億の正貨を出してみせたらこちらから、二百億の正貨を積んでみせる——ことはできない、正義は金より廉い。日本をも加へた世界は經濟異變を教ふことなく成行き主義で、行くところまで行かねばならぬが、道が米國はいことを考へた、それは流行心理學で右向けに方針を轉換したことである。

流行心理學といつても正しい意味の學問ではない、これまでの學說、歴史を無視して衆愚を煙に巻く、いはゞ煙幕のやうな、一名宣傳心理學又の名は應用心理學であつた。

黒い上衣に青いズボンがシーケだと暗示したら一週間目には全米國人の腰から上は眞黒に腰から下は眞つ青となつて白も黄も赤も無くなるであらう、二週間目には大西洋を越して、一ヶ月後には太平洋を越して、歐洲も東洋もヤンキーボーイは席捲されてしまふ、宣傳心理學は機械の助けを藉つて廣い範圍の人を、できるだけ下卑た流行に統一してしまふのである。この調子で、歐洲大戦前に英國の對ドイツ宣傳の故智を借りてきて、日本に世界征服の野心ありと叫んで國際反日ブロックをつくつた。

迷惑なる哉日本は僅かに南満の田舎鐵道を守るだけで懸命であるものが、世界征服なんかは蚊をして重爆弾を負はしめるより重荷である。米國が世界を征服するといへば聞へるが、日本では征服する方が餘り小さくして、征服せられるものが餘りに大きい、世界征服は夫子自身でやるがいゝ、日本に取つては餘りに夢である。そんな夢でも國際聯盟員に信じさせたのは米國の宣傳心理學である。

宣傳心理學、人氣轉換術、信用擴張論、景氣煽揚法と、手を換へて景氣を突張つてゐるが、僕らは米國富力の實體を見とどけたから、そんな宣傳的洞窟に乗つてはならぬ、陰氣よ

リ陽氣に、實勢より虛勢に、すべて氣分であつて實相ではない。

個性の墮滅であり哲學の破壊であるが、力の決定主義は今全米に號令を下してゐる——彼は今何を呼號してゐるか——。國內における階級争鬭をやめよ、國外における、特に東洋における殺戮に一致する用意をせよ、と。

この宣傳が感情を行過ぎて、政治的手段でそれを制止することのできない程度に逸脱した時が××戦争である。國內で性的に男子を征服した婦人は眞先にこれに賛成した、婦人の力は米國において恐るべきものである。その婦人が反日宣傳の網に容れられてしまつた。精銳な飛行機は三萬五千フキートを飛べる、その機能から推したら日本の爆撃粉碎は可能であるといふ肯定線に乗つたといつて彼らは歡喜の聲をあげてゐる。歎喜の聲は排他憎惡の聲であるが彼等はこれを隣人愛の叫びだといふ、日本も仕方がないから米國機の訪問に對して歓迎の意を表し、××××を撮影されても萬歳といふ。

この飛行機の飛び廻はるのも宣傳心理學の應用ださうだ。その部隊編成が機械構成と同じ組立てどあり將帥の命令が動力である、動力が通ぜられたら一齊に活動する仕掛けに整頓せ

られてゐる、この物騒な制度に不服を唱へるものがないのは宣傳心理學で製造せられた輿論である。この輿論が日本に對して決定的非難を浴せてゐる。

米國以上に變體心理の持主は支那人である、あの交通不便な大陸でありながら上海で排日を一呼すれば雲南、四川、山西の山奥まで反響して三週間を出でないうちに日支貿易表は數字的に排日の効果を示す。

こんなもの輿論といひ、群衆心理といひ、流行といひ、何といつてもいゝが、何の認識もなく排斥に一致する。保守のやうであり突飛のやうであり、平和民族のやうであり、好戦国民のやうであり不可解の人々である。國家が變調になる時は國民の心理狀態が先づ變態になる、いい、米國の相棒である。

米國の好戦的活動力は張り切つてゐる、國內には消化しきれないから相手を物色して日本を得た、日米對抗の結論は戦争だと、彼らはさう極めてしまつてゐる、彼らは直線だが、日本の方針はまだ曲線的であつて日米戦の必然性を信じてゐないものもあつて、和戦兩様の陣立てといった煮え切らないことをいつてゐるものさへある。

日本ほど國論に自我説を發揮する國民はない。平和論者、戦争主義者、無抵抗論者、崇露排米とその反対と、排支と親支と、左傾と右傾と、こんな分野が、それ／＼相當の傾聴者を持つて競ひ立つてゐた。

日本は過去の不景氣を清算することなしに第二産業革命の階段に乗りかゝつた、乗り切らないうちに滿蒙と上海とに事があり、平時における亂雑な思想を統一して漸く或る決心に纏めをつけた。かくして吾々は白人金融帝國と鐵火的外交を開始せねばならぬ非常時に遭遇した。

僕らの希望は割合に澹白である。

アジアの安定は我々の努力に對する報酬であり、日支が心から融け合つて始めて我々の犠牲の一切が償はれる、これは日本が有色人種に盡すべき警察的奉仕の外に何物もない。

昭和七年四月五日印刷

昭和七年四月十日發行

著作者 北村佳逸

大坂市西區阿波座下通二丁目卅六番地
大坂市西區阿波座二番町一一番地

定價金壹圓

送料八錢

製許複不



上海事變のその次の問題

印 刷 者 堀 越 幸

大坂市西區阿波座二番町一一番地
日本印刷製本株式會社

發賣元

大坂市西區阿波座下通二丁目卅六番地
東京市神田駒込町一丁目二番地

改 善 社

電話新番七五九三九番

北村佳逸著

日本は衰へるか！

四六版 三百三十頁 第五版 定價金八拾錢

高級讀書子を喰らせた快著!!

發行所

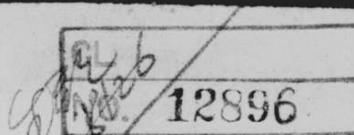
大阪市西區阿波座下通二
東京市神田區錦町一ノ二

改

善

社

振替大阪七五九三九番
電話新町一六二五番



343.17

